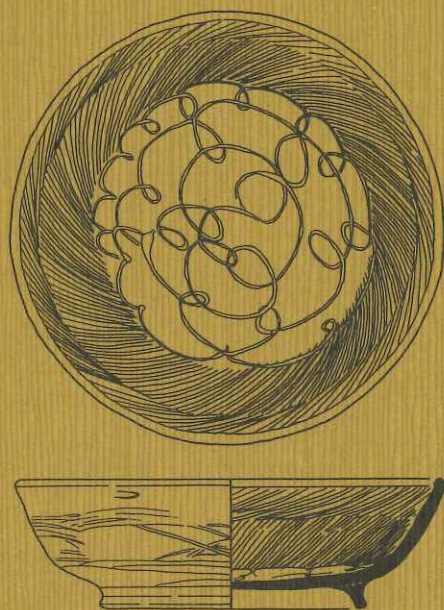


栗東町埋蔵文化財調査

1990年度 年報 II

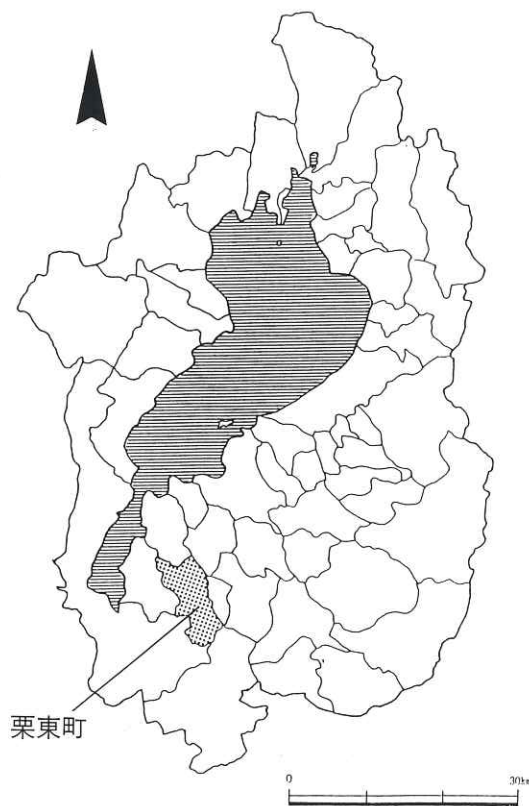


1992

財団法人 栗東町文化体育振興事業団

栗東町埋蔵文化財調査

1990年度 年報 II



1992

財団法人 栗東町文化体育振興事業団

例 言

1. 本書は、財団法人栗東町文化体育振興事業団が、1990年度に実施した小柿遺跡・狐塚遺跡の発掘調査、および栗東町教育委員会による国庫補助事業地山古墳群発掘調査の成果報告である。
2. 本書の刊行は1991年度事業で実施し、『1990年度年報』を補足するものである。
3. 調査の体制は以下のとおりである。

小 柿 遺 跡	狐 塚 遺 跡	地 山 古 墳
(財)栗東町文化体育振興事業団 理 事 長 武邑 尚邦 常 務 理 事 田中 利一 事 務 局 長 仙石 龍岳 埋文調査課係長 平井 寿一		栗 東 町 教 育 長 水野 清 教育委員会 教 育 次 長 山本喜三雄 社会教育課参事 仙石 龍岳 同 課 係 長 宮城 安治 同課主任技師 清水 好洋 (財)栗東町文化体育振興事業団より派遣 佐伯 英樹
埋文調査課技師 近藤 広	埋文調査課技師補 雨森 智美	

4. 現地発掘調査は、近藤・雨森・佐伯が行った。
5. 本書の執筆は、第1章を近藤、第2章1～3、5を雨森、第2章4を井上優（栗東町歴史民俗博物館学芸員）、第3章を佐伯が行った。また、全体の編集を近藤が行った。
6. 現地調査および整理作業については、下記の方々の御協力を得た。
 小柿遺跡 佐野明治（仏教大学）、千代友厚（大阪学院大学）、森智美、上田和江、大岡道代、教野妙子、辻井一二美、堀部アキ子、西村憲子、牧野富子、横山こと
 狐塚遺跡 西前悠、今村梅子、井上妙子、竹村ヒロ子、西村寮子、久徳良子、木下政子
 地山古墳群 吉岡英一郎（花園大学）、奥村聡（京都コンピュータ学院）、板東孝夫、角健一（立命館大学）、平松文治、国松好子、山本美知子、吉田かつ子、中村博子、西田百合子、千代清美、井上良子、西岡たよ子、川崎うた、木嶋とみ子、平松しず子
7. 掲載写真のうち、遺構写真の一部および遺物写真の撮影にあたって、栗東町歴史民俗博物館松村浩、井上優の御協力を得た。また、一部の遺物復元にあたっては、同館調査員畑本陽子、整理員松山真也、田中たまき（京都精華大学）の御協力を得た。
8. 遺構の略号を使用する場合は、奈良国立文化財研究所の方式による略号を使用した。
9. 図面に使用した方位は、特に明記しないかぎり、全て磁北である。
10. 本書で使用した標高は、T P（東京湾平均海面高度）である。

目 次

例 言

目 次

第1章 小柿遺跡

1. 位置と環境	1
2. 調査の経緯	2
3. 調査の概要	4
4. 考 察	19
5. 小 結	23
図版1～6	25

第2章 狐塚遺跡

1. 位置と環境	31
2. 調査の経緯	32
3. 調査の概要	34
4. 考 察	42
5. 小 結	43
図版1～4	45

第3章 地山古墳群

1. 位置と環境	49
2. 調査の経緯	51
3. 調査の概要	51
4. 小 結	60
図版1～8	61

のは、下鈎遺跡をはじめ、中沢、坊袋遺跡等の集落が出現、拡大する中期後葉になってからである。下鈎遺跡では、1983、1986年度の調査で、V字状を呈する幅3m、深さ2mの溝が検出され、環濠集落の存在が想定されている。後期においても、下鈎および坊袋遺跡で、環濠もしくはそれらしきものが確認されている。注目すべき遺物としては、1989年度の調査で、下鈎遺跡（神ノ子地区）の流路から銅鏃6本、石剣の他、銅カス片が出土している。

〈古墳時代〉 前期（庄内～布留式併行期）の建物としては、下鈎遺跡で掘立柱建物が確認されている程度あるが、流路、溝の検出は多く、小柿、中沢遺跡等の調査では、農具を中心とする多量の木製品が出土している。中期から後期にかけては、下鈎、中沢遺跡で竪穴住居が確認されている。墓域としては、中沢遺跡の調査（1990～1991年度）で、墳丘を削平された古墳が5基以上確認されている。隣接する小柿遺跡では、小槻古墳群と称した9基の古墳が伝えられており、1982年度の調査では、古墳の周溝が検出され、円筒形埴輪、衣蓋形埴輪の他、勾玉が出土している。また、狐塚遺跡の安養寺地区では、1991年度の調査で、木製埴輪をもった帆立貝式古墳をはじめ、方墳が密集して確認されている。

〈飛鳥・白鳳時代〉 1986年度の下鈎遺跡の調査で、方位をそろえた掘立柱建物が3棟確認されている他、上鈎遺跡（1991年度調査）の井戸から須恵器と共伴して、斎串等の祭祀遺物が出土している。

〈奈良時代〉 下鈎東、上鈎遺跡で、倉庫と考えられる総柱の掘立柱建物が検出されている。また、狐塚、小柿遺跡で井戸が検出されており、狐塚遺跡では、その中から墨書土器がまとまって出土している（本報告第2章狐塚遺跡参照）。

〈平安時代以降〉 狐塚、中沢、上鈎、下鈎遺跡等、ほとんどの遺跡で遺構、遺物が確認されている。中心となる時期は、12世紀後半から13世紀にかけてのことが多い。中でも狐塚遺跡（川辺地区）は、12世紀から16世紀にかけて、溝で区画された屋敷がまとまって検出されており、中世村落の形態を知る上で、重要な遺跡である。また上鈎遺跡では、「鈎の陣」（1486年）との関連が伺える同時期の屋敷跡が確認されている。

2. 調査の経緯

今回の調査地は、滋賀県栗太郡栗東町大字中沢字大月113-1に所在する。調査は、石田謹一郎氏が計画する共同住宅建設に先立つ調査である。隣接する南側の下水道工事に伴う事前調査で、古墳時代の遺構、遺物が確認されていたので、本調査地においても、同時期の遺構の存在が予想されていた。調査面積は、946㎡のうち約460㎡について発掘調査を実施した。現地調査は1990年4月17日から同年6月1日にかけて行われた。

調査日誌 (抄)

- 4月17日 重機により表土除去、遺構検出開始。レベル基準設定。
- 4月18日 遺構検出状況写真撮影。
- 4月19日 排水溝づくり。遺構掘削開始。併行して図面、写真撮影作業を行う。(5月31日まで続く)
- 4月21日 測量のためのくい打ち作業。
- 5月26日 1/20遺構平面図作成開始。
- 5月23日 調査区全体清掃。全景写真撮影。
- 5月28日 遺構図にレベル記入。
- 5月31日 掘立柱建物等の柱穴断ち割り作業。(図面、写真撮影)
- 6月1日 道具の運搬。埋めたて開始。
- 調査終了



図2 調査地位置図 (1:2,500)

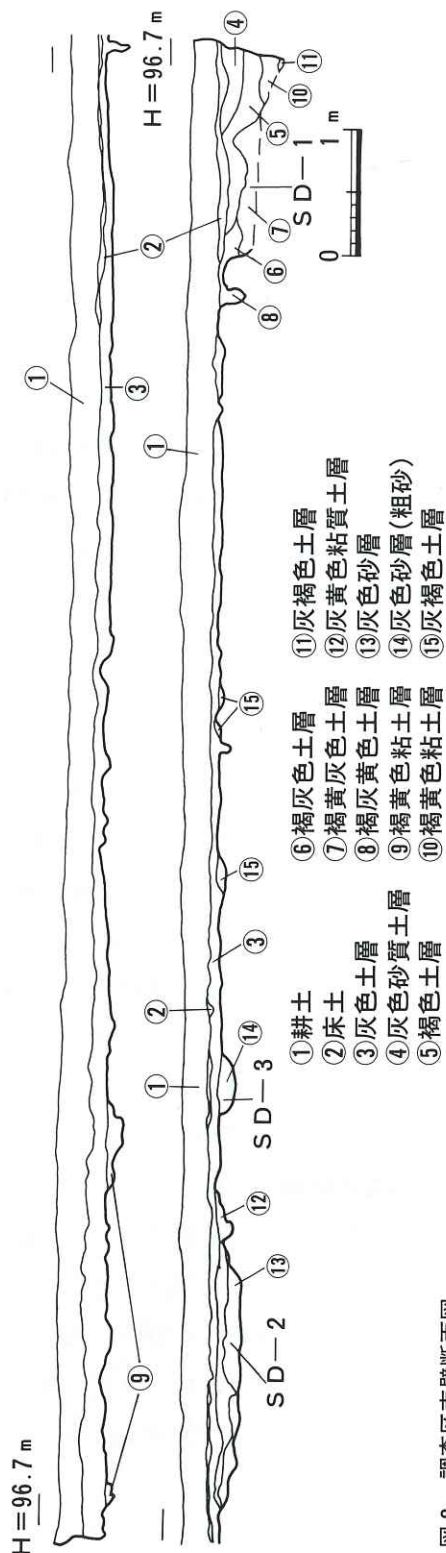


図3 調査区南壁断面図

3. 調査の概要

(1) 基本層序

上から約30cm下までが耕作土と床土で、その下に約5～10cmの灰色粘土層が堆積し、黄色土地山に到達する（図3）。

(2) 検出遺構

検出した遺構は、図4に示したとおりで、以下主な遺構について述べることにする。

SH-1（図5・図版2-4・5）

調査区北壁ほぼ中央に、半分かかった状態で検出された。平面形は、隅丸方形を呈するものと思われ、大きき約 5.8×3.2 m以上、深さ約10～20cmである。支柱穴は2ヶ所で検出しており、大ききはいずれも径約25cm前後、深さ60～70cmである。付属施設としては、床面中央に地床炉をもち、周囲には幅40～80cm、深さ10～15cmの壁溝をもつ。南側のコーナーには貯蔵穴が存在し、中から甕と鉢がセットで出土した（図6・図版2-8）。また、南辺中央付近から中心に向かって土壇状のくぼみと、テラス部分が存在するが、入口部分であった可能性が考えられる。

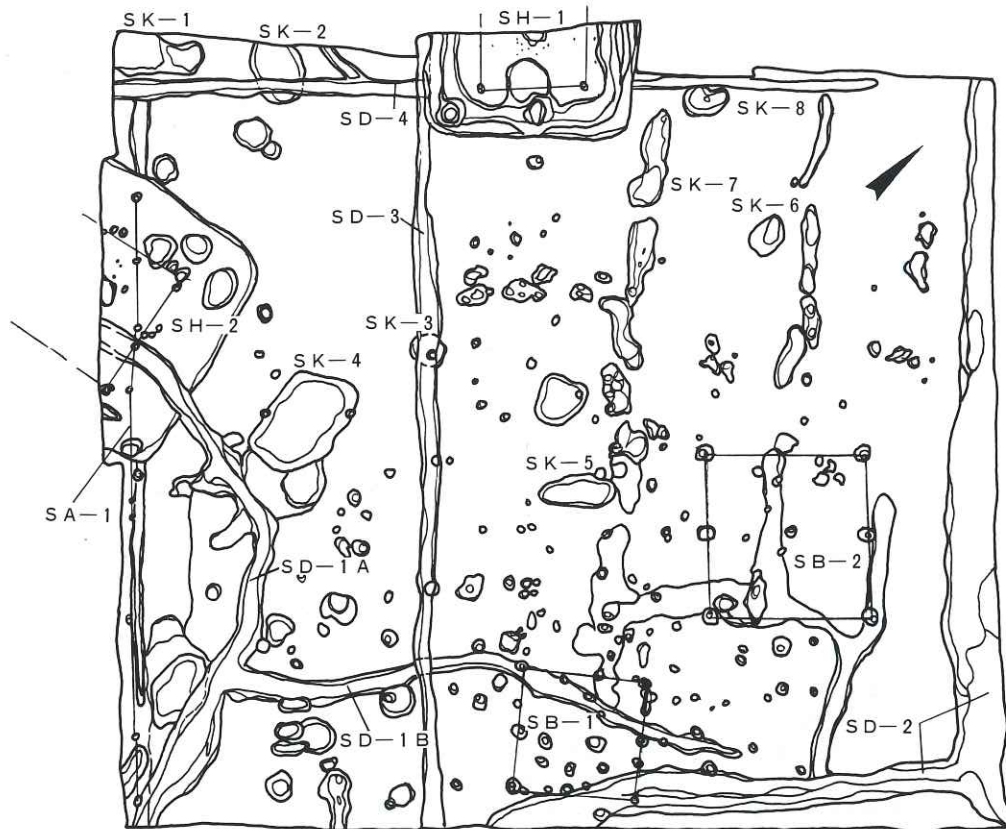


図4 遺構配置図

SH-2 (図10・図版2-6)

調査区東壁やや北よりに、一部かかった状態で検出された。平面形は、隅丸方形を呈するものと思われる。大きさは、約4.9×3.9m以上、深さ15~20cmである。主柱穴は2ヶ所で検出しており、建て替えの痕もみられる。付属施設としては、床面中央に地床炉をもち、北辺と西辺のコーナー付近に3つの土壇をもつ。壁溝は存在しない。

SB-1 (図9・図版1-1)

調査区南ほぼ中央付近に存在する。2間×1間(東西3.3m、南北3.2m)のほぼ正方形プランをもつ。柱間は、東西2m、南北2mである。柱穴の掘り方はほぼ円形を呈し、径約30~40cm、深さ約40~90cmである。柱痕(図版2-1・2)が4ヶ所で認められた。

SB-2 (図9・図版1-2)

調査区東側に位置する2間×1間(東西約4.4m、南北約4m)の建物である。柱間は、

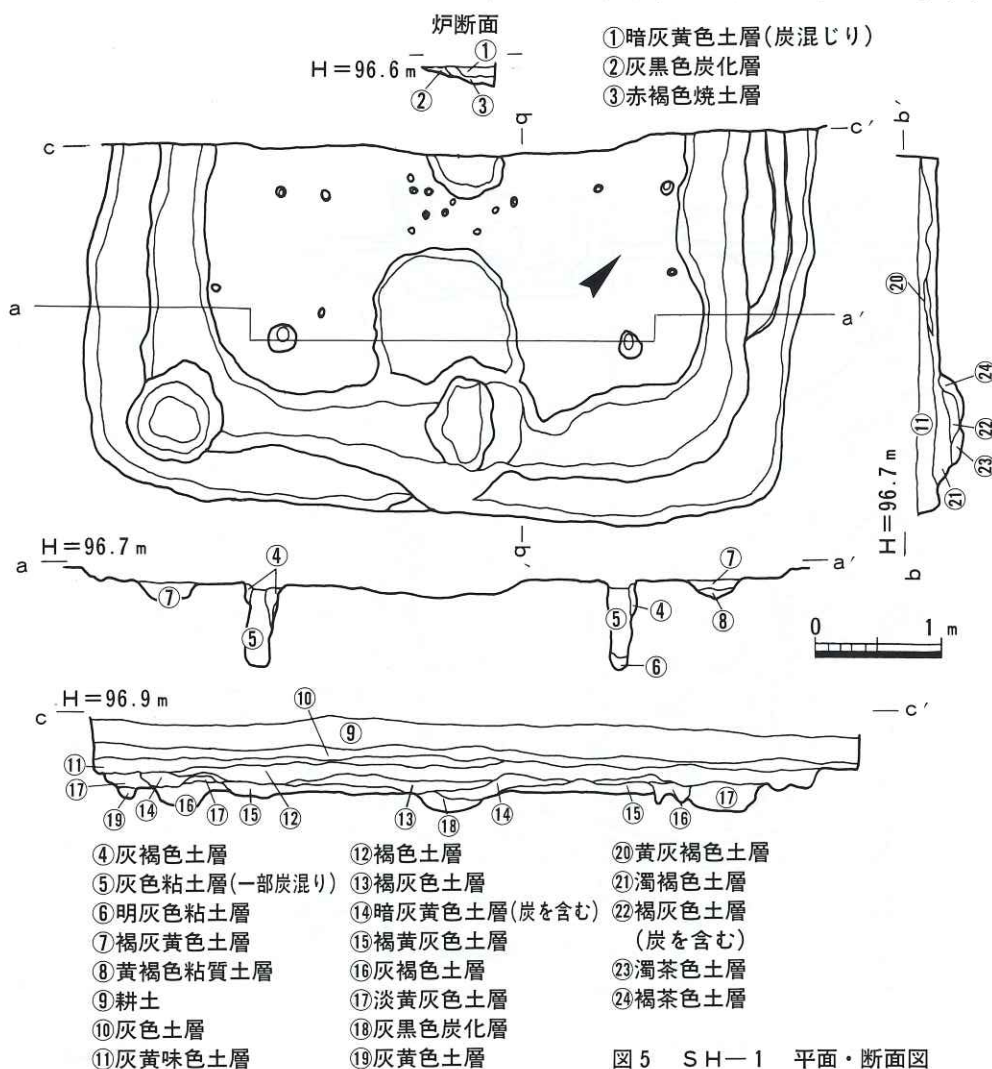


図5 SH-1 平面・断面図

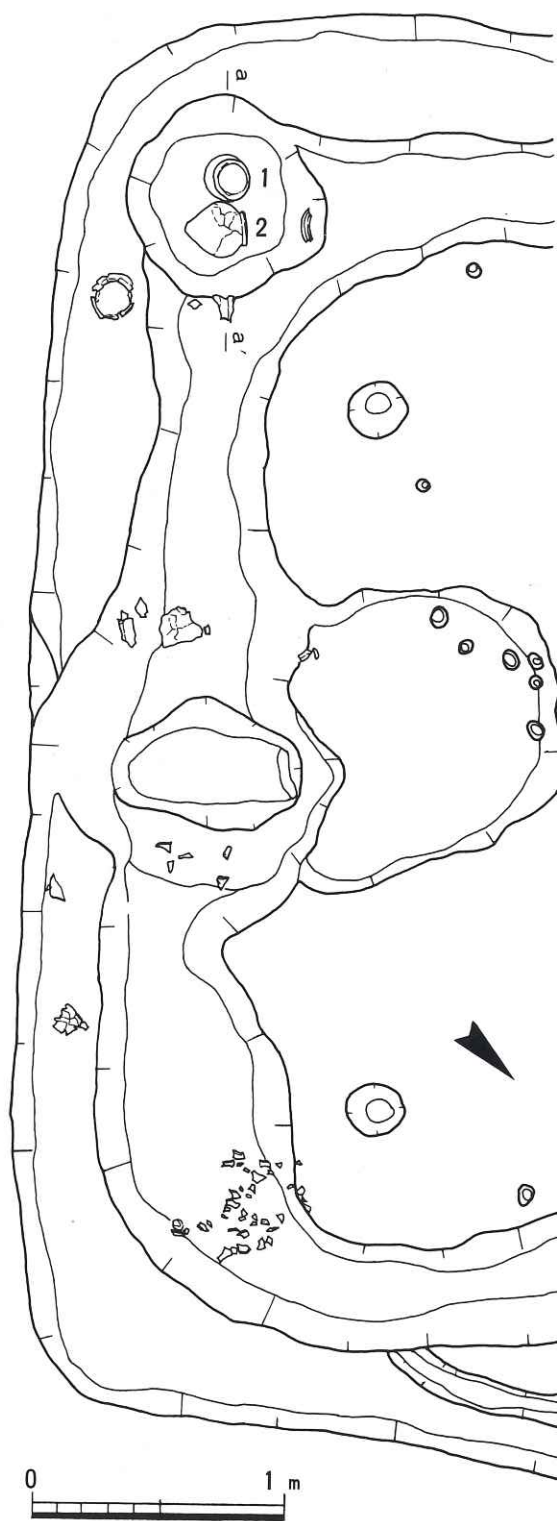


图6 SH-1 遺物出土状況図

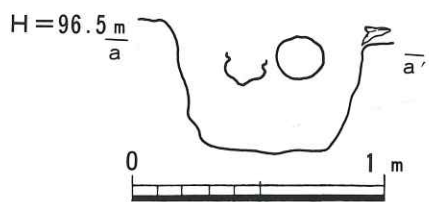


图7 SH-1内土坑 遺物出土状況断面図

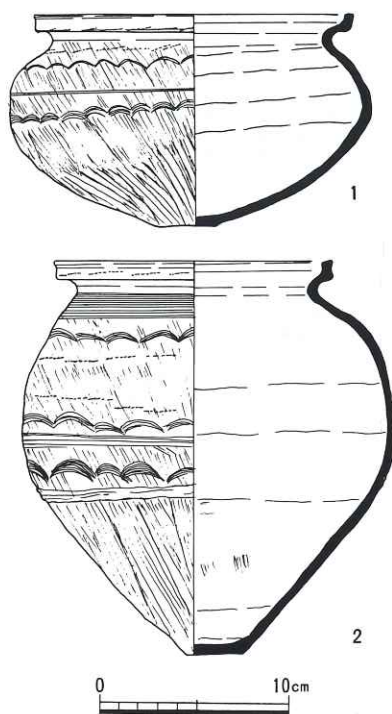


图8 SH-1内土坑 出土遺物

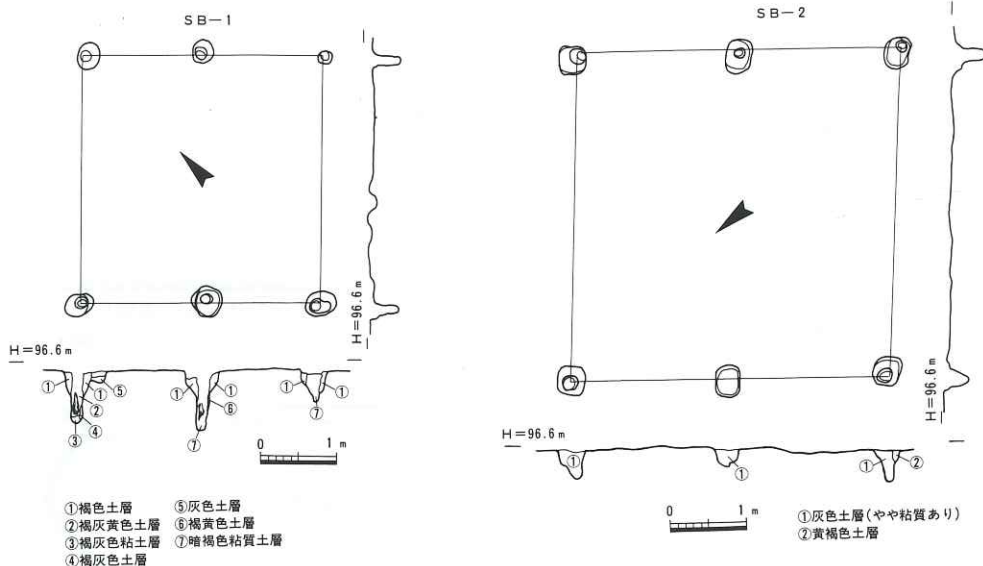


図9 SB-1. SB-2 平面、断面図

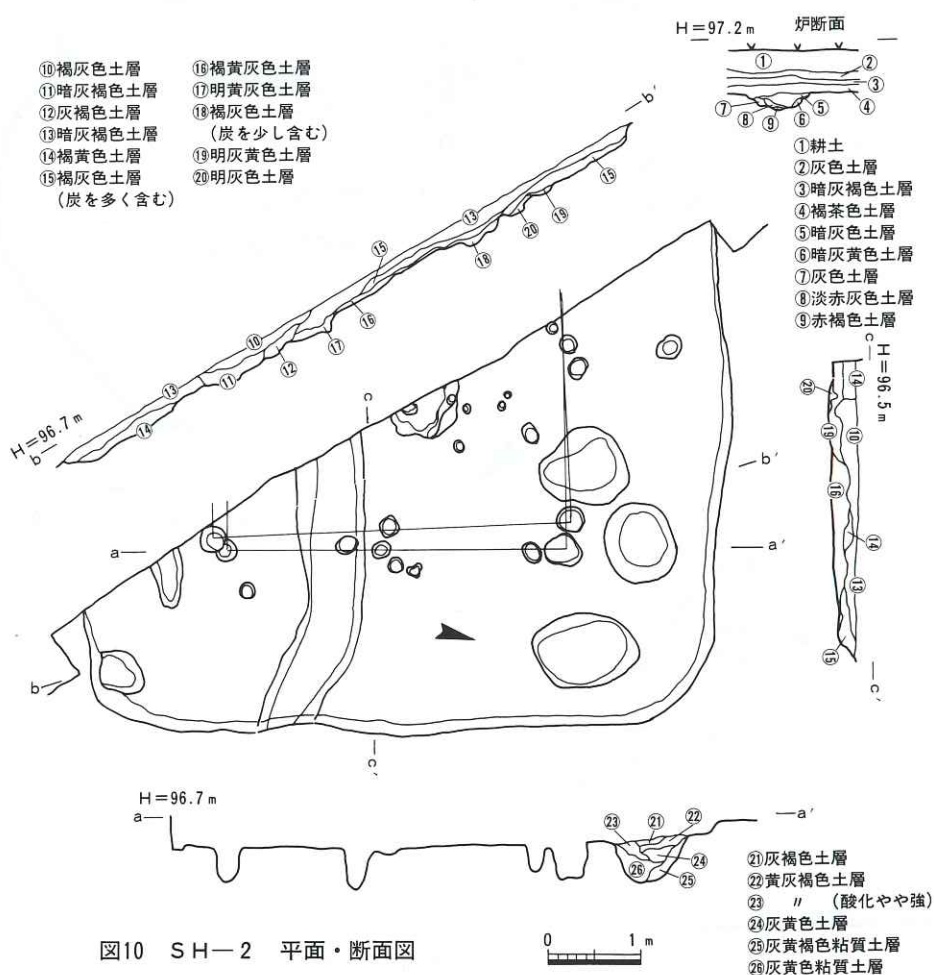
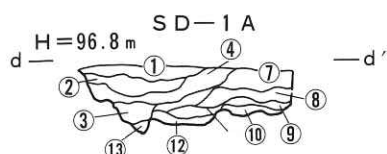
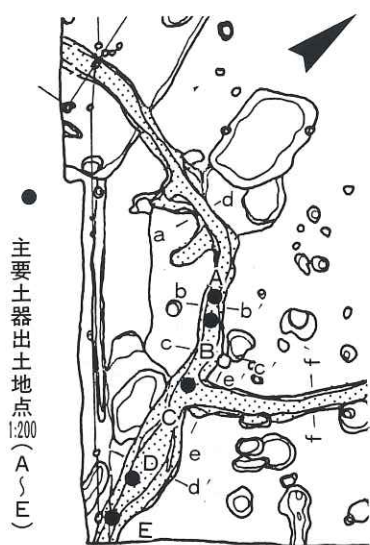


図10 SH-2 平面・断面図

東西約2m、南北約4.3mである。柱穴の掘り方は、径約40cmほどの隅丸方形で、深さは約35~40cmである。

SD-1 (図11・図版1-4、5)

南から北へ向かって延びた後、約4mいった地点でひとつは東へ延び、もうひとつは約9mの地点で西側へ直角気味にカーブし、SH-2を切って延びる。前者をSD-1B、後者をSD-1Aとする。幅は、約40~130cm、深さ20~80cmである。遺物の大半は、SD-1Aから出土している(図11)。なかでも、手焙形土器の出土状況(図版2-7)は炭化物が



- ①褐色土層
- ②褐灰色土層
- ③褐茶灰色土層
- ④茶灰褐色土層
- ⑤褐黄灰色土層
- ⑥黄褐灰色土層
- ⑦褐色土層
- ⑧褐灰色土層
- ⑨灰色粘土層
- ⑩明黄灰色土層
- ⑪黄灰色土層
- ⑫灰褐色土層
- ⑬灰黄色土層

図11 SD-1 平面・断面図

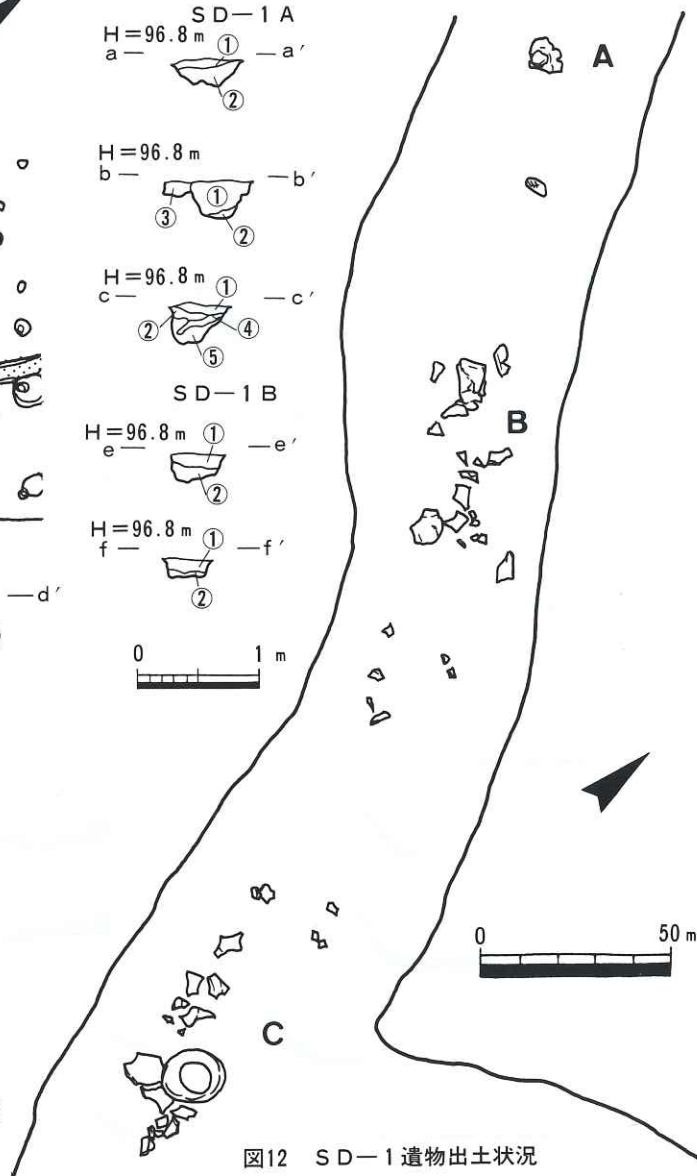
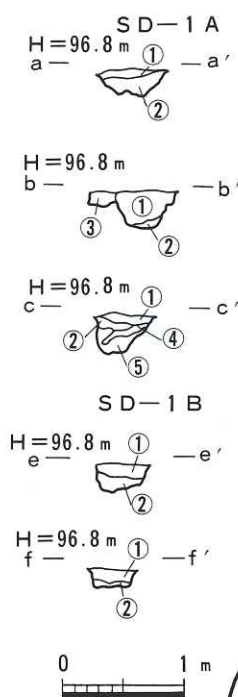


図12 SD-1 遺物出土状況

堆積しており、用途を明らかにするうえで注目に値する。

SD-2 (図13・図版1-2)

調査区南辺中央から東へ向かって延びたあと、東辺コーナー付近で直角に折れ、北へ延びる。東西方向をSD-2 A、南北方向をSD-2 Bとする。検出長は、東西約13.5m、南北約19.5mである。幅は、約40~70cmで、深さ約5~20cmである。遺物は主にSD-2 Aから出土し、SB-1が存在する南側付近で、奈良時代前期の土器が集中して出土した。

SD-3 (図4)

東西方向に延びる溝で、検出長約20m強である。幅は約50cm前後で、深さ約10~15cmである。溝の方向は、栗太郡条里(N33°-W)とほぼ一致する。時期は不明である。

SD-4 (図4)

南北方向に延びる溝で、検出長約20m強である。幅、深さ等、ほぼSD-3と同じである。溝の方向は、栗太郡条里(N-33°-W)とほぼ一致する。切り合い関係からSD-3より新しいが、時期はやはり不明である。

図13 SD-2 遺物出土状況

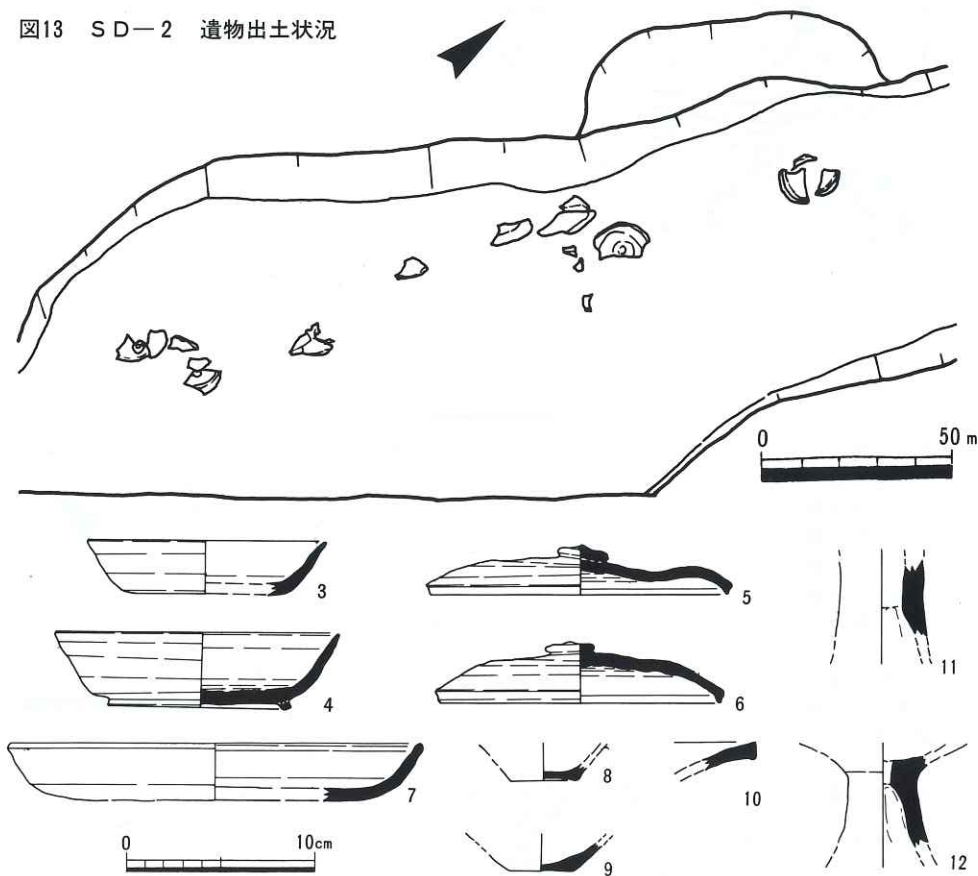


図14 SD-2 出土遺物

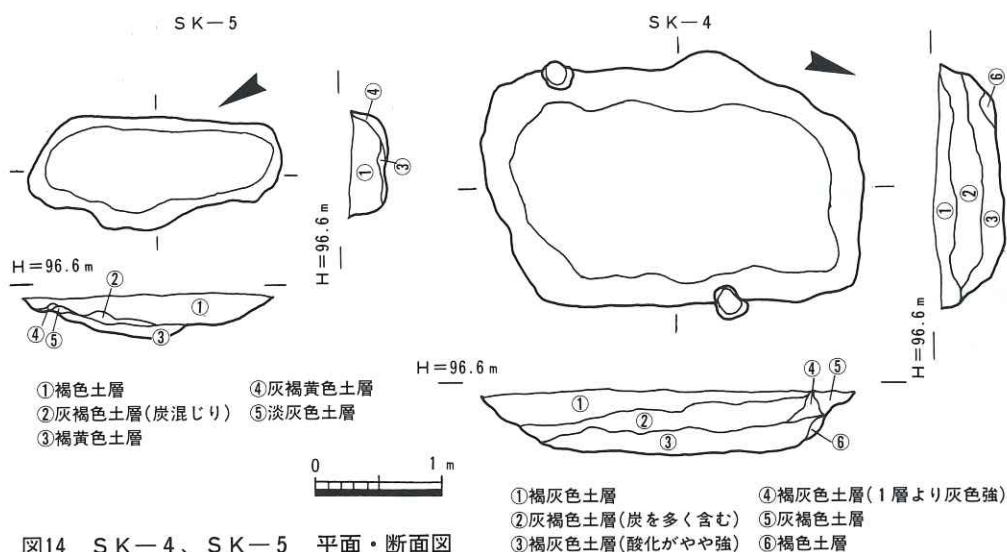


図14 SK-4、SK-5 平面・断面図

SK-1 (図4)

調査区北壁コーナー付近に位置し、平面形は、楕円形を呈する。大きさは、約 1.8×1.2 mで、深さは、15~30cmである。

SK-2 (図4)

調査区断面北壁と西壁のコーナーに位置する。平面形は不整形円で、大きさ約 1.0×2.4 m、深さ約15cm前後である。

SK-4 (図14・図版1-4・5)

調査区の西側に位置し、方位は南北方向に軸をもつ。平面形は隅丸方形で、大きさ約 1.9×3 m、深さ約50cm前後である。東側と西側の肩口に柱穴の可能性をもつピットが認められる。遺物は、北側斜面に、上からなだれこんだような状態で出土している。

SK-5 (図14)

調査区の中央付近に位置する。平面形は、楕円形を呈し、大きさ約 1.9×0.9 m、深さ約10~35cmである。

SA-1 (図4・図版1-4)

調査区東壁にそって存在し、方位は栗太郡条里とほぼ一致する。8間からなる柵と思われる、検出長は約16m弱で、柱間は、北から1.6、1.7、1.6、2.3、1.0、2.7、3、1.7mである。SH-2内部分の4本間とSD-1Aと接する付近は、ほぼ等間隔である。そのすべてが連らっていたのか、部分的に切れていたかは不明である。

(2)出土遺物

遺物には、土器と石器が存在する。土器については、時代を追って説明する。

縄文時代後期（図21・図版6）

深鉢の口縁部と思われる破片が2点出土している。(193)は、波状口縁をもつもので、SH-2内の土坑から出土している。(192)は、水平口縁をもち、外面は沈線によって区画された中にRLの縄文をかすかに認める。時期は、いずれも中津式併行と考えられる。

弥生時代前期（図19・図版6）

甕 (151) 包含層から出土したもので、形態は、やや胴部が張った体部から短く外反する口縁部に続く。口縁端部に刻みをもち、頸部には2条の沈線を施す。体部外面は磨滅が著しいが、一部にハケ目が認められる。

弥生時代終末期～古墳時代初頭（図8・16～21・図版3～6）

SH-1、2、SK-4、5、SD-1から主に出土しており、今回出土している土器の9割以上を占める。器種構成、文様構成等については、4. 考察を参照されたい。

甕 受口状口縁をもつものが大半を占める。口縁および、体部に施される文様から細分ができる。口縁では、列点文を施すもの(2、78、171)や沈線文を施すもの(15、111、139)、棒状浮文を付属するもの(110)、文様をもたないもの(13、20～23他多数)が存在する。体部では、全体を知り得るものが(2)しか存在しないので、体部の第一施文部によって細分すると、列点文を施すもの(14、78)、直線文を施すもの(2、17、162)、円弧文を施すもの(24)、斜線文を施すもの(141)が存在する。また、底部のみ残存しているもの(28、29他多数)も何点が出土しており、中にはタタキを外面に施したもの(59)が存在する。

壺 受口状口縁をもつもの(89、173)と頸部から口縁に向かって外反しながらのびる広口壺(150、182)が存在する。口縁部は端面をもつもの(150)と、丸くしあげるもの(182)が存在する。

鉢 受口状口縁をもつもので、口径と体部最大径がさほど差がないもの(25)と、口頸のほうが、体部最大径より小さいもの(1)がある。また、口縁外面および、体部に文様をもつもの(1)と、もたないもの(25)に分けられる。

高杯 口縁がゆるやかに外反するもの(50、128)で、脚部は逆ハの字状にひらく。調整は、内外面に縦方向のヘラミガキを施す。

器台 垂下口縁をもつもの(62～64、97、98)と、口縁に向かって直線的に外上方へひらくもの(187)が存在する。前者は、端面に文様をもたないもの(62、97)、浮文を付属したもの(64)、沈線を施すもの(63)、沈線を施した後に浮文を付属したもの(98)がある。

甗 底部から口縁に向かって大きくやや内湾気味にひらくもの(100)と、体部の中央や

や上方から直立気味に、内湾しながら口縁とつづくもの(138)が存在する。調整はいずれも外面にハケ目を施す。

手焙形土器 全形を知り得るものが1点(191)と、笠部のみ残存しているものが2点(33、152)出土している。形態は、鉢部が残存しないものも含めて、受口状口縁形[㊦]に含まれるものと思われる。(191)は、斜格子文を主体とする文様構成で、(33)は、波状文、列点文、直線文を組み合わせたものである。(152)は、斜線と直線を主体とした文様構成が想定される。

古墳時代後期(図19)

須恵器の高杯、杯身、杯蓋が包含層から出土している。

高杯(155)は、脚端部のみ残存するもので、陶色TK43[㊦]併行に相当する。杯身(156)は、体部とたちあがりの一部が存在しているのみで、時期は特定しにくい。杯蓋は口縁部と天井部の境が明瞭なもの(154)と天井から口縁に向かって丸みをもつもの(153)が存在する。前者は、陶色TK43併行、後者は、陶色TK217併行にそれぞれ比定されよう。

奈良時代以降(図14、19・図版6)

SD-2より、須恵器の杯身、杯蓋、土師器の皿が出土している。

須恵器の杯身は、高台を付すもの(4)と、付さないもの(3)が存在する。形態は、いずれも底部から口縁に向かって直線的に外上方へのびるものである。また、杯蓋は(5、6)は、天井部に丸みをもって口縁部へと続く形態で、天井部中央に扁平なつまみを付属する。

土師器の皿(7)は、底部から口縁に向かってやや外反しながらのびるもので、口縁端部は丸くしあげている。時期は、須恵器、土師器ともに平城I[㊦](陶邑TK48)の特徴に類似することから、8世紀前半頃に比定できる。

灰釉陶器の椀(157)が包含層から出土している。口縁部を欠損しているが、口縁に向かって内湾気味に外反していく形態になるものと思われる。高台は、逆台形状を呈している。時期は、折戸53窯期の特徴に近いことから10世紀中～後半頃のものと考えられる。

石器(図21、図版6)

石器には、石斧(189)と砥石(190)が存在する。石斧は、太型蛤刃石斧で、刃部の一部と基部を欠損している。大きさは現存で、8.4×5cmで、厚さは3.3cmである。出土した遺構は、SK-4である。

砥石は、SH-2から出土したもので、使用面は一面のみである。表面はすべらかであり、かなりよく使用されていたことが伺える。大きさは現存で、10.3×4.5cm、厚さ5.6cmである。

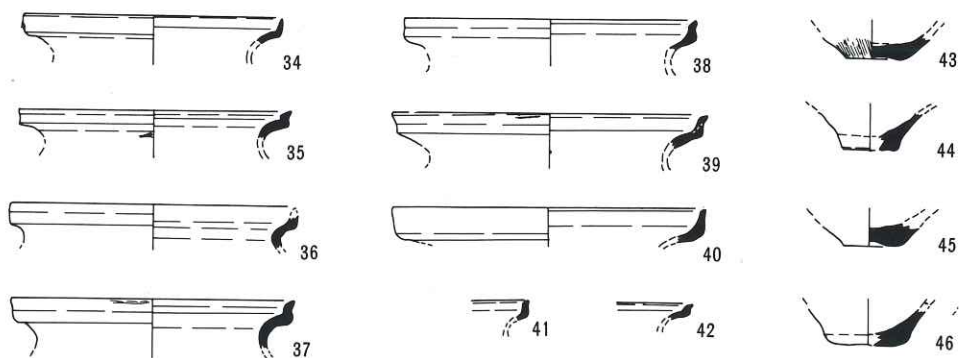
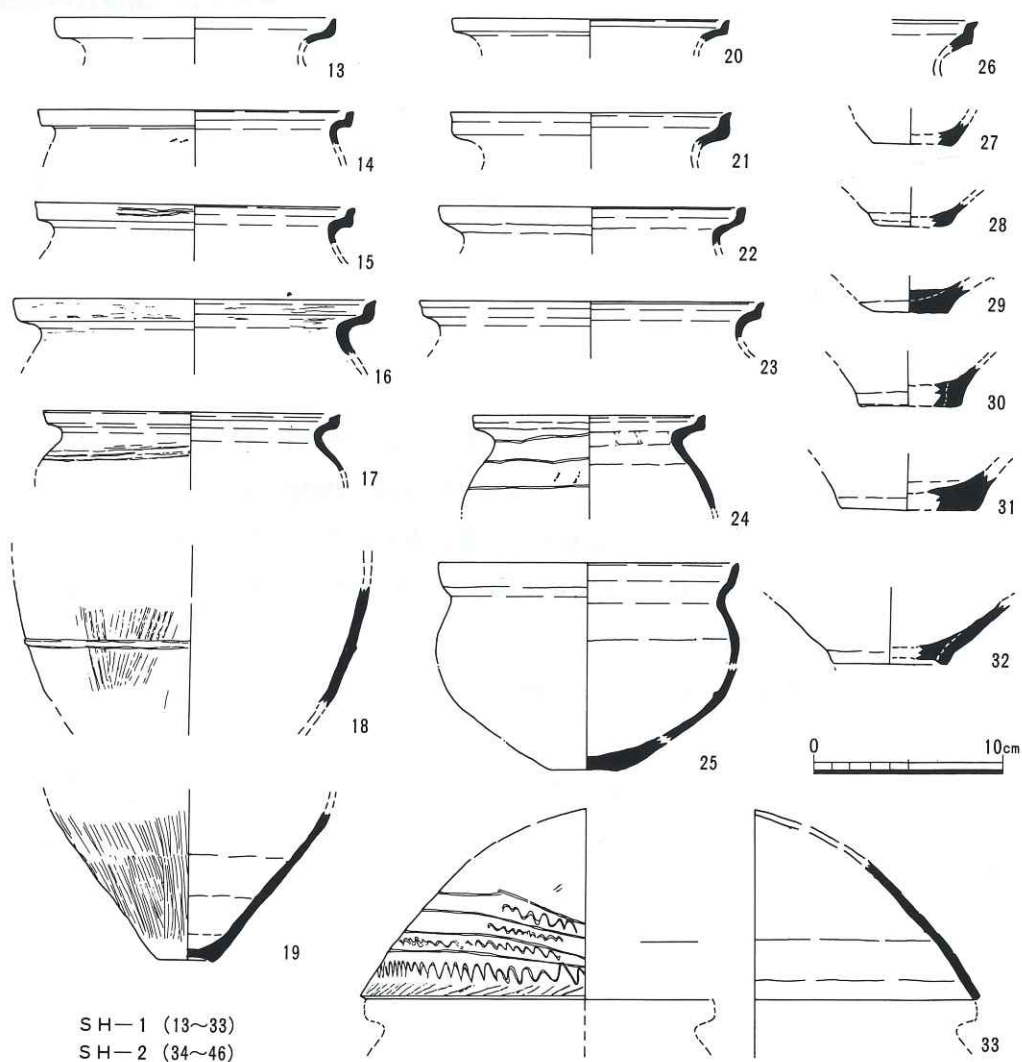


图16 SH-1. 2 出土遺物

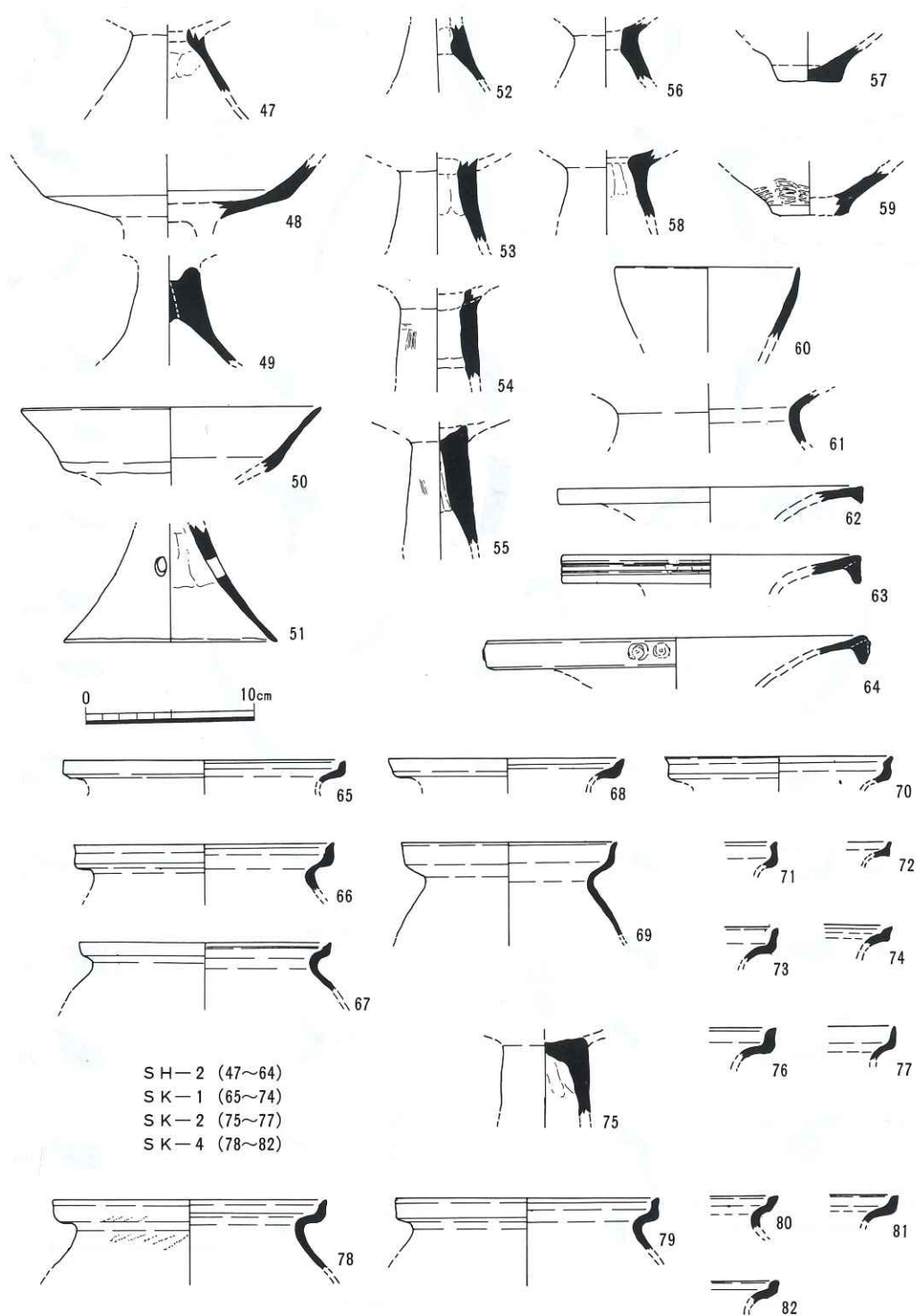


图17 SH-2. SK-1. 2. 4 出土遺物

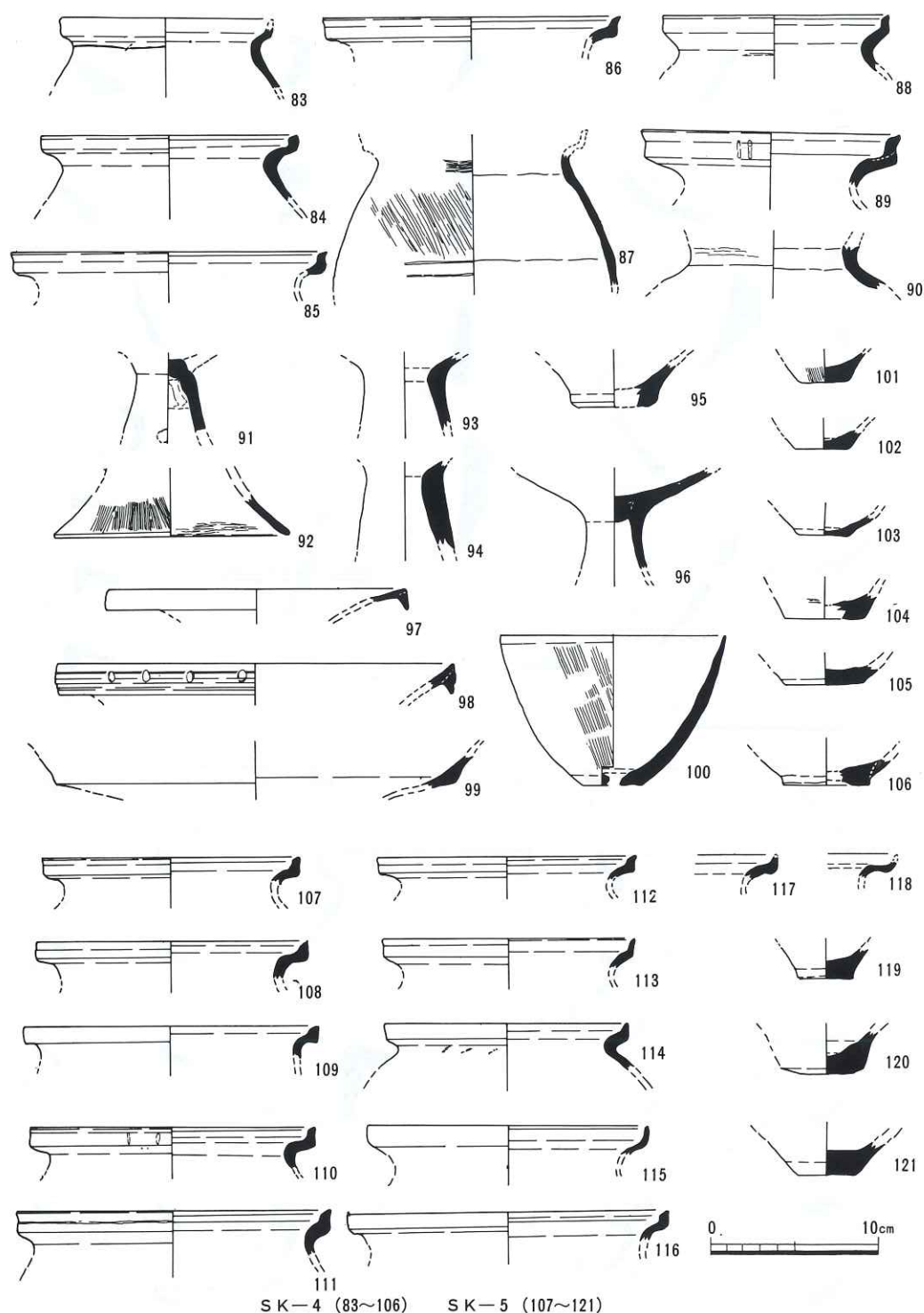
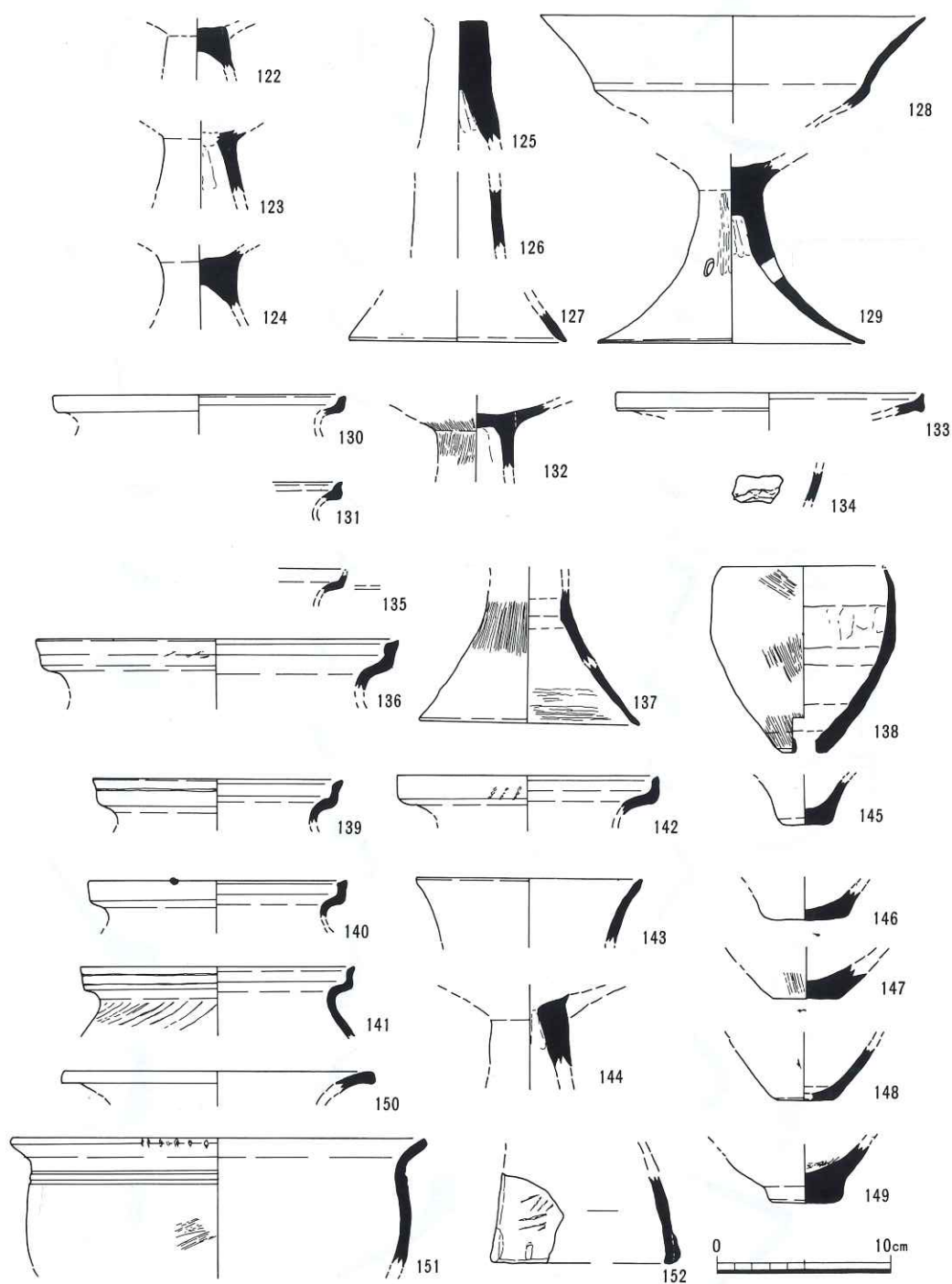


图18 SK-4·5 出土遗物



SK-5 (122~129) SK-6 (130.131) SK-7 (132) SK-8 (133. 134)
 ピット (136~138) 包含層 (139~152)

図19 SK-5~8・ピット・包含層 出土遺物

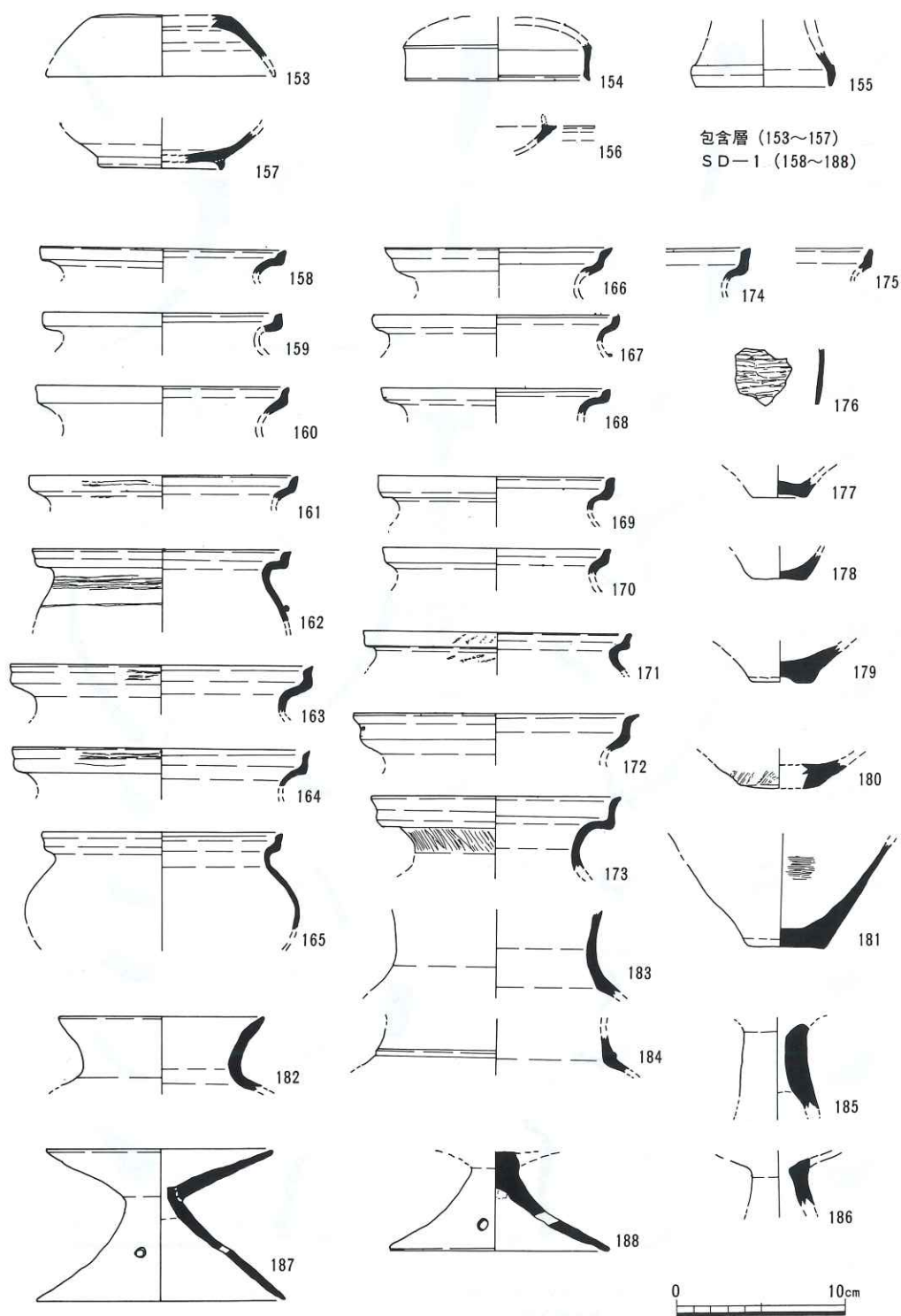
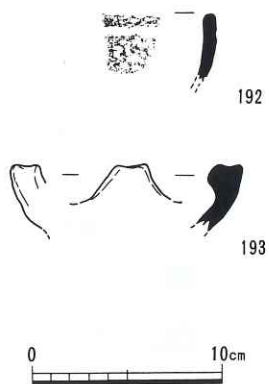
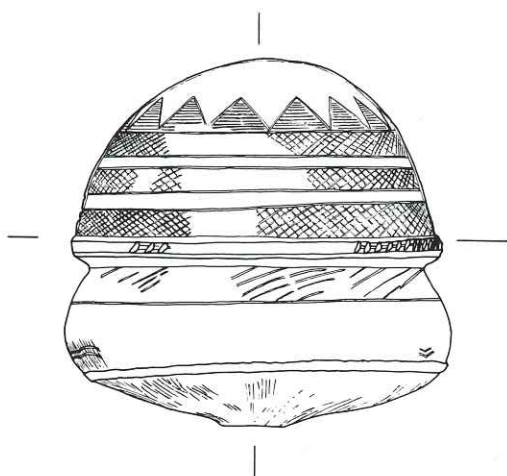
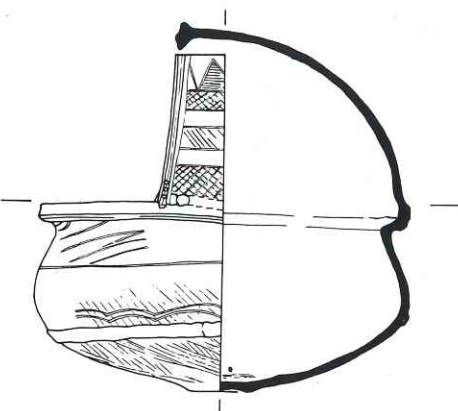
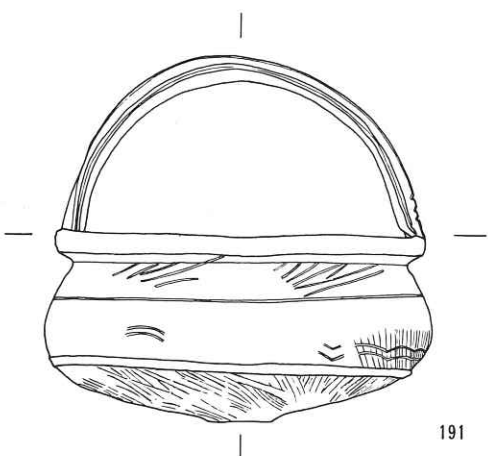
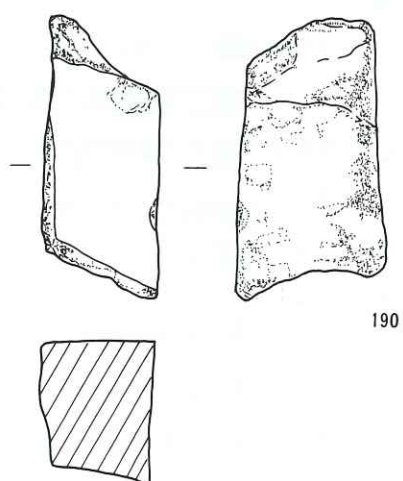
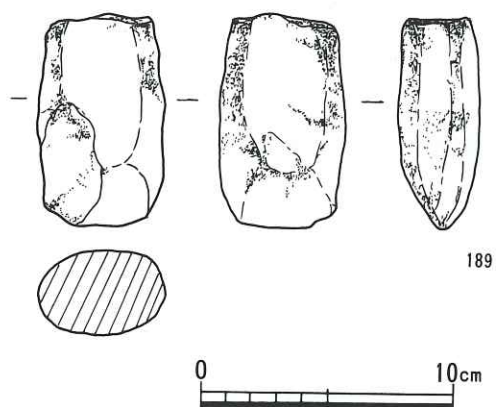


图20 SD-1・包含層出土遺物



SD-1 (191) SH-2 (190、192、193)
SK-4 (189)

図21 石器、縄文土器とSD-1 出土遺物

4. 考察

弥生時代後期末葉から古墳時代初頭の土器について

(1)はじめに

弥生時代後期末葉から古墳時代初頭に移る過渡期の土器の分析については、多くの研究者によって試みられている。しかし、土器だけでなく、古墳の出現をはじめとする社会現象とのからみで、古墳時代はいつからなのかという大きな問題がのしかかっているため、未だ定着をみない。

さて、近江において当該期の土器を分析したものとして、野洲川左岸地域では、丸山竜平^⑤氏、山崎秀二^⑥氏の業績がある。前者は、草津市片岡遺跡11BトレンチⅣ層、後者は、守山市小島遺跡SD-1の土器を検討したものである。今回はこれらの成果をふまえて、器種構成、文様構成の比較を中心に、弥生時代から古墳時代への過渡期における土器について、若干ふれてみたい。

(2)器種構成

小柿遺跡で、過渡期の土器を出土した遺構の内、20個体以上出土したものについて器種構成をとりあげた(表1)。それぞれの遺構における器種は、甕がほとんど半数以上を示している。高杯と器台の比率は、それぞれがほぼ近い比率を示すが、SH-1においては高杯が認められず、SK-5では器台が認められない。では、他の遺跡と比較してみよう。片岡遺跡では、甕、高杯、器台等は大きな差はみられないが、壺が少ない。このことについて丸山氏は、壺形土器(粃貯蔵用)と甕の構成が一気にくずれる壺の皆無をもって最古の土師器とされている。それに対し小島遺跡では、壺の数は小柿遺跡と大きな差はないが、甕の数が小柿遺跡の半分以下を示していることが注目される。高杯と器台の比率では、片岡遺跡もそうであるが大きな差はみられない。

次に細かく器種をみていくと、甕は3遺跡とも受口状縁甕が90%以上を占め、「く」字状口縁甕はわずかしこ出土していない。小柿遺跡では、口縁をみる限り一片も認められなかった。器台では、小型器台がSD-1で出土しているが、片岡、小島両遺跡では出土しておらず、大型、中型の器台が主流である。また、山崎氏が小島遺跡の土器を、弥生土器としたひとつの理由として、蓋形土器の存在をあげているが、小柿遺跡では出土していない。しかし小島、片岡遺跡で出土している長口壺の破片と思われるものは小柿遺跡のSH-2からも出土している。

(3)文様構成について

まず、受口状口縁をもつ甕、壺、鉢の文様構成であるが、口縁外面と体部第一施文部の2ヶ所の比較によって検討してみた(表2、3)。小柿遺跡と片岡、小島両遺跡との大きな

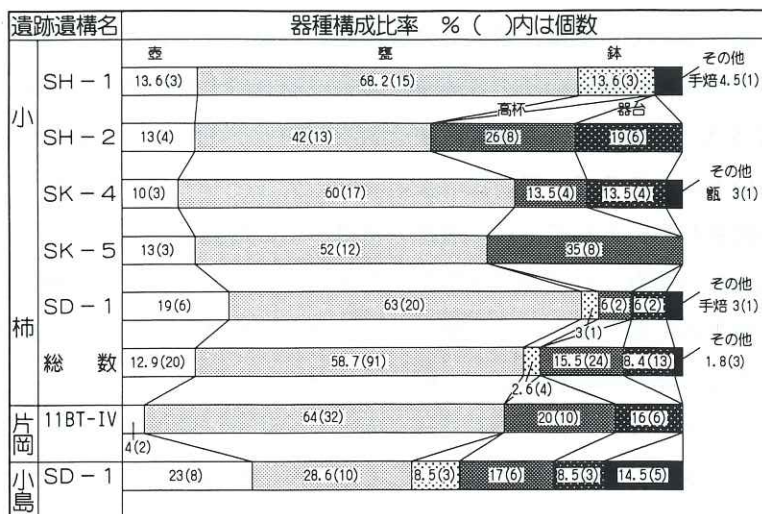


表1 器種構成比率

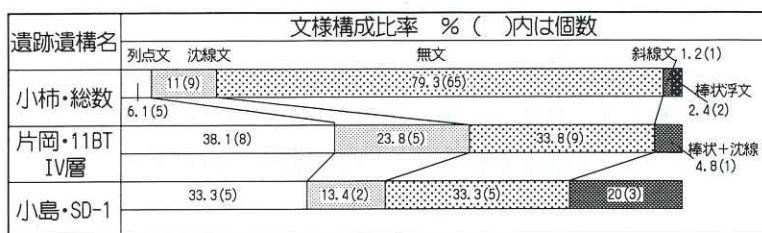


表2 受口状口縁外面の文様構成比率

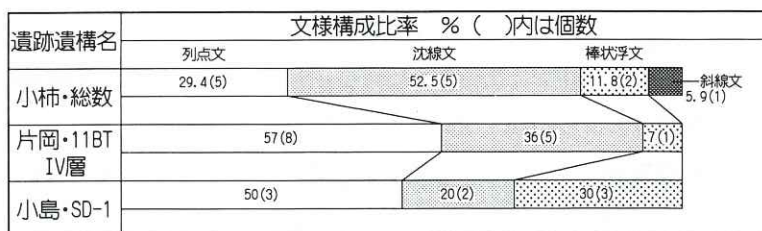


表3 受口状口縁外面の文様構成比率（無文を除く）

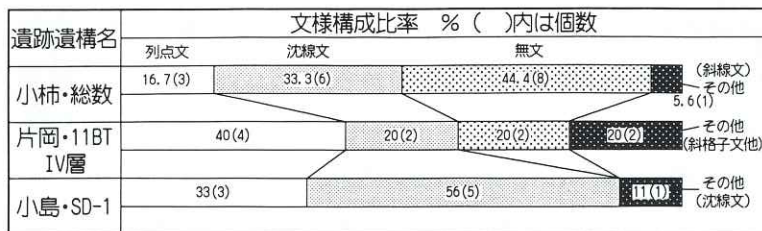


表4 体部第一施文部における文様構成比率

差は、口縁外面についていえば、列点文の数に顕著に現われている。小柿遺跡の場合、文様をもたないものが特に多いので、3遺跡における無文の土器を除いて比率を検討すると、(表3)、列点をもつ土器は、小柿遺跡が29.4%であるのに対し、片岡、小島両遺跡は50%以上を示している。ところで、受口状口縁の外面に文様をもたないものについて山崎氏は、小島遺跡での比率が高いとして、この遺跡の特徴として把握しているが、さほど時期差がない片岡遺跡においても、ほぼ同じ比率を示していることから、遺跡の特徴とするには疑問を感じる。無文の土器が多いことに関しては、遺跡、地域差の他に、時期差を考慮する必要があり、今後の資料の増加をまって再検討したい。

次に、体部第一施文部についてであるが、列点文の使用率が片岡、小島両遺跡では、口縁外面同様に小柿遺跡より高い値を示している(表3)。列点文以外の文様では、野洲川左岸地域の中心的文様のひとつである沈線(直線)文が主体を示す中で、わずかに斜線や斜格子文もみられ、他地域との関連を伺うことができる。

手焙形土器の文様は、笠部では、斜線、斜格子、波状というように、それぞれ主体となる文様が違っている。斜線を主体とするものには、野洲町五ノ里遺跡T-4包含層に出土例がみられる。斜格子文は、笠部の文様の中ではよく使用されるもので、小柿遺跡例とよく似たものとしては、大津市錦織遺跡1号方形周溝墓出土例がある。また、波状文を主体としたものは、近江では能登川町斗西遺跡の2例、近江以外では、大阪府久宝寺南遺跡例がある。

鉢部が残存する(191)は、斜線と円弧文によって構成されたもので、円弧文をもつ手焙形土器の類例(図22)としては、安土町新開遺跡SX-3(196)、近江以外では京都府東土川西遺跡(197)に例がある程度で、円弧文が手焙形土器に施される率は現段階では少ないといえよう。手焙形土器の場合、文様だけでは地域差を現わしにくい、胎土、色調から判断すれば、小柿遺跡例では、(191)以外は在地産であることが考えられる。

(4)搬入品について

搬入品は、近江国外からの搬入品と、近江国内での搬入品とに分けられるが、前者については、河内産と思われる茶褐色をした壺の破片が認められる程度である。また、外面にタタキ目を施す畿内系の甕が2点(59、176)認められるが、畿内の胎土でなく湖北産と考えられる赤色もしくは橙色味を帯びた土器である。これらの土器は、湖北地方では、湖南に比べて比較的好くみられるものである。この他、胎土、色調等から湖北産と考えられるものに、鉢(25)、甕(162、170)壺の底部(120)がある。さらに地域は特定できないが、口縁の形態、胎土、色調から、野洲川左岸地域で主流を示す土器とは違うものをあげると、(37、40、110、114、139)の甕、(69)の壺の他、前述した手焙形土器(191)がある。こ

これらの搬入品と在地と思われる土器の比率を示すと、在地品93%（143個）搬入品7%（12個）である。しかし、搬入品と判断できたものが11個体であって、実際はもう少し増えると思われるが、在地品が80～90%の範疇で収まることはまちがいないであろう。

(5)おわりに

最後に、土器の時期について述べて、まとめしておく。

器種構成、文様構成からみれば、小柿遺跡全体では片岡、小島遺跡の土器より新しい要素をもつ。例えば、SD-1の小型器台の存在は庄内式古段階の様相をもち、同じくSD-1から出土している手焙形土器と類似したものが、東土川西遺跡で出土していたが、この土器も庄内式古段階併行とされているものである⁹⁰。それと併せて近江では、受口状口縁甕や鉢等にみる列点文の存在が重要となってくる。先の分析にみられたように、小柿遺跡では列点文の使用率が50%未満であるのに対し、片岡、小島遺跡では50%以上を占めていた。このことから、仮に列点文の使用率が50%以上もしくはそれに近い値である場合を畿内第V様式併行の土器、そうでない場合は、それよりも新しい土器（庄内式古段階以下）というように、区別の目安とすれば、小柿遺跡の土器は、全体数からみれば庄内式併行といったほうがよさそうである。しかし、SH-1内の土壇から出土した甕と鉢の特徴は、小島遺跡出土例（図22-194、195）と類似しており、SH-1内の土器には他の遺構と比べて列点文の使用率が小柿遺跡の中では高いことも含めると、結果的には、SH-1のように畿内第V様式末葉的要素と、SD-1を代表とする庄内式古段階的要素の2時期が存在していたことがいえる。

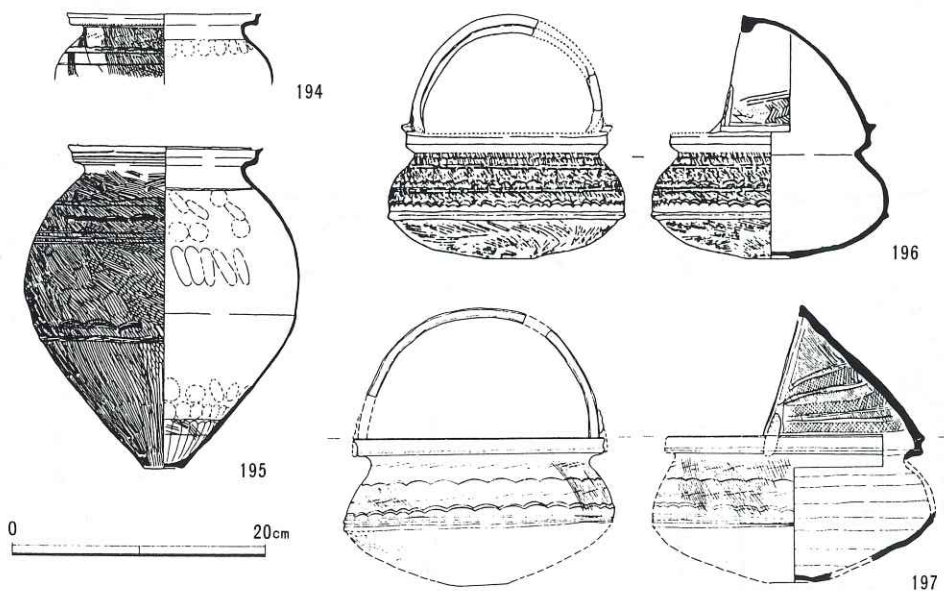


図22 小島遺跡SD-1の土器と円弧文をもつ手焙形土器

5. 小結

今回検出した遺構は、大きく弥生時代末葉から古墳時代初頭のもの（Ⅰ期）と、奈良時代前期以降（Ⅱ期）のものに分けられ、各遺構を時期別に列記すると以下のとおりである。

Ⅰ期 SH-1、2、SB-1、SD-1、SK-1、2、4～8、

Ⅱ期 SD-2～4、SB-1、SA-1

SH-1、2とSB-1は、ほぼ同時期に存在していたものと考えられ、栗東町の北部に存在する高野遺跡（庄内式新段階～布留式古段階併行を中心とする遺跡）にみられるような、円形状に竪穴住居が配置されていた可能性をもつ。また、各時期に1棟もしくは2棟の高床式の建物をもつパターンも同様であり、集落構成の系譜を考える上で重要である。

奈良時代以降については、SD-2以外は時期不明だが、いずれも栗太郡条里に沿っている。SD-2、SB-2、SA-1をひとつのまとまりとして同時期と考えるならば、区画溝と柵に囲まれた建物が想定できるが、根拠に欠けるので、あくまでもひとつの案として述べておく。

次に遺物に関しては、縄文時代後期初頭、弥生時代前期という、町内では出土数の少ない遺物が注目される。特に後者は、中ノ井川流域の霊仙寺遺跡でまとまって出土しているが、葉山川中流域では中沢遺跡で少しみられる程度である。今回、小柿遺跡で新たに発見されたことは、弥生時代集落の展開を考える上で注目される。

弥生時代後期末葉から古墳時代初頭にかけての土器については、考察で述べたように器種、文様構成等の分析から、畿内第Ⅴ様式末葉的要素をもつ土器と、庄内式古階的要素をもつ土器の2時期に分けられた。しかし、小柿遺跡全体としては、後者的要素が強いことがいえた。ところで、庄内式は弥生時代なのか古墳時代なのかという問題があるが、野洲川左岸地域においてひとつの手がかりと考えているのは、集落の動向である。野洲川左岸

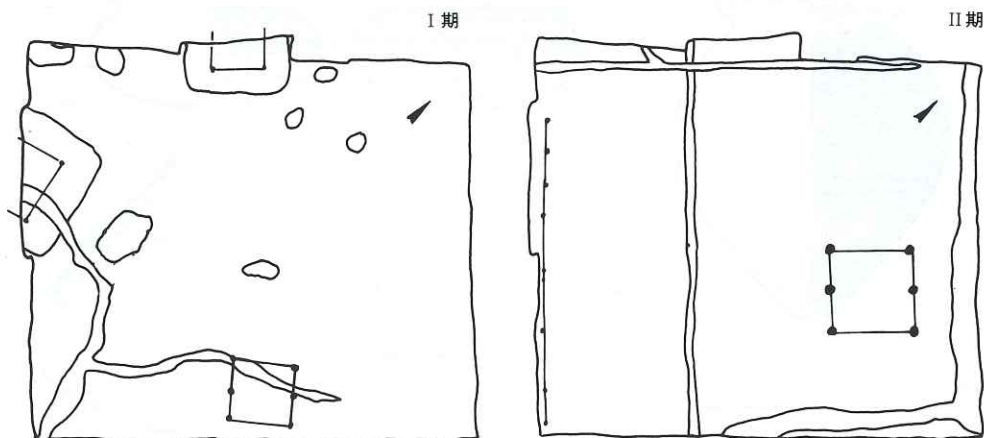


図23 時期別遺構模式図（1：400）

の古墳時代集落の中心をなす地域は、葉山川と中ノ井川の上流域に存在する高野、岩畑、辻の3集落であり、これらの集落が出現するのが現段階の調査成果から、庄内式古段階併行の時期であることが予想される。このことは、弥生時代において生活の基盤ではなかった地域を新たに開拓して、大規模な集落群が形成されたことを、野洲川左岸地域におけるひとつの大きな画期としてとらえることが可能である。当然その背景には、農具（鉄器）の発達が関係していたと思われる。とすれば、前述した庄内式併行段階の土器において、器種構成、文様構成の中に新しい要素がみられたことも含めて、庄内式併行の段階を古墳時代のはじまりと考えてもいいのかもしれない。集落の出現と土器の画期を結びつけるのは少し難があるのを否定し得ないが、ひとつの試案として述べ、結びとしておきたい。

注・参考文献

- ① 『埋蔵文化財発掘調査昭和63年度年報』 財団法人栗東町文化体育振興事業団 1989
- ② 『埋蔵文化財発掘調査1989年度年報』 財団法人栗東町文化体育振興事業団 1990
- ③ 『埋蔵文化財発掘調査1990年度年報』 財団法人栗東町文化体育振興事業団 1991
- ④ 『栗東の歴史』第一巻古代・中世 栗東町史編さん委員会 1988
- ⑤ 丸山竜平ほか「第2 草津市片岡遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ-Ⅱ』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1976
- ⑥ 山崎秀二「小島遺跡発掘調査報告」『守山市文化財調査報告書』（第8冊） 守山市
教育委員会・守山市埋蔵文化財センター 1986
- ⑦ 小竹森直子「手焙形土器雑考－葛箆尾崎湖底遺跡出土品に寄せて」『紀要』第3号
財団法人滋賀県文化財保護協会 1990
- ⑧ 国下多美樹「東土川西遺跡の弥生土器－乙訓地域における第5様式～庄内式土器の変遷－」『向日市文化資料館研究紀要』創刊号 向日市文化資料館 1986
- ⑨ 中西常雄『北大津の変貌－弥生時代から古墳時代へ－』 1979
- ⑩ 森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社 1990
- ⑪ 葛野泰樹・西家淳郎「Ⅰ蒲生郡安土町新開遺跡」『ほ場整備関係発掘調査報告書Ⅶ-3』 滋賀県
県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- ⑫ 『平城京発掘調査報告』Ⅶ・Ⅸ 奈良国立文化財研究所報告第20・40冊 1976・1978
- ⑬ 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981



1. SB-1を南方向よりみる



2. SD-1・SB-2を東方向よりみる



3. 作業風景



4. SD-1・SA-1・SK-4を南方向よりみる



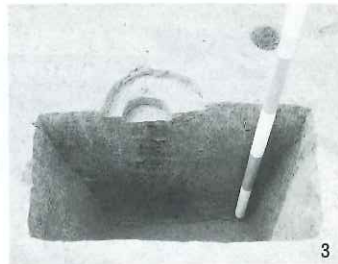
5. SD-1・SH-2・SK-5を南方向よりみる



1. SB-1 柱痕



2. SB-1 柱痕



3. SH-1 柱穴



4. SH-1 を西方向よりみる



6. SH-2 を南方向よりみる



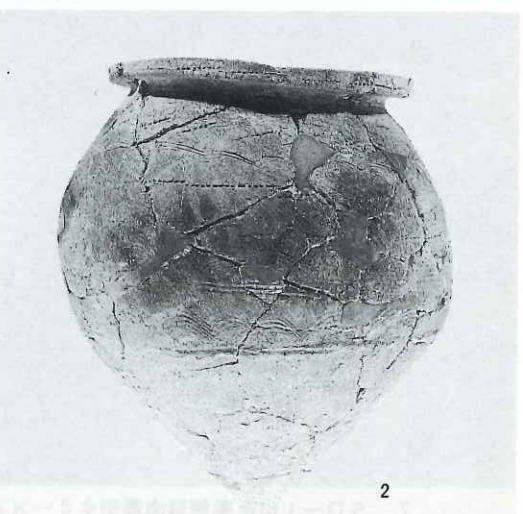
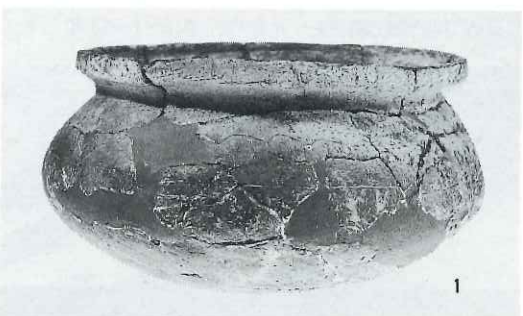
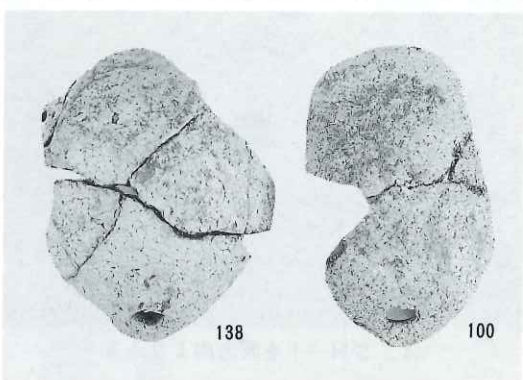
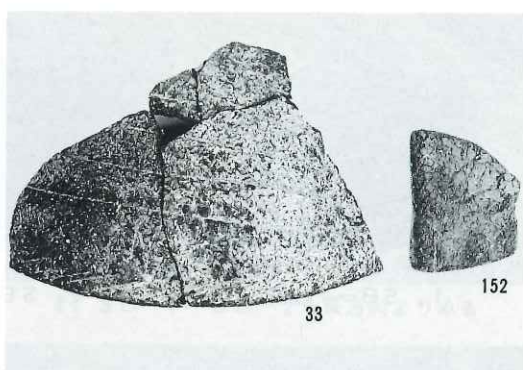
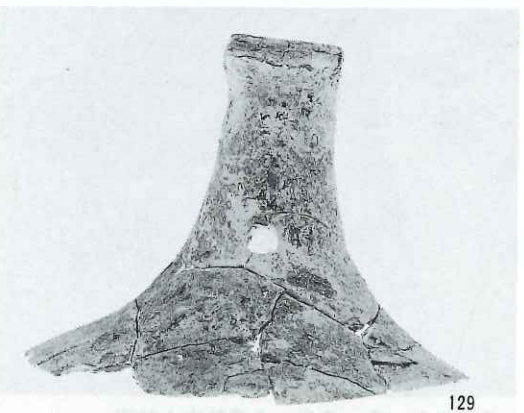
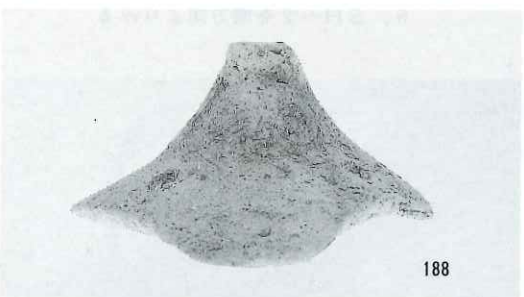
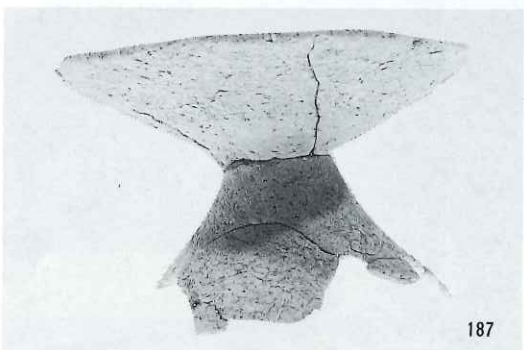
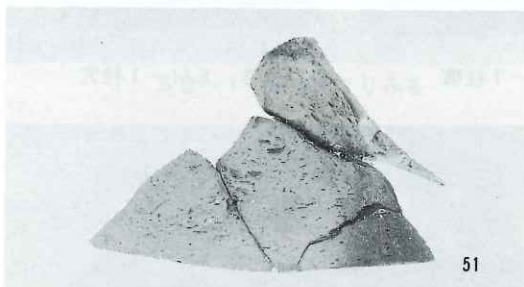
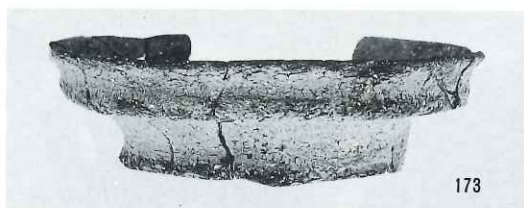
5. SH-1 を南方向よりみる

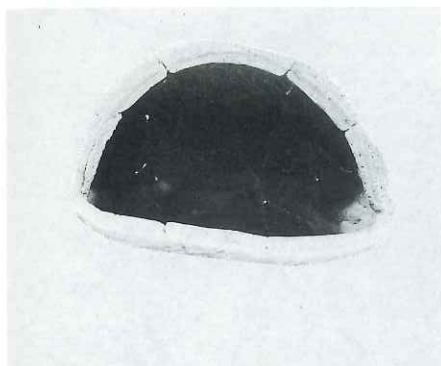


7. SD-1 出土手焙形土器



8. SH-1 遺物出土状況

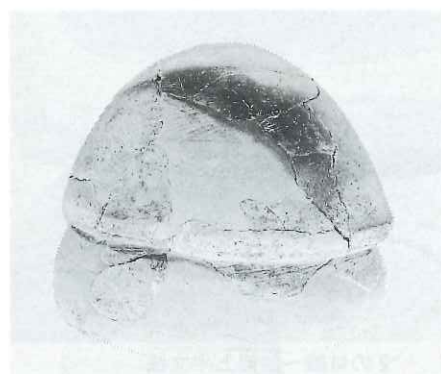




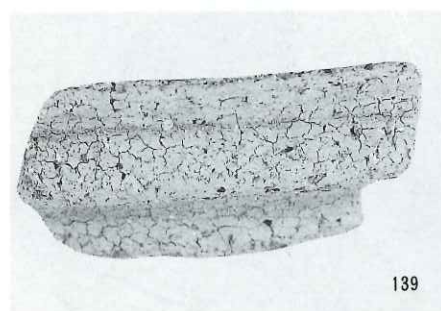
191 正面



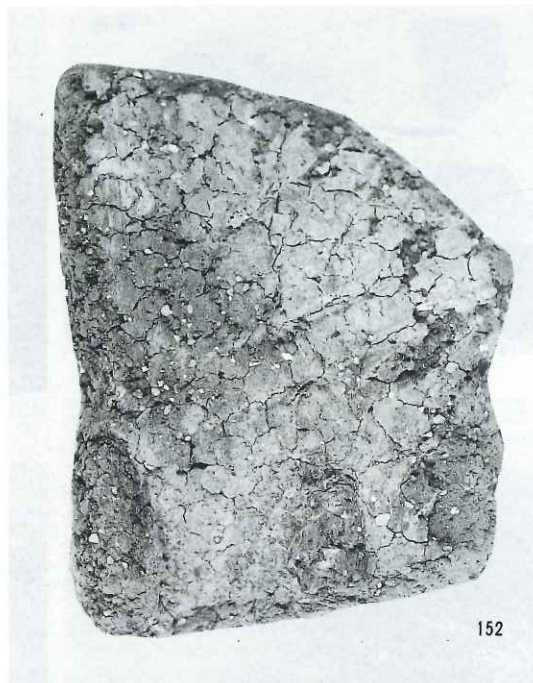
191 横面



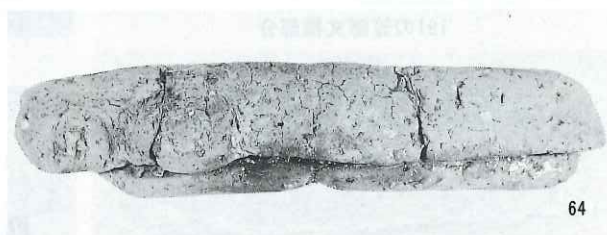
191 裏面



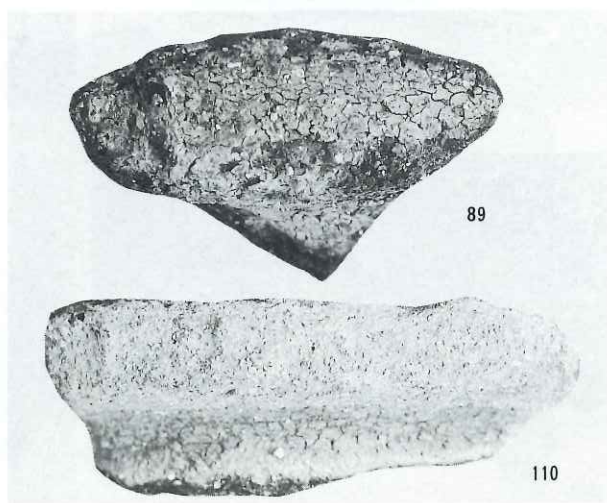
139 受口状口縁部の沈線文



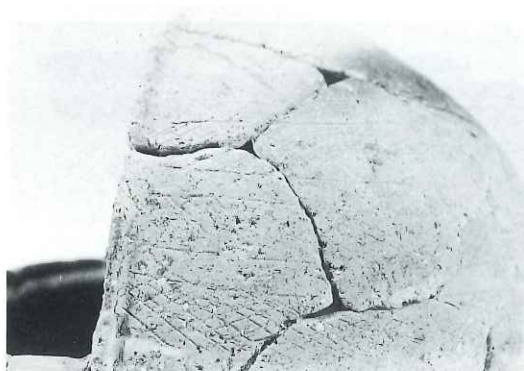
152 手焙形土器笠部文様



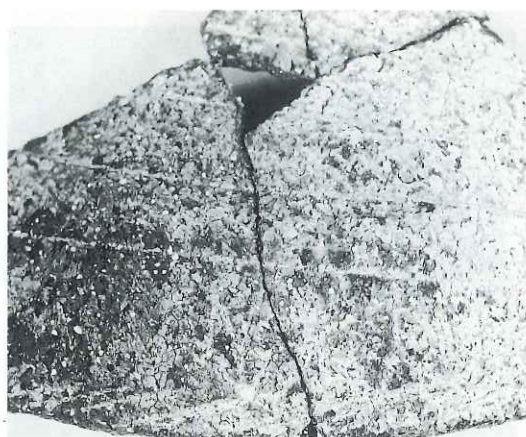
64 器台口縁部円形浮文



受口状口縁部棒状浮文



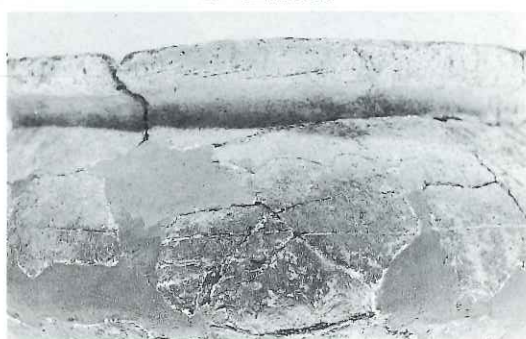
191の笠部文様



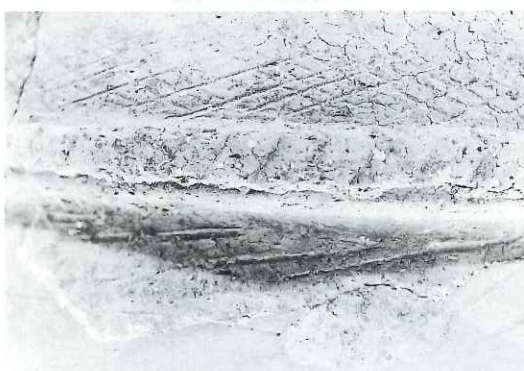
33の笠部文様



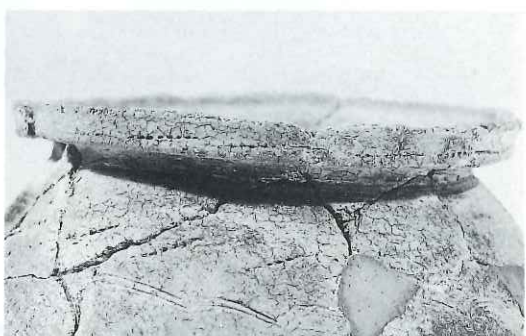
191の笠部文様部分



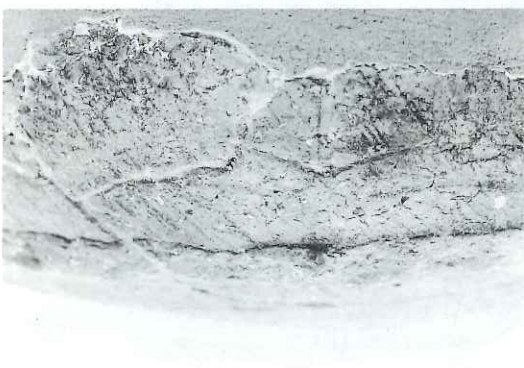
1の口縁～体部文様



191の口縁部付近



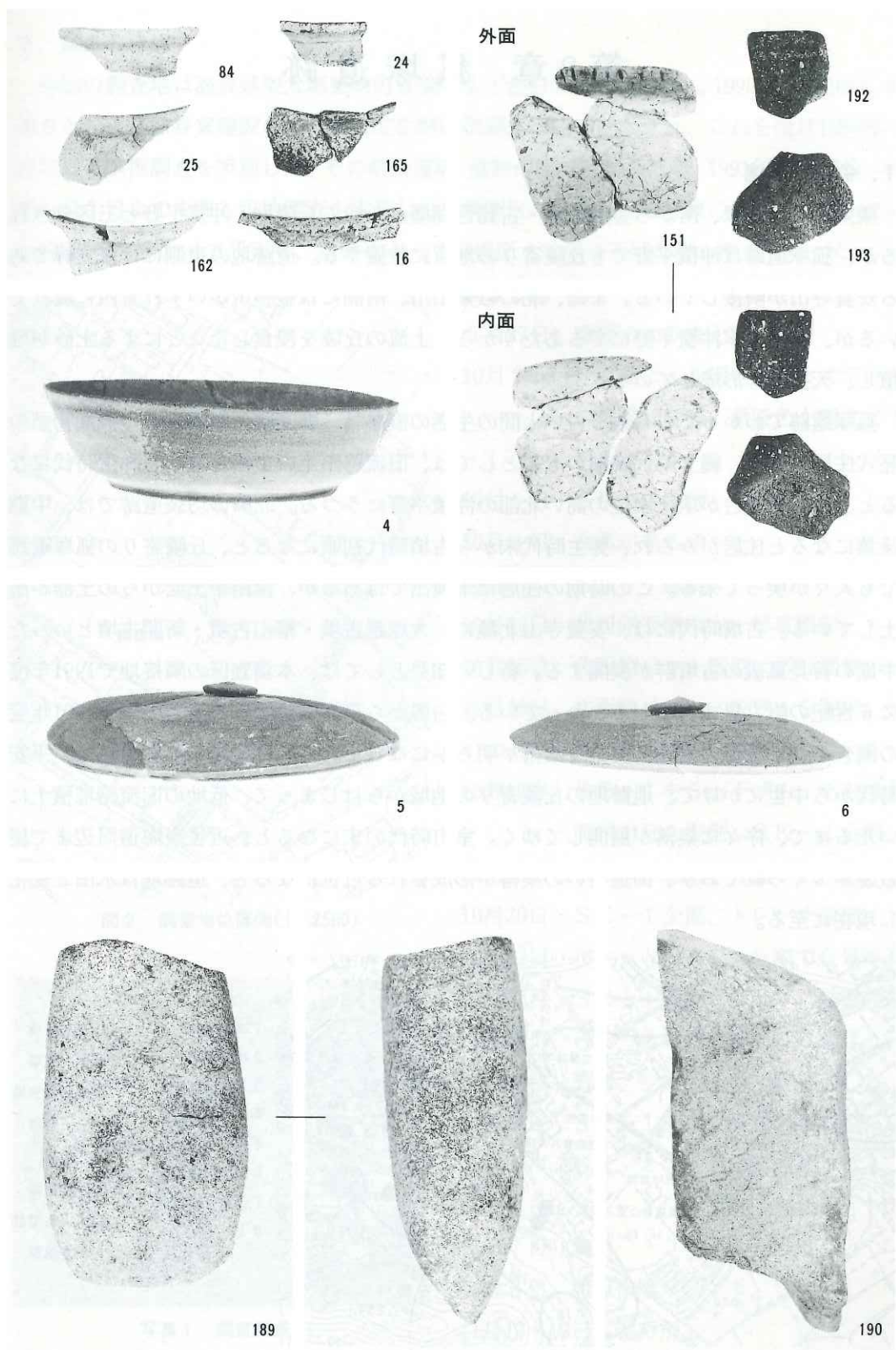
2の口縁～体部上半文様



191の鉢部（貼り付け突帯付近）



2の体部文様



第2章 狐塚遺跡

1. 位置と環境

栗東町の地形は、南から金勝山地・古琵琶湖層から成る丘陵地・沖積平野と三区分別れるが、狐塚遺跡は沖積平野でも丘陵寄りの地点に位置する。遺跡地の東側には孤立峰である安養寺山が隣接している。また、北には葉山川、南側には金勝川がいずれも西に流れているが、両河川が沖積平野にでるあたりから、上流の丘陵を浸食したことによる土砂が堆積し、天井川を形成している。

狐塚遺跡でわかっている最も古い人間の生活の痕跡は、縄文時代中期末から後期初頭の竪穴住居である。縄文時代晩期のものとしては、旧流路出土の土器がある。弥生時代になると、生活の舞台が地下水位の高い北部の沖積平野にうつる。北隣の坊袋遺跡では、中期後葉になると住居がみられ、弥生時代末から古墳時代初頭になると、丘陵寄りの狐塚遺跡でも人々が戻って来る。この時期の住居は未検出ではあるが、流路や土壇からの土器が出土している。古墳時代には、安養寺山北麓に、大塚越古墳・椿山古墳・新開古墳といった、中期の首長墓級の古墳群が展開する。新しい知見としては、本調査区の隣接地で1991年度に6世紀の帆立貝式古墳がみついている。白鳳から奈良時代のものとしては、1991年度の調査で、本遺跡の東端において集落が明らかになっている。その後の狐塚遺跡は、平安時代から中世にかけて、遺跡地の丘陵寄りの地域からはじまって、低地の旧流路堆積土にいたるまで、序々に集落が展開してゆく。室町時代の末になると、近世東海道周辺まで屋敷跡がつくられており、街道沿いの集落が形成される近世になると、遺跡地は水田と変化し現在に至る。



2. 調査の経緯

今回の調査地は滋賀県栗太郡栗東町安養寺7丁目615-5に所在する。1990年3月30日、杉本さと氏より独身寮建設に伴う埋蔵文化財確認調査の依頼が出され、これを受け1990年4月25日に試掘調査を実施した。その結果遺構・遺物が確認されたため、1991年9月27日～同年11月7日までを要し現地調査を実施した。調査区は、開発計画で寮の建設にわたっていた約320㎡に当たって設定し、重機によって遺構面まで掘り下げた後、精査を行った。



図2 調査地位置図(1:2500)



写真1 調査風景

調査日誌(抄)

- 9月27日 重機により表土除去。
- 10月2、3日 重機により褐色土層まで下げる
が遺構はなく、黄灰色土層まで下
げる。
- 10月5日 SD-1 掘削
- 10月8日 台風が来る!
- 10月11日 SD-1 掘削
- 10月12日 北西側遺構検出、写真撮影。
- 10月15日 北西側ピット掘削。平板測量。
- 10月16日 北西側ピット、SD-5 掘削。S
K-1 半掘。
- 10月17日 SE-1 を5cm下げる。その後北
西側半分を掘削。SK-1 全掘。
- 10月18日 SE-1 北西半分掘り下げ。
- 10月20日 SE-1 全掘、トレンチ清掃。
- 10月22日 バケット付クレーン車で全景写真。
- 10月23日 SE-1 遺物とり上げ。墨書発見。
- 10月26日 SE-1 完掘、枠をとり上げる。
- 10月29日 清掃、空撮。
- 11月2日 SR-1 掘削、調査区断ち割り。
- 11月5日 SK-2 の底から柱穴見つかる。
- 11月6日 SK-2 付近写真、実測。
- 11月7日 実測
- 11月8日 撤収作業
- 11月17～19日 埋め戻し

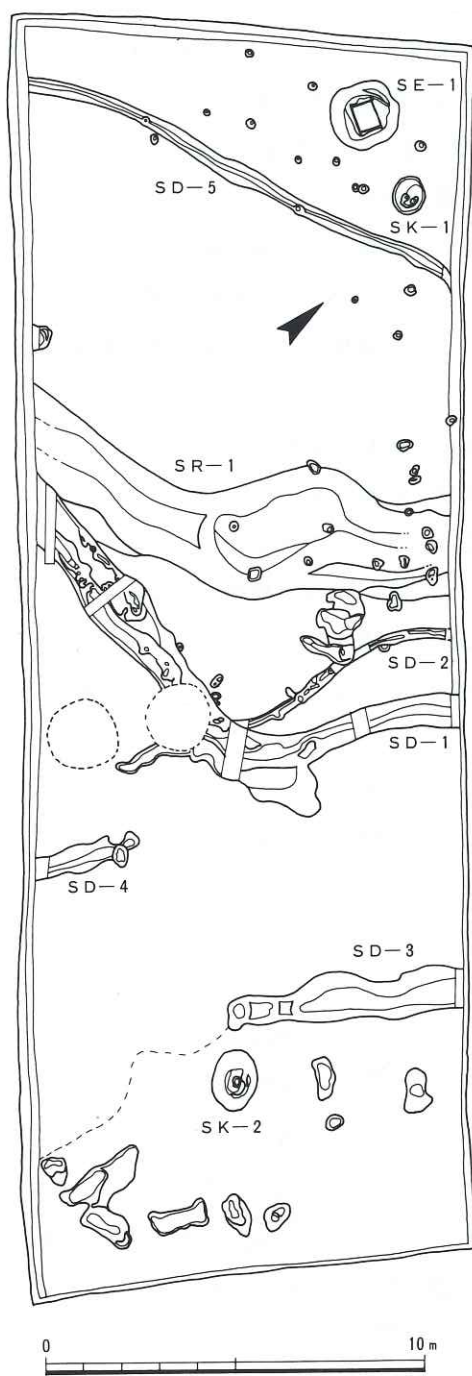


図3 調査区遺構図

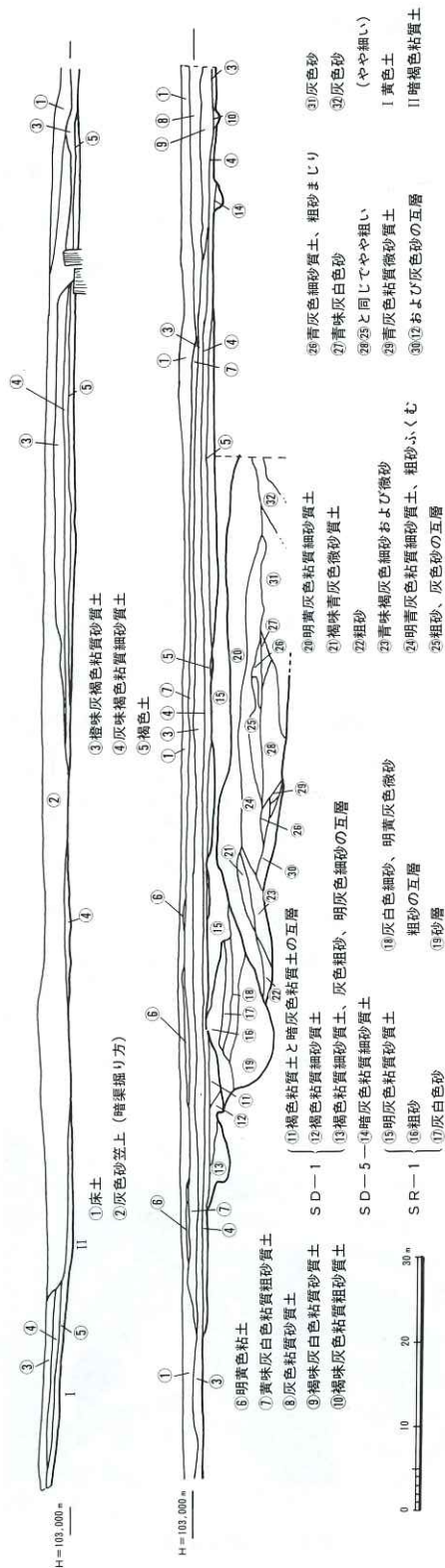


図4 調査区断面図

3. 調査の概要

基本土層 調査区は、丘陵の先端より舌状にのびる微高地の先端にあたるので、調査区内においては、丘陵寄りの南東側から低地寄りの北西側にかけて傾斜している。南東側の基本土層は、I層—旧耕土（層厚約20cm）、II層—橙味灰褐色粘質砂質土（層厚約8cm）で、これを除くと遺構ベース面の黄色粘質土である。このベース面はトレンチ南東隅から約2m北西で低地側に深く落ち込み、暗褐色土が堆積する。さらに暗褐色土には自然流路が走っており、トレンチ南東隅より約20mの地点でその肩口が検出される。この暗褐色土および旧流路堆積層である明黄灰色粘質土より、奈良時代の遺構が見つかる。トレンチ北西隅での基本土層は、I層—旧耕土（層厚約20cm）、II層—床土層（層厚約10cm）、III層—灰色粘質砂質土（層厚約10cm）、IV層—褐味灰白色粘質粗砂質土（層厚約10cm）、V層—灰味褐色粘質細砂質土（層厚約5cm）で、V層の下が自然流路の堆積上から成る遺構ベース面である。

検出遺構 本調査区では、溝、土坑、井戸、および若干のピット群を検出している。この他トレンチ北西半分にわたって旧流路が広がり、さらに、トレンチのほぼ全域にみられる暗褐色土は、沼沢地の埋土であったと考えられる。

SD-1 調査区内においてやや鈍角に屈曲する溝で、北東側で磁北を19°東に振り、南西側で東西方向にのびている。断面観察では掘り直しを行っている状況が窺える。古い時期は褐色土と明褐灰色砂質土の互層が堆積し、溝底には粗砂がたまる。新しい時期の溝には褐色粘質土が堆積している。新しい溝の幅は約110cm、深さは検出面から約35cmである。土師器片および、須恵器片が出土している。

SD-2 SD-1に切られ、やや蛇行する北—南方向の溝で、埋土は暗灰色土である。幅約30cm、検出面からの深さ5cmである。遺物は出土していない。

SD-3 周辺地割の方向に沿った溝。幅は約80～100cm、検出面からの深さは約10cmである。埋土は褐灰色粘質土で、土師器片、須恵器片、土師質羽釜片が出土している。

SD-4 幅約50cmの溝があり、方位はSD-1北側に類似している。検出面からの深さは約10cmである。須恵器が出土している。

SD-5 調査区北西側で検出された、磁北を60°東に振る方向の溝。幅約40cmで、検出面からの深さは約5～10cm、トレンチ北東壁で東方向に屈曲している。埋土は暗灰褐色粘質砂質土で古墳時代後期の須恵器が出土している。

流路(SR) 調査区の北西半分に広がる幅20m以上の流路が埋没した後、SD-1に先行して形成されたのが、SR-1である。北東から南西方向に流れていたもので、埋土はすべて砂であり、急な流れがあったものと思われる。幅約280cm、検出面からの深さ約

70～100cmである。古式土師器細片が出土している。

SK（土坑）

SK-1 調査区北隅でみつかった、直径90cmの円形の土坑である。深さは検出面から約20cmを測り、上層には明黄味灰色粘質細砂質土、下層には灰褐色粘質土が堆積する。土師器杯身が出土している。

SK-2 調査区南東側の、沼沢地の落ち際にあたる地点でみつかった径約118～146cmの楕円形土坑である。断面形はやや丸味のある逆台形で、暗褐色粘質土を埋土とする。検出面からの深さは約80cmで、土坑中央に径約20cmのピットが認められた。縄文土器数片が出土している。土坑の周辺には同様の埋土の不整形落ちこみが何箇所かみられる。

井戸（SE）

SE-1 調査区北隅のSK-1の近くで検出された井戸である。掘り方の平面プランは直径約170cmの円形である。検出面から井戸底までの深さは約73cmである。井戸底には、井桁に組む長方形の井戸枠がみつっている。これは長辺に用いられる枠材に方形のホゾ穴を穿ち、短辺の枠材の先端を細く削りだして組みあわせるものである。枠は底1段のみが遺存しているだけで、枠の上面に上部構造と組み合わせるための加工は施されていないが裏込めの上が上部まで遺っているの、何らかの上部構造があったと考えられる。枠の主軸は真東を約15°南にふる。井戸の堆積は、上層が褐灰色粘質土、中層は上から明黄灰色粘質

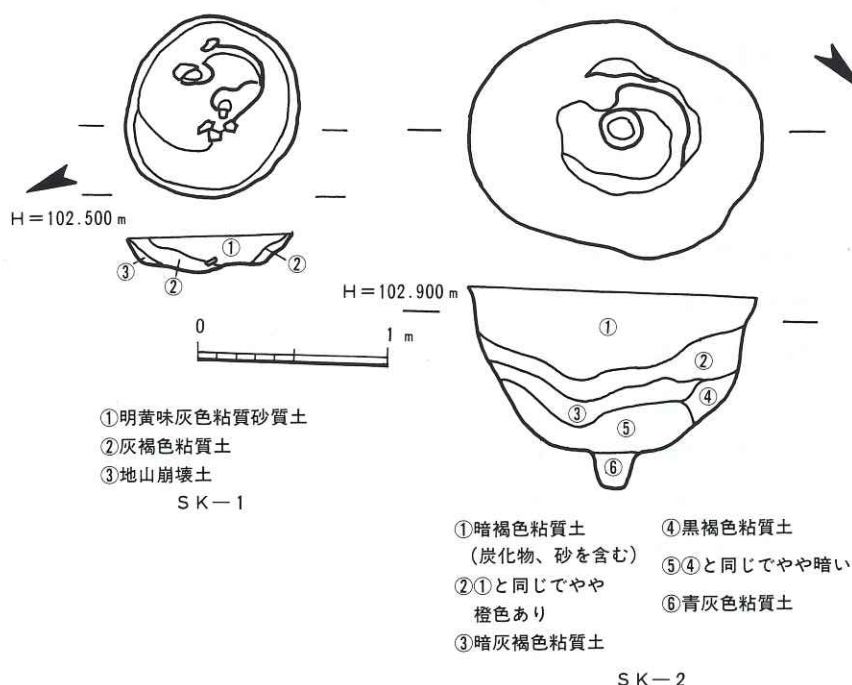
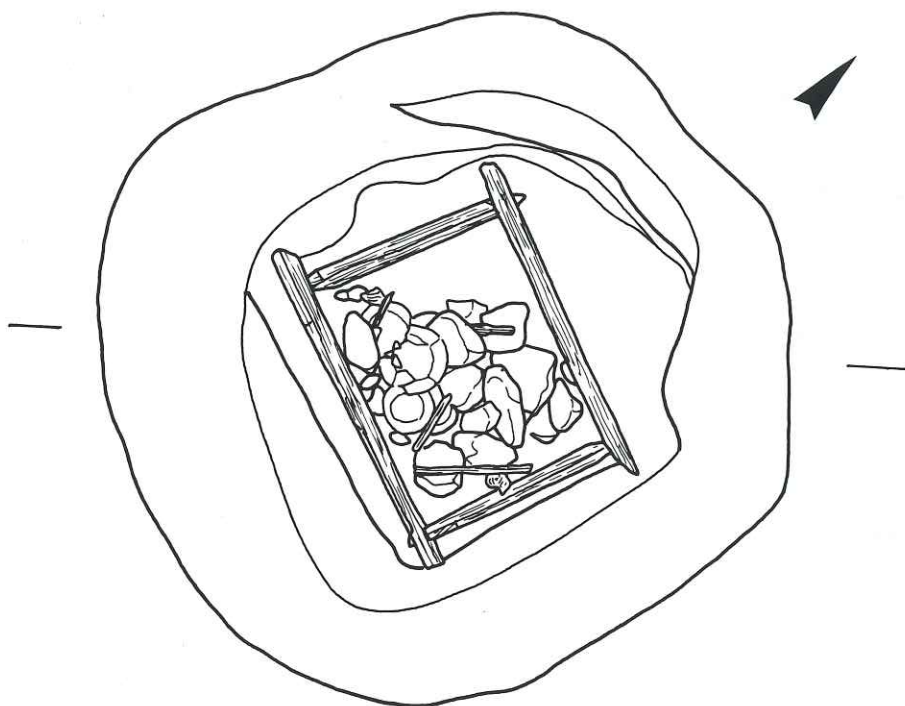
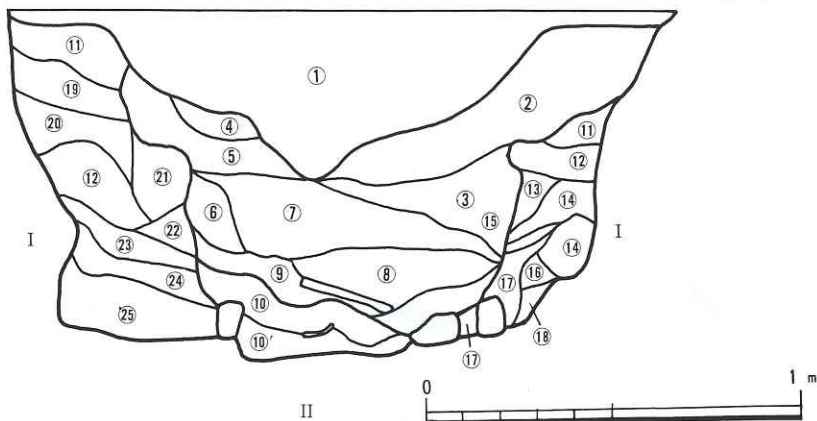


図5 SK-1, 2 平面図、断面図



H = 102.500 m



- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| ① 褐灰色粘質土 | ⑮ 暗灰褐色粘質砂質土 |
| ② 明橙灰色微砂質土灰色砂質土混 | ⑯ 暗褐色粘質土 |
| ③ 明橙灰色粘質土暗褐色粘質混 | ⑰ 暗褐色粘質砂質土 |
| ④ ②に鉄分の集積 | ⑱ 明青灰色粘質土（地山Ⅰより細かく、砂質） |
| ⑤ 灰白色細砂質土 | ⑲⑳に灰色細砂質土ブロック混、明黄灰色微砂質土との互層 |
| ⑦ 暗褐色粘質土および灰白色細砂質土 | ㉑ 明橙灰色微砂質土灰色細砂質土混 |
| ⑧ ⑦と同じ砂まじり | ㉒ 茶味褐色腐植土に砂。レキ混 |
| ⑨ 暗灰褐色粘質土灰白色細砂質土ブロック | ㉓ 暗褐色粘質土、㉒ブロックを含む |
| ⑩ 茶味暗褐色腐植土⑩ 砂レキ混 | ㉔ 暗灰褐色粘土地山Ⅰブロックを含む |
| ⑪ 暗灰褐色微砂質土と明黄灰色微砂質土の互層 | ㉕ ㉔に地山Ⅰブロックを含む |
| ⑫ 明黄灰色微妙質粘質土 | ㉖ ㉕と同、地山Ⅰブロック多い |
| ⑬ 暗褐色粘質土 | 地山Ⅰ明黄灰色細砂質土 Ⅱ粗砂 |
| ⑭ 地山Ⅰと⑬の互層 | |

図 6 SE-1 平面図、断面図

土（砂混り）、灰白色粘質土、暗灰褐色粘質土（黄灰色細砂質土混）である。枠内堆積土である下層は、茶味暗褐色腐植土である。また、掘り方は、明黄灰色粘質微砂質土と暗褐色粘質土の互層である。枠内の腐植層からは、土師器杯身・須恵器杯身の完形品計6点および木製品、桃の種、ヒョウタン類の果皮^⑨が、20～40cm大の河原石とともに出土している。腐植土の真上からは16×32cm、厚さ2cmの板材が出土している。土器のうち3点には、底部に墨書がみられた。これらは同時に井戸枠内に入れられたものであるが、その時点については、腐植土層中に埋没していたことや、遺物の遺存状況が良好であったことから、井戸がつくられてから埋没するまでの使用期間中であつたと考えられる。中層は人為的埋め戻し、上層は自然堆積であろう。

ピット ほぼ東西方向に並ぶ3つのピットがある。埋土はすべて暗褐色粘質土である。

出土遺物 今回の調査では、井戸・土坑から奈良時代の遺物が出土している。そのほかの遺構および包含層からも縄文時代から中世にいたる土器が出土している。

SD-1 出土土器 1は受口状口縁甕の口縁部片である。口縁部外面下部にヘラによる刻みがある。弥生時代末から古墳時代初頭に相当する時期である。2は、須恵器の壺類の底部であると考えられる。外面は一面に自然釉がかかる。

SD-4 出土土器 3は須恵器壺肩部である。外面にカキ目調整がみとめられる。

SD-5 出土土器 4は須恵器蓋天井部である。天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデによる。中村編年II-5期に相当する時期である。

SK-1 出土土器 5は高台をつけない土師器杯身である。平らな底部から丸味をもつ

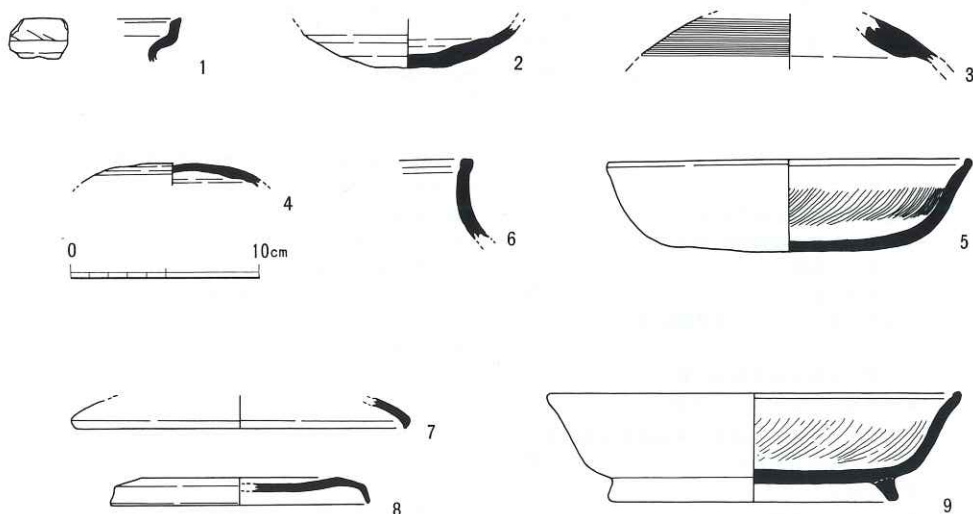


図7 遺構出土遺物実測図

て体部を立ちあげ、口縁部を外反させて端部は丸くおさめる。体部内面には1段の放射状暗文がみられる。見込み部分および外面調整は剝離により調整が不明である。平城Ⅱに相当する時期と考えられる。

SK-2 出土土器 6は縄文時代晩期の鉢類の口縁部である。口縁部内面および口縁部、体部間の外面に沈線を施す。

SE-1 出土遺物

①上層出土土器 7は須恵器蓋である。天井部は稜をもってやや凹むが中心は平らで、口縁部は鈍角に折り返している。天井部内面に墨痕が認められ、転用硯の可能性が考えられる。8は須恵器杯蓋で、天井部に丸味があり、口縁端部を短かく折りかえすものである。9は土師器杯身で、高台がつくものである。平らな底部から丸味をもって体部を立ちあげ、口縁部は外反させて端部は丸くおさめる。高台はハの字にひらく背の高いものである。体部内面には粗い1段の放射状暗文がみられる。その他の調整等は剝離のため不明である。平城Ⅱに相当する時期と考えられる。

②枠内出土土器 10、11は須恵器杯身で高台のつかないものである。10は、直立気味に逆ハの字にのびる体部を有し、口縁部はやや外反させて端部は鋭くおさめる。口径12.5cm、高さ3.0cmである。底部外面に「𠂔」の墨書がある。11は外反する口縁部の端部を鋭くおさめるもので、口径11.8cm、高さ3.5cmで、11よりもやや深い。12~15は土師器杯身である。12は、底部が丸味を帯び、口縁部は外反させて端部は丸くおさめる。体部内面に放射状暗文、見込みにラセン状暗文を施す。底部外面はヘラケズリによる。口径11.4cmに高さ2.9cmと小型で、底部外面に「𠂔」の墨書がみられる。13は、丸味のある底部から、体部を逆ハの字に直線的に立ち上げ、端部は丸くおさめる。底部外面はヘラケズリにより、体部内面に放射状暗文、見込みにラセン状暗文を施す。口径11.6cm、高さ2.9cmである。14、15は高台のつく大型の土師器杯身である。

平らな底部からやや丸味をもって逆ハの字にひらく体部を立ちあげ、端部は丸くおさめる。体部内面に二段の放射状暗文、見込みにラセン状暗文がみられる。14は、高台がハの字にひらく低いもので、底端部に貼付られる。口径16.2cm、高さ4.5cmで、底部外面に「大殿」の墨書がみられる。15の高台は底端部よりやや内側

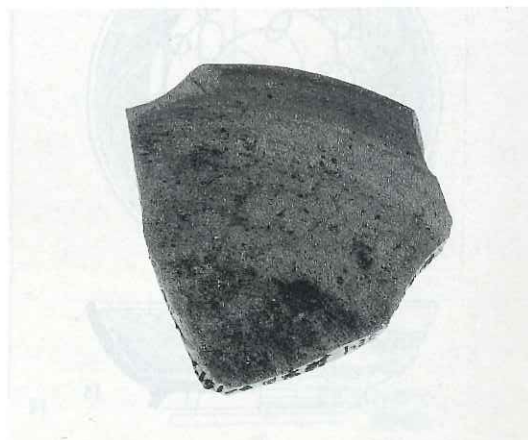


写真2 墨痕のある須恵器

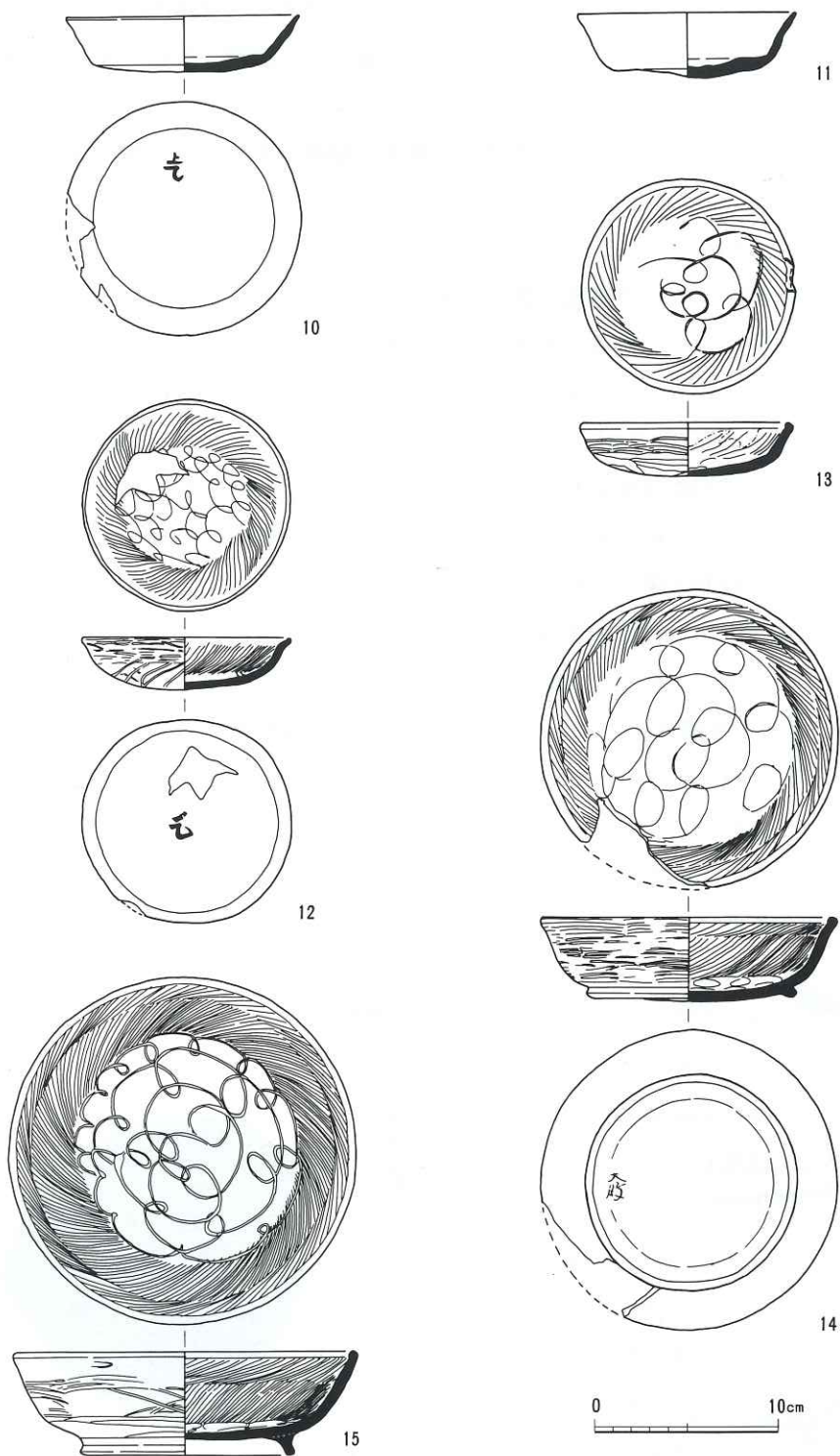


图8 SE-1 梓内出土土器 实测图

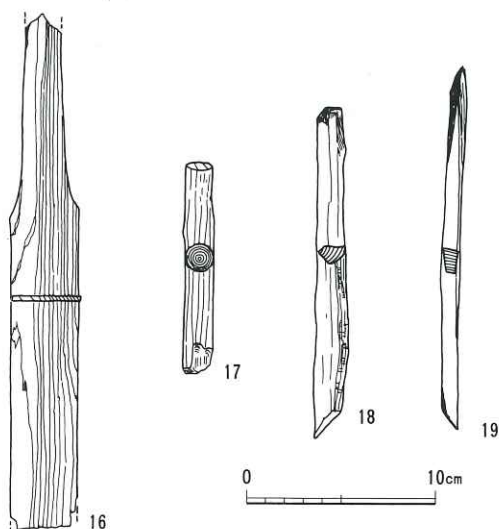


図9 SE-1 杵内出土木器実測図

に貼付けられる背の高いものである。
口径18.8cm、高さ5.6cmである。10~15
は、平城 I、II に相当する時期と考え
られる。

③杵内出土木器 16は匙形木製品で
ある。薄い柾目材の細板から、身と柄
を削りだす。頸部は撥形に削りだす。
全長27cm以上、身の幅4.6cm、柄幅2.3
cm、厚さ0.2cmである。17は、直径1.5
cmの心持丸材を用いたもので、側面は
細かく面取りし、一方の木口は加工し
てある。何らかの柄の可能性はある。

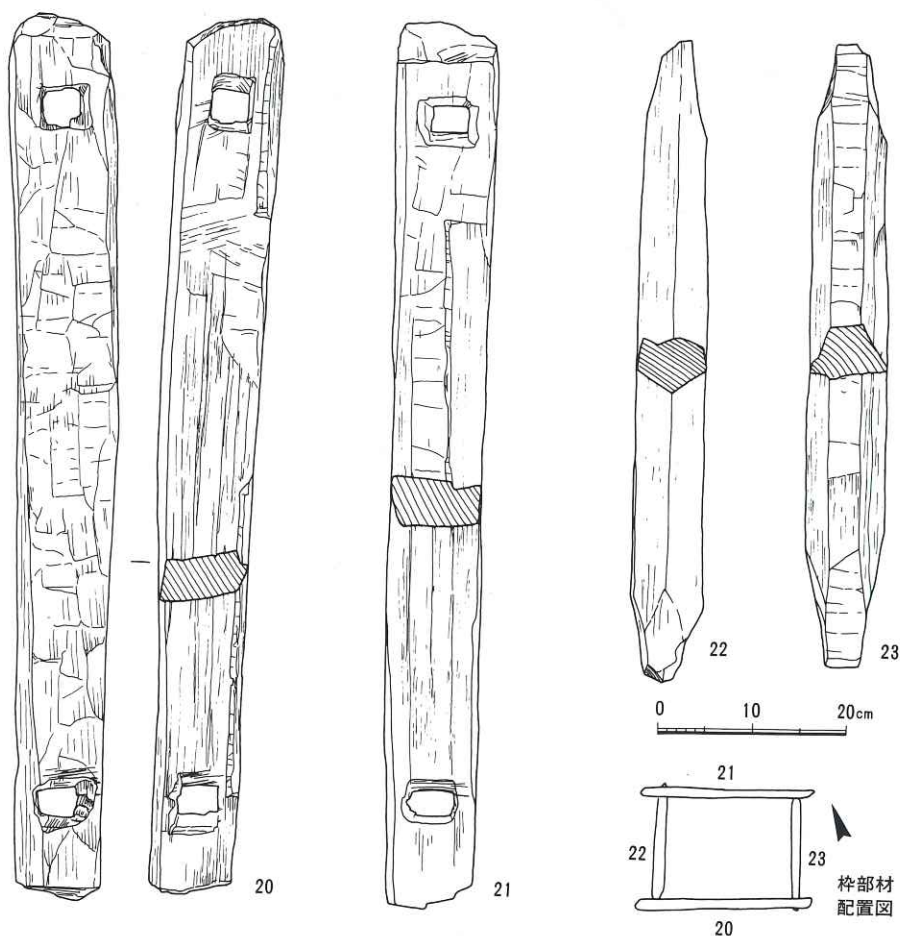


図10 井戸杵部材 実測図

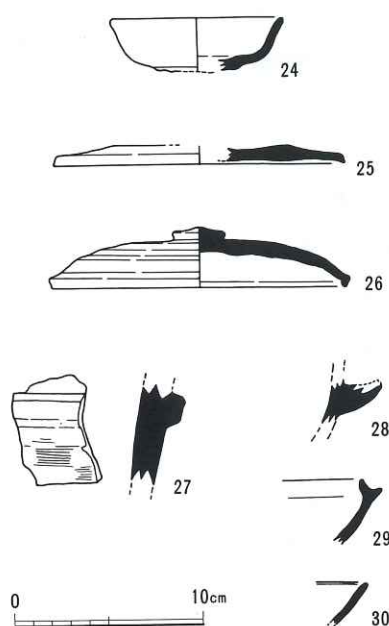


図11 包含層出土土器

18、19は燃えさしで、小割りにした材を用いている。

SE-1 枠内からは、ほかに桃の種子、ヒヨタン類の果皮がみついている。

④井戸枠部材 20、21は井戸枠の長辺材で、両端に方形のホゾ穴を穿つものである。20は全長93cm、幅9～11cmの材をもちい、ホゾ穴は粗くはつてあけられている。枠の外側にあたる面の角に、幅約1cmの切込みが2箇所にあみられる。21は全長93cm、幅10cmの材をもちい、ホゾ穴は粗くはつてあけられる。枠の内側にあたる部分に幅約2.5cmの切込みがみられる。1、2でみられた切込みは枠の他の構造と対応するものとは考えにくく、枠材が何らかの転用材であったと考えられる。22、

23は短辺にもちいられた材である。両端を細く削りだし、長辺材に差込む構造である。22は全長67.5cm、幅6～7cm、断面五角形である。23は全長67.5cm、幅5～7cm、断面台形である。

包含層出土土器 24は須恵器杯身である。底部は未調整で、中村編年Ⅲ-1期に相当する時期である。25、26は須恵器蓋で、25は天井部に丸味があり口縁端部を短かく折り曲げるもの。中村編年Ⅳ-2期に相当する時期である。27は円筒埴輪である。断面台形のタガを貼付け、外面はヨコナデ、内面はタテハケによる。川西編年Ⅳ期に相当する時期である。28は土師器鉢の把手である。29は須恵器杯身で中村編年Ⅱ-5に相当する時期である。30は土師器碗で、鎌倉時代のものである。

注：①金原正明氏の御教示による。

参考文献

奈良国立文化財研究所『平成宮発掘調査報告Ⅵ』1974

〃 『木器集成図録 近畿古代編』1985

中村 浩『和泉陶邑窯の研究』1981

川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978

栗東町史編さん委員会『栗東の歴史 第1巻古代・中世編』1988

（財）栗東町文化体育振興事業団『1990年度年報』1991

4. 考 察

狐塚遺跡出土墨書土器「乞」について

狐塚遺跡の井戸遺構より検出された墨書土器3点は8世紀前半に編年されている。うち1点の須恵器杯身底部の墨書は「大殿」と読め(図12-1)、大規模な建造物を指していると考えられる。

ここで取り上げるのは残る2点、同一墨書のある須恵器と土師器である。須恵器は、六朝風の楷書体(図12-2)、土師器は行書風の書体(図12-3)という差はあるが、杯身底部の墨書は同じく「乞」と読める。この文字は近世文書に用例の多い「乞」の異書体である^①。

「乞」は杯身の底部に書かれた文字であり、記号的なものであろう。所有者名の一部とも思えるが、「乞」字を用いる氏族名ないし個人名は、今のところ知られていない。

さて、本資料はともに同じ井戸遺構から出土している。伴出資料には瓢箪類の果皮や桃種、匙形木器があり、祭祀の行なわれた遺構といえよう。このことから墨書土器「乞」は、乞巧奠の頭文字を省略したものとも考えることができる。乞巧奠の供物に熟瓜(瓢箪はウリ科である)や桃がみられることも参考となろう^②。

乞巧奠は旧暦7月7日、織女にちなんで裁縫に巧みになるのを乞い願う儀式だが、民間では井戸浚えなどの習俗とも結びついている。宮中での乞巧奠は天平勝宝七年(755)に始まる^③、「延喜式」(927年成立)織部司に「七月七日織女祭」と見えるのが七夕祭の文献における初出である。「織女祭」の料物として五色の薄紙や木綿、紙、米、酒などのほかに「坏十口」「銭卅文」が記されている。墨書土器「乞」は、まさにここにいう「坏」に相当するのではなかろうか。儀式用の特別な土器に乞巧奠に使用する意の「乞」を墨書して区分したと考えられよう。

井戸の祭祀と七夕祭(乞巧奠)の関係については、黒川道祐『日次記事』(17世紀後半成立)に近畿地方の7月7日の行事として井戸浚えが見え、酒を供えてこれを祭るという^④。このほか広島藩の地誌『芸藩通志』や『知新集』などから、七夕の井戸浚えは全国的な行事だったのであり、江戸期を通じて七夕の井戸替え行事は広く民間でおこなわれていたのである^⑤。私的で土俗的な行事の性格上、中世以前の文献にはほとんど現われないが、古い

1

2

3

(S=1:1)

図12 SE-1 出土土器

墨書 見取図

起源を持つ可能性は否定できない。

狐塚遺跡のある安養寺区は近年に至るまで灌漑用水の確保に苦勞し、わずかな溜池を水利の頼みとしていた。井戸を含めた水への信仰は、早くから切実なものがあったのではないだろうか。

注：

①立命館大学山尾幸久教授に中国の石文にも「乞」を「乞」、「乾」を「乾」とする例のあることなど史料について多くをご教示いただいた。

②「江家次第」

③「年中行事秘抄」など

④井水。今日村民、家毎に井水を汲み尽し、井底の淤泥^{おでい}を去り、他家の井水を汲みて之に合す。是俗に男水と謂う。しかる後蓋^{しず}を淹め、酒を供えて之を祭る。(原文漢文)

⑤文化元年(1804)成立の広島藩の地誌『芸藩通志』に「七月七日 二星をまつり、井を浚へ、硯を洗ふ、皆他方と同じ、村落或は 牛馬を洗ふ」、文政五年(1822)成立の『知新集』に『井の水を汲みほして新井とす』、嘉永元年(1848)の「下総松戸大谷口村大熊家年中家礼日記行事」にも「同(七月)七日、七夕節句、早朝ニ油そ治御座候」とある。「油そ治」は「ゆ(井)そうじ」の意であろう。)

井上 優(栗東町歴史民俗博物館学芸員)

5. 小 結

本調査区において得られた結果について時期をおってみると、まず、縄文時代には調査区以西の広い範囲で沼沢地が形成されていたと考えられる。沼沢地の落ち際は調査区南東側で検出されたが、当時陸地であったと考えられる部分からは、SK-2が検出された。この土坑の構造は、底に直径20cmのピットがある特殊なものである。これと同様なプランをもつ遺構の例としては、「陥し穴」があり、縄文時代早期末～晩期の各時期に存在する可能性があるという^①。こうした遺構は付近では、草津市横土井遺跡で2基検出されており、報告書によれば時期は特定できないものの、立地条件等から「陥し穴」の可能性が高いとされている^②。本調査区のSK-2は、出土遺物から縄文時代晩期後葉のものと考えられるが、全国例と類似した漏斗状の断面プランで、横土井遺跡と同様沼沢地の沿辺に立地し、また東側には安養寺山があり獲物が得やすい位置にあったことから、動物捕獲用の「陥し穴」と考えて誤りはないであろう。

沼沢地埋没後、奈良時代までに沼沢地の堆積土上に流路が形成される。その最も新しい流路がSR-1で、堆積土はほとんど砂であり、一時的な大水によるものと考えられる。

流路堆積後につくられたものが溝、土壇、井戸、ピットである。溝のうちSD-1、SD-2は切り合いからSD-2→SD-1の順でつくられている。SD-1からは白鳳から奈良時代頃と考えられる須恵器およびこれを遡る時期の土器若干が出土しているだけで、時期判断の決め手には欠ける。しかし、その方位は、後述するSE-1の杵材の主軸方向と同様、真南北方向を相前後するものであることから、SE-1と同様、奈良時代前半のものである可能性がある。とすれば、井戸等屋敷の構成要素をとり囲む区画溝の可能性があるだろう。また、ピットのうちW-10°-Nの方向に並ぶものがあり、井戸と同時期のものと考えられる。SD-5については、出土遺物の示す古墳時代後期に遡る可能性がある。

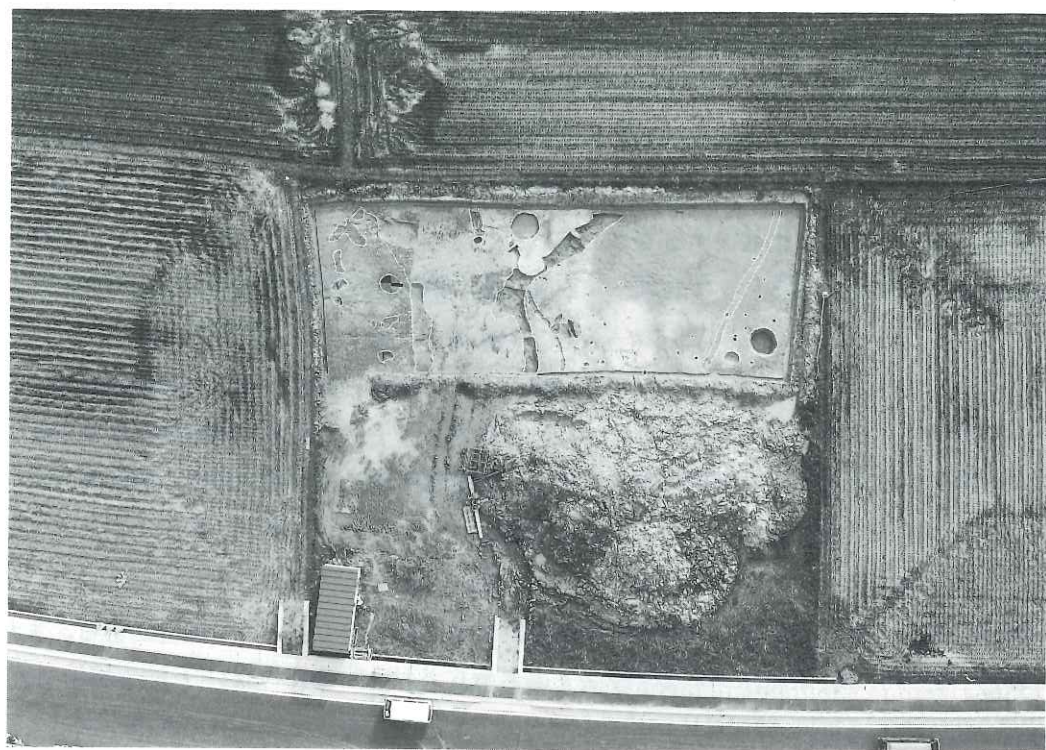
流路堆積土上で時期が特定できるものは、井戸および土壇である。特に注目されるものは井戸杵内からみつかった遺物である。これらは墨書土器を含む須恵器・土師器計6点、木器、種子等が、河原石とともに一括して投棄されたもので、祭祀的な投棄であった可能性が高い。特に墨書土器については、「𪛗」「大殿」と記されており、うち「𪛗」については考察で述べられたように、七夕祭（乞巧奠）に関する字句であった可能性がある。また「大殿」については所属建物を表す字句と考えられるが、「一殿」と記された墨書土器は、官衙と想定される遺跡から出土することが多い。このことは「𪛗」といった他に例をみない墨書の存在も併せて、この井戸の使用者が一般的な階層の人々でなかったことを窺せる。

この井戸は出土した土器から、奈良時代前半に使用されていたものであると考えられる。隣接してみつかったSK-1も、ほぼ同じ時期のもので、前述したSD-1やピット列、SE-1とともに、屋敷を構成していた可能性が高い。

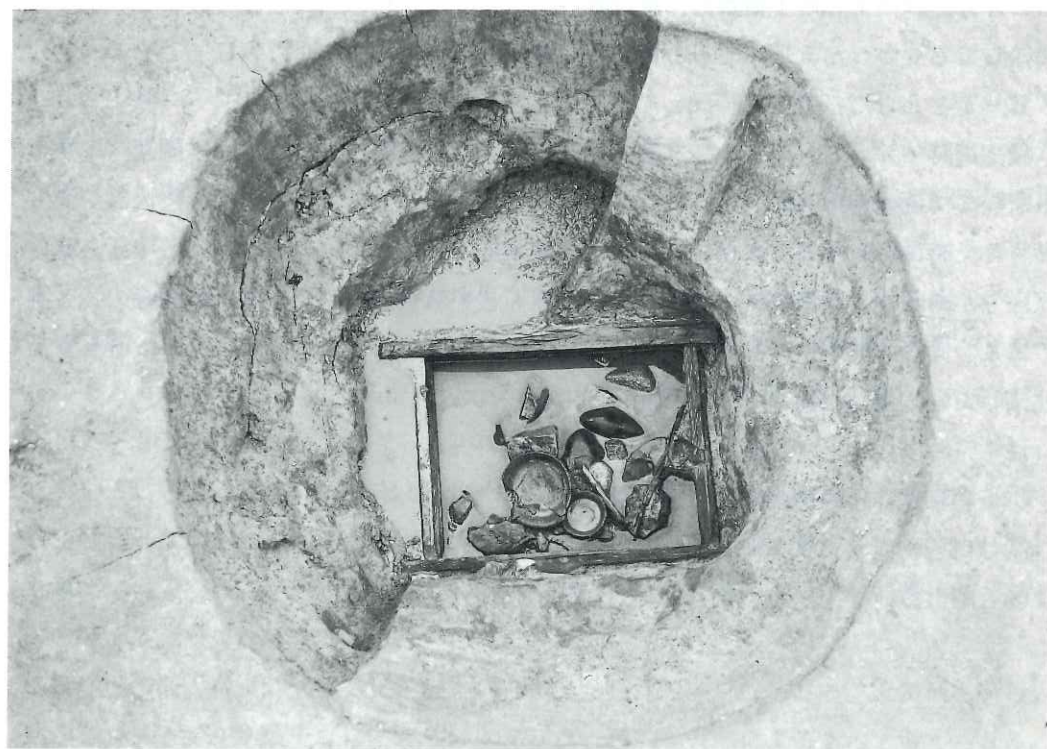
狐塚遺跡において、以上の様な集落が形成された奈良時代前半には、本調査区より金勝川を隔てて西南約1.3kmにある岡遺跡では、栗太郡衙と想定される大規模な建物群が最も整備された時期にあたる。また、本調査区の北東約1kmの地点には白鳳寺院と考えられる手原廃寺があるが、岡遺跡から出土した瓦のうち複弁八葉蓮華文軒丸瓦が同廃寺の瓦と同範であり、両者の関連性が窺われる。今回の調査区は両者の中間地点にあたり、寺と官衙を往来した官人層が居住していた可能性が考えられる。

注：

- ①後藤和民「狩漁撈の技術と変遷」『日本考古学を学ぶ』(2) 1979
- ②谷口智樹「V. まとめ」『横土井（観音寺）遺跡発掘調査報告書』1985
- ③近藤 広「3. 出土遺物」『岡遺跡発掘調査報告書』1990



狐塚遺跡全景



SE-1

SD-1



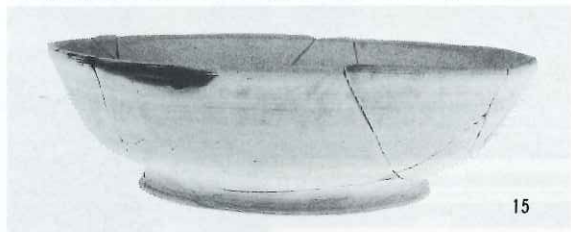
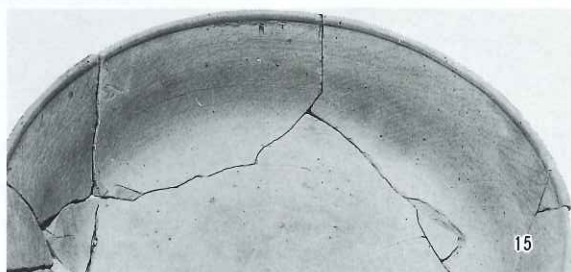
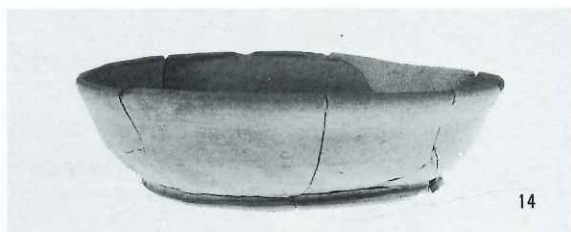
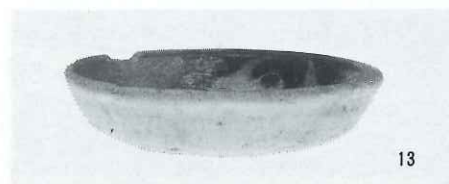
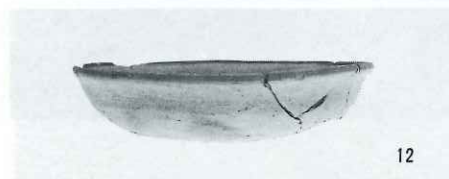
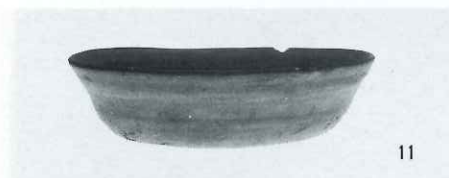
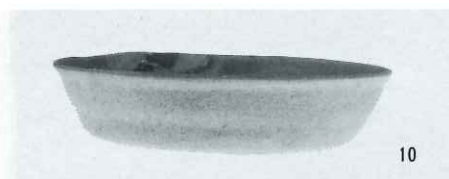
SK-1

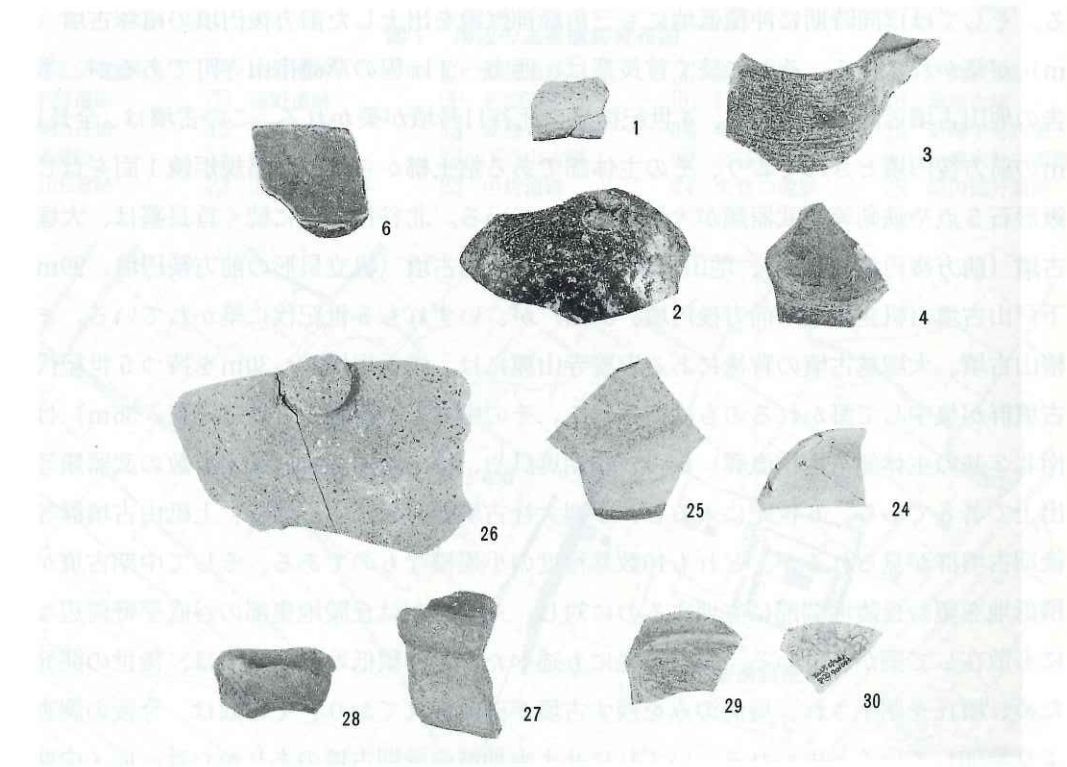
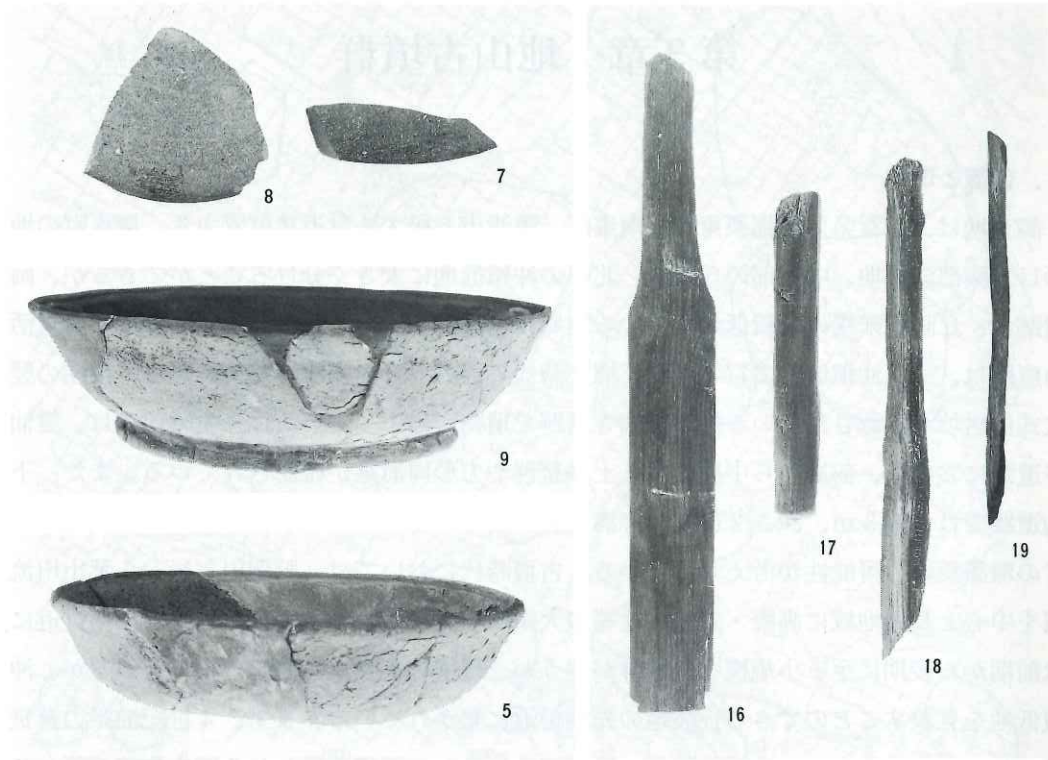


SK-2



図版3 遺物





第3章 地山古墳群

1. 位置と環境

調査地は、滋賀県栗太郡栗東町の南東部、草津市と接する付近に位置する。栗東町の地形は、南部の山地、中央部の丘陵地、北部の沖積低地に大きく分けることができるが、岡遺跡は、丘陵地末端の沖積低地と接する地域に位置している。縄文時代以降の人々の生活の痕跡は、主に沖積低地で営まれる。縄文時代の遺跡では、狐塚遺跡において、後期の竪穴式住居址が確認されている他、霊仙寺遺跡で遺物が出土している。弥生時代では、霊仙寺遺跡において、前期から中期に至る土壇墓群や方形周溝墓が確認されている。また、下鈎遺跡では、幅3m、深さ2mのV字溝が数ヶ所で確認されており、中期から後期にかけての環濠集落の可能性が考えられている。古墳時代においては、野洲川左岸から葉山川流域を中心とした地域に高野・岩畑・辻等の大規模な集落が営まれる。これらの集落付近には前期から後期に至る小規模な古墳群が伴うが、規模の大きな古墳のそのほとんどが、沖積低地を見渡すことのできる丘陵地の先端付近に築かれている。まず、4世紀前半の首長墓としては、丘陵上に三角縁神獣鏡と盤龍鏡を出土した円墳と思われる岡山古墳が築かれる。そしてほぼ同時期に沖積低地にも三角縁神獣鏡を出土した前方後円墳の亀塚古墳(44m)が築かれている。それに続く首長墓は、西方へ4km程の草津市山寺町であるが、本報告の地山古墳と同一丘陵上に、4世紀後半の北谷11号墳が築かれる。この古墳は、全長105mの前方後円墳とされており、その主体部である粘土槨からは、方格規矩鏡1面をはじめ、鉄剣5点や鉄剣等の武器類が大量に出土している。北谷11号墳に続く首長墓は、大塚越古墳(前方後円墳、77m)、地山古墳(91m)、椿山古墳(帆立貝形の前方後円墳、99m)、下戸山古墳(帆立貝形の前方後円墳、60m)が、いずれも5世紀代に築かれている。また、椿山古墳、大塚越古墳の背後にある安養寺山麓には、墳丘規模20~30mを持つ5世紀代の古墳群が集中して築かれるのも注目される。その中でも、新開1号墳(円墳、36m)は、南北2基の主体部(木棺直葬)から、初期馬具や、冑・短甲等の武具・多数の武器類等の出土で著名である。6世紀に入ると、小槻大社古墳群、和田山古墳群、上砥山古墳群等の後期古墳群が見られるが、どれも10数基程度の小規模なものである。そして中期古墳が沖積低地を望む丘陵地端部に立地するのに対し、その分布は丘陵地奥部の谷底平野周辺などにも散在して築かれている。また、先にも述べたが、沖積低地においては、後世の開発のため、墳丘を削平され、周溝のみを残す古墳が確認されており、その数は、今後の調査により増加していくと思われる。いずれにせよ当地域の後期古墳のありかたは、前・中期古

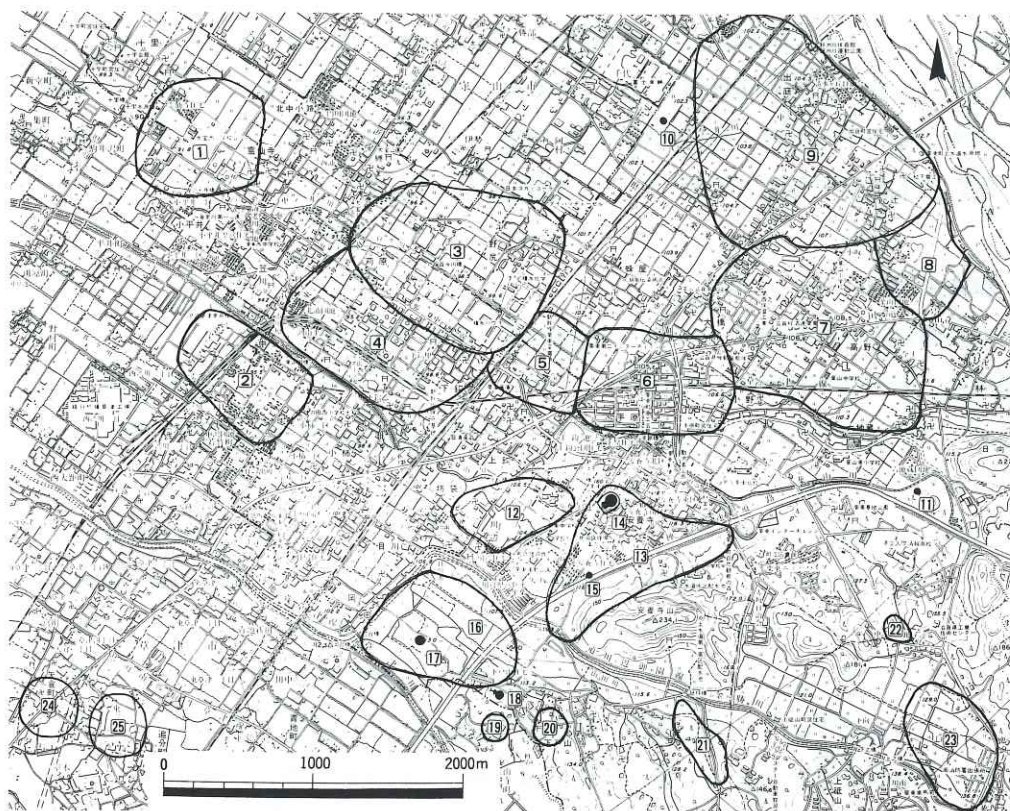


図1 周辺の主要遺跡分布図

- | | | | | |
|---------|----------|----------|---------|-----------|
| ① 霊仙寺遺跡 | ② 中沢遺跡 | ③ 野尻遺跡 | ④ 下鉤遺跡 | ⑤ 下鉤東遺跡 |
| ⑥ 手原遺跡 | ⑦ 高野遺跡 | ⑧ 岩畑遺跡 | ⑨ 辻遺跡 | ⑩ 亀塚古墳 |
| ⑪ 岡山古墳 | ⑫ 狐塚古墳 | ⑬ 安養寺古墳群 | ⑭ 椿山古墳 | ⑮ 新開1号古墳 |
| ⑯ 岡遺跡 | ⑰ 地山古墳 | ⑱ 下戸山古墳 | ⑲ 北谷古墳群 | ⑳ 小槻大社古墳群 |
| ㉑ 山田遺跡 | ㉒ 上砥山古墳群 | ㉓ 中村遺跡 | ㉔ 矢倉口遺跡 | ㉕ 岡田追分遺跡 |

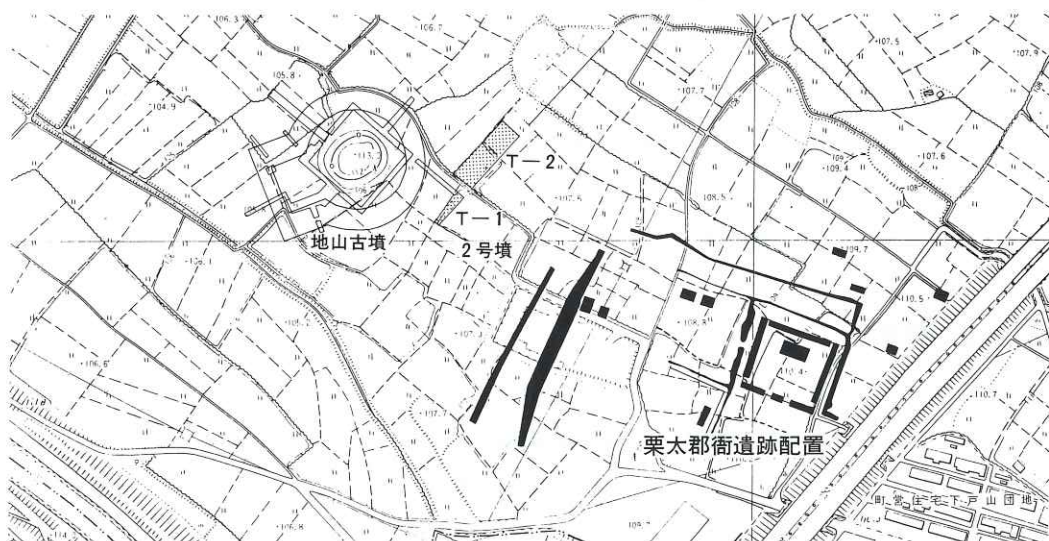


図2 調査地位置図

墳とは対象的で、その質量ともに他地域から抜き出た内容のものとはいえない。

歴史時代の地山古墳周辺地域では、7世紀に山田遺跡で窯跡群が、8世紀には岡遺跡に栗太郡衙が存在するなど、周辺地域の中心地的存在となる。また、この地域は、古代豪族の小槻氏の本拠地であることがこれらの遺跡と深く関わっていると考えられる。

2. 調査の経緯

地山古墳群は、岡遺跡内に存在する古墳群を指す。岡遺跡では、1985年から団体営圃場整備に伴い発掘調査が継続して進められている。また、1989年には、名神高速道路の拡幅工事に先立ち滋賀県により調査が実施された。本報告の地山古墳群の調査は、圃場整備に伴う第5次調査にあたる。

岡遺跡は、古墳時代から近世に至る複合遺跡であるが、その中心は古墳時代から平安時代である。過去の調査は、岡遺跡発掘調査報告書に詳しいが、その時期変遷を簡単に見ていくと、I期は、6世紀から7世紀中頃で、方墳の周溝（7基）と方形竪穴式住居による集落の時期。II期は、7世紀後半から8世紀初頭で、官衙的様相を見せはじめの時期。III・IV期は、8世紀前半から9世紀末で、近江国栗太郡衙として機能していたと推定される時期。そして10世紀になると大規模な建物群は廃絶し、15世紀以降には水田化される。以上が岡遺跡の遺構群の変遷であるが、調査地からは、少量ではあるが、縄文時代の石器類や、布留式併行期・6世紀初頭の土器片が出土しており、I期の6世紀末より遡る遺構の存在も考えられていた。そして本報告の地山古墳については、水田中に墳丘を残す、唯一の古墳であったが、埴輪や土器片等の遺物は知られておらず、その築造年代等は不明であった。古墳調査前の状態は、墳丘の直径56m、高さ6mの円墳で、畦畔の状況から周濠を持つと推定されていた。時期的には、円墳という墳丘形態と、隣接地から6世紀初頭の須恵器が出土していることから、一応6世紀代であろうと考えられていた。

また、調査前に現地踏査や、地籍図の観察等から墳丘・周濠形態の検討を行った。その結果、墳丘周囲を円形に巡る畦畔は北東側のみであり、南西側に前方部や造り出しが存在する可能性も高いという推定がもたれた。

3. 調査の概要

圃場整備に伴う今回の第5次調査は、切土部分のT-1・2、及び地山古墳周囲の水路部分T-5・6・7・8・9について調査を実施した。また、その他の調査区T-10・11・12・13・14・15については、古墳の形態、規模の確認のため設定したトレンチである。

T-10は、北東側に残る畦畔から、周濠の存在が以前から指摘されていた地点であり、

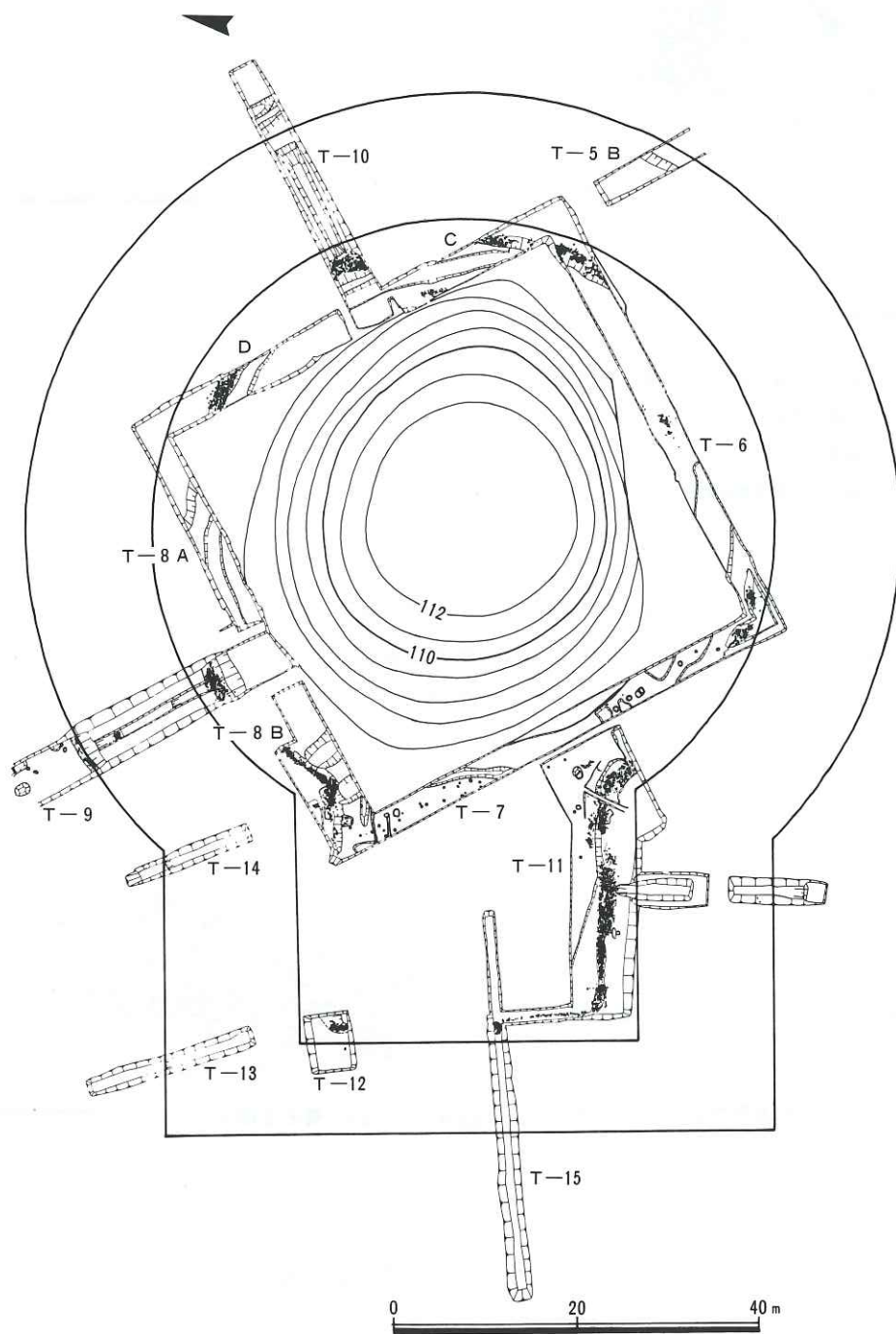


図3 地山古墳トレンチ配置及び遺構図

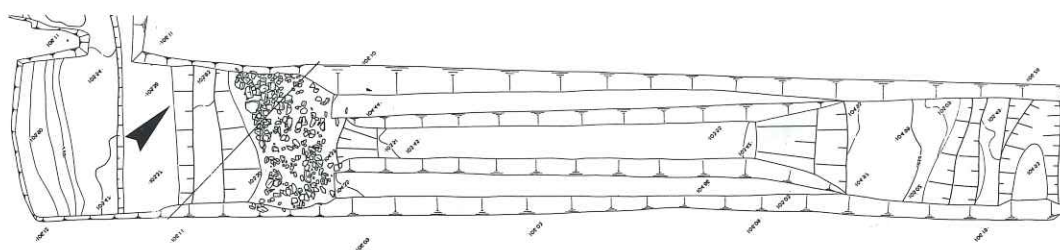
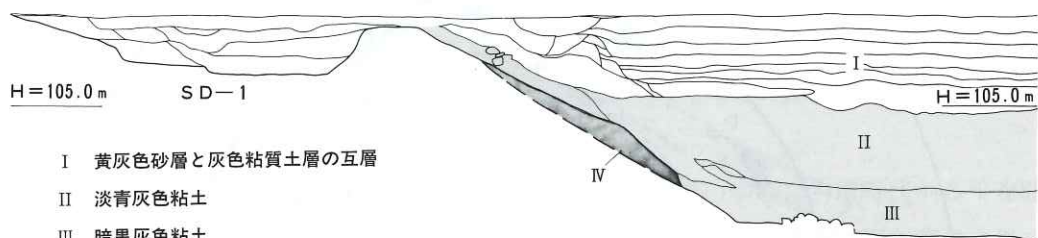
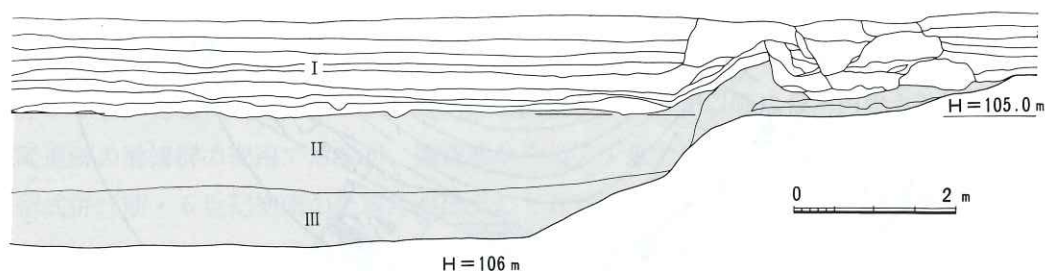


図4 T-10 平面図 (S=1/200)



- I 黄灰色砂層と灰色粘質土層の互層
- II 淡青灰色粘土
- III 暗黒灰色粘土
- IV 葦石及び崩落葦石範囲



H=106 m

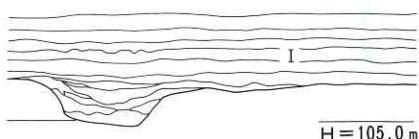


図5 T-10 周濠断面図 (S=1/100)

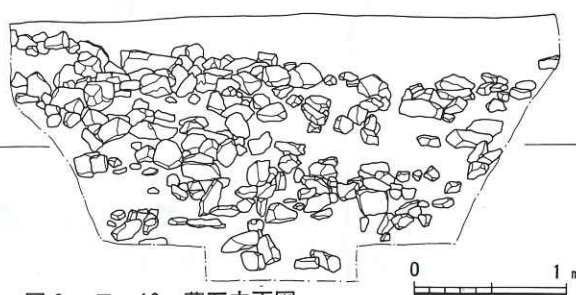


図6 T-10 葦石立面図

現状の墳丘に直交するようにトレンチを設けた。また、T-8で北側のくびれ部を検出したことにより、前方部の存在が確認されたため、T-11を設け、南側のくびれ部と前方部の規模、形態を確認する事にした。T-12は、前方部前面幅、T-13・14・15は前方部側面及び前面の周濠幅の確認のために設定した。なお、T-9・10については周濠底部まで完掘したが、他のトレンチでは、規模・形態の確認を目的としたため、周濠の中位までの掘り下げでとどめた。葦石部分についても、基底部までは検出を行わなかった。以下完掘

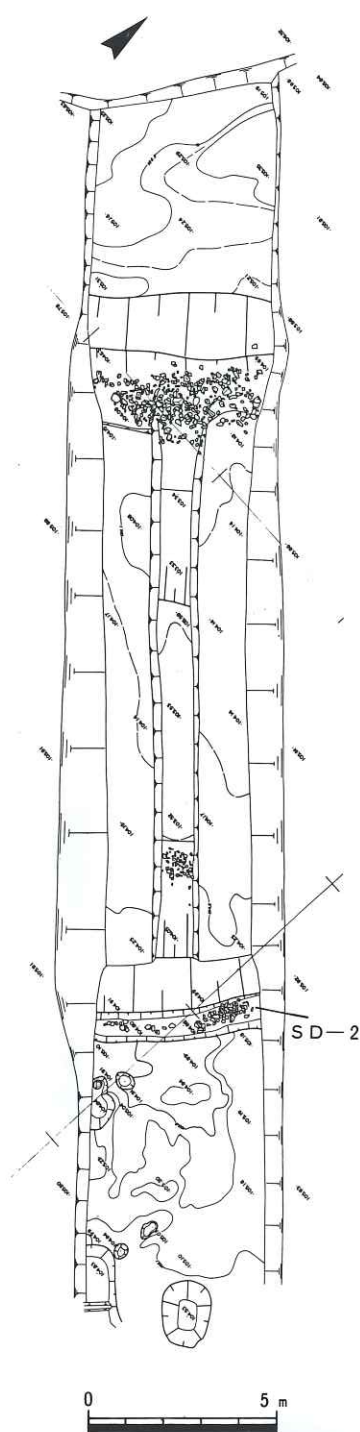


図7 T-9 平面図 (S=1/200)

したT-1・2・9・10のうちT-1・9・10の遺構・遺物の説明をしていきたい。

T-10は、幅4m、長さ30mのトレンチで、葦石の有無、周濠の規模の確認を目的として掘り込みを行った。その結果、現状の墳丘裾より約5mで周濠の落ちを確認し、その間には、近代の溝(SD-1)を検出した。周濠の幅は13m、深さは遺構検出面から最深部で2.8mを測る。埋土は大別すると3層に分けられ、I層は粘質土と砂粒の互層で数度の洪水等により短期間に堆積している。それに対してII・III層は、粘土層でゆるやかな堆積状況をしめしている。遺物はII層から16世紀後半の灰釉皿が1点出土している。

葦石は墳丘基底部から測ると、墳丘側に0.7mから2.5m。高さ0.4mから2mの範囲に遺存していたが、基底石列等の葦石の並びは明確ではなく、周濠底部には、崩落した葦石が多く認められた。また、葦石中には埴輪片が混入した状態で出土している。

T-9は、水路部分の幅5m、長さ50mの調査区である。T-10と同様に、現状の墳丘裾から5mの地点で周

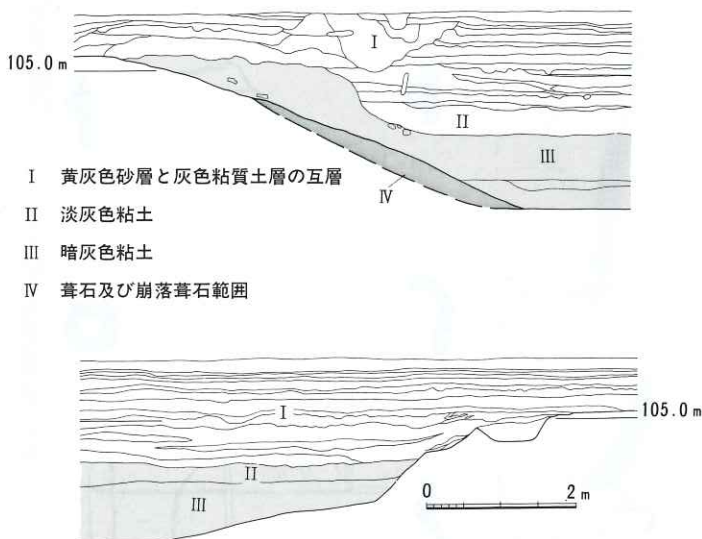


図8 T-9 周濠内土層 断面図 (S=1/100)

濠の落ちが始まる。周濠の幅は14.5m、深さは最深部で遺構検出面から2.6mを測る。埋土もT-10とほぼ同様に、3層に大別できる。上層は粘質土と砂層の互層、II・III層は粘土層である。出土遺物は無いが、I層中では、粘土層面に人や牛または馬と思われる動物の足跡を検出した。足跡には洪水砂が入っており、明確に検出することができた。周濠外縁部には、濠に沿うように幅0.9m、深さ0.3mの溝SD-2を検出した。溝の時期は近世と思われるが、溝内部には、葦石に使われているものと同様の石材が堆積していた。また、周濠外縁基底付近にも集石があり、これらは、周濠外堤等の施設に使われていた石材の可能性も考えられる。

葦石は、墳丘基底部から測ると、墳丘側へ1.0mから3m、高さ0.3mから1.5mの範囲で認められたが、遺存状態は悪い。また、削平された墳丘から崩落してきた葦石もかなり堆積しており、その中には埴輪片が混入した状態で出土している。

出土遺物 各トレンチから埴輪片が出土している。T-11では墳丘削平面と葦石内から、他はすべて葦石や、崩落した葦石内からの出土で、現位置を保ったものはない。

色調は、淡黄橙色と濁乳白色のものがあ、黒灰色の黒斑をもつ。胎土は直径1～2mmの砂粒を少量含み、焼成は良好である。

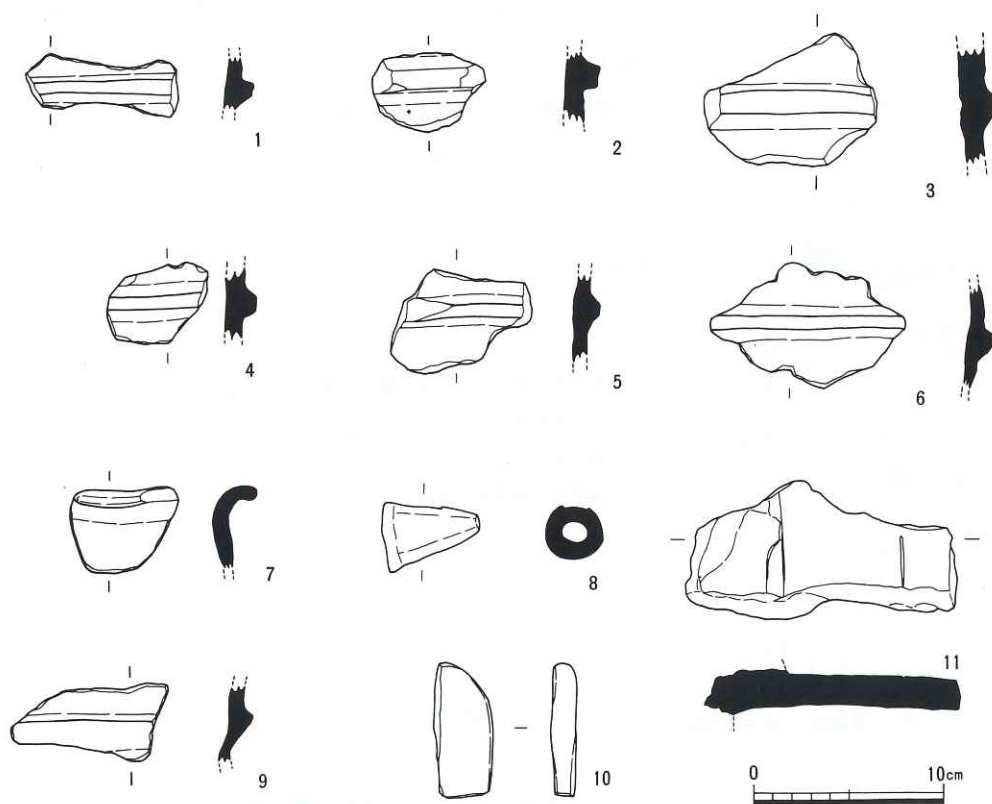


図9 地山古墳出土遺物(1)

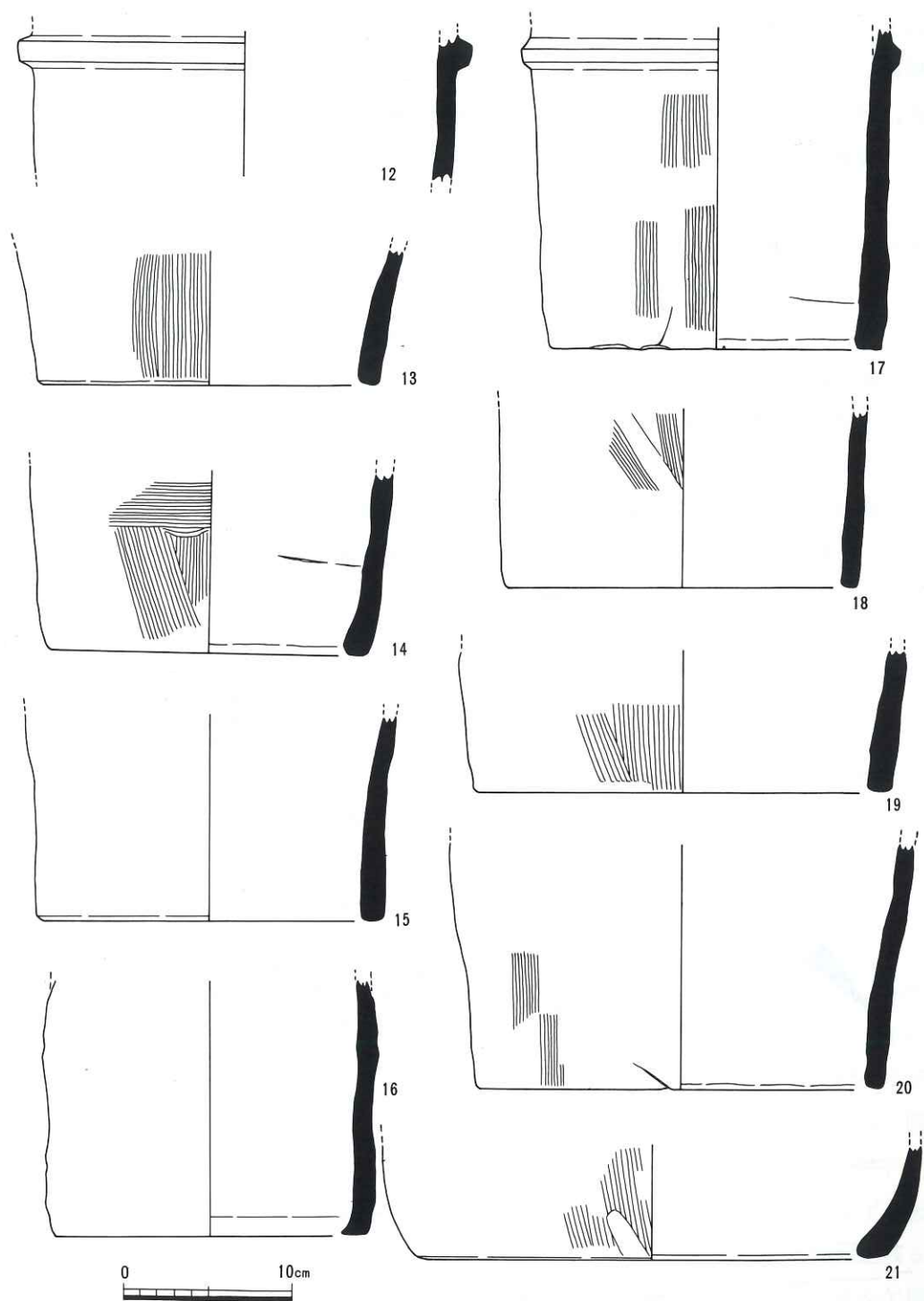
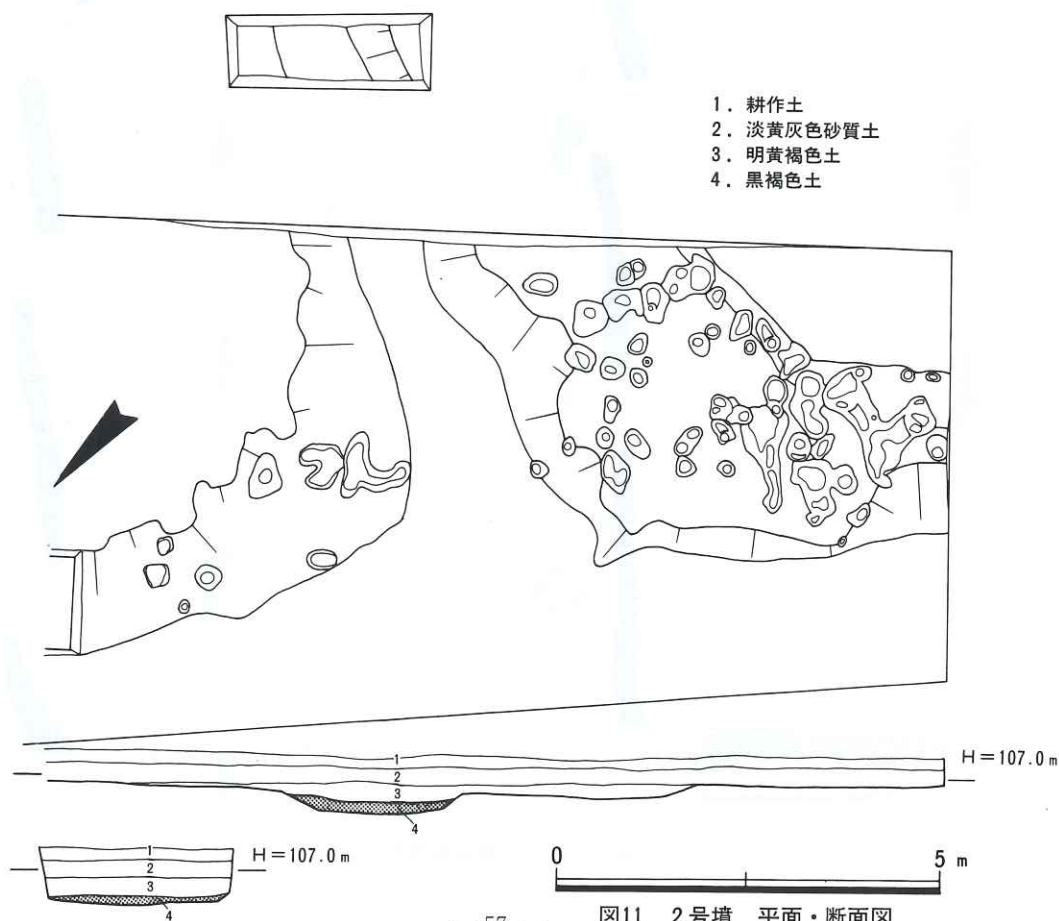


图10 地山古墳出土遺物(2)

1～6は円筒形埴輪のタガが付く破片である。タガの断面形態は全体に台形であるが、3のように突出度の極度に低いものもある。7～11は不明埴輪で、8は動物の尻尾、11は家形の一部であろうか。12～21は径を復原できた個体で、12をのぞきすべて底部である。底径は28～19cmを測る。内外面の調整は、表面の剝離がはげしく調整の見えないものが多いが、調整の見えるものは、タテハケ・ナナメハケである。15は唯一2次調整にヨコハケを施している。底部調整は行っておらず、17・18は底部に粘土紐の接合痕を残している。

T-1 (2号墳)

28m×5m水路及び切土部分の調査区である。地山古墳の南東側20m地点にあたる。周囲はすべて田地であったが、この調査区の南西側は畑地として使用されていた。その調査区南西端において、幅約2.5m、深さ0.5mの溝状の遺構を検出した。その溝の埋土である黒褐色土層から多数の埴輪片が出土した。また、調査区外であるが、溝の延長地点に2.5×1mのトレンチを設け掘り込んだところ、やはり黒褐色土層から埴輪の出土をみた。調査区が小規模なため、その形態等は不明であるが、この溝を古墳の周溝と考え、これを2号墳とした。溝の南側には幅約2.5mのテラス状の部分があり、その南端には削平された墳丘



と思われる部分が残存している。また、テラスには、不整形のピット状の穴が多数確認されたが、その性格は不明である。

2号墳周溝から出土した遺物は、コンテナに約1箱分である。そのほとんどが円筒形埴輪の小破片であるが、鶏・衣蓋・家等の形象埴輪も出土している。それらの胎土は石英・長石を含むもので、焼成は良好である。色調はすべて濁乳白色を程し、各所に暗灰色の黒斑がみられる。

円筒形埴輪 口縁部の破片は数点出土したが、いずれも小さな破片であり、口径を復原できたものは図示した2点のみである。22・23ともに口径は24cmで、外開きぎみに延びてきた口縁が、端部近くで折れ曲がるように外反している。内外面調整は、ハケ目は見られず、ていねいなナデ調整である。内外面に赤色顔料を塗布する。また、23の内面にはヘラによる線刻が二条みられる。24・25は胴部破片である。方形透孔をもつもので、タガは剝離している。調整は内外面ともナデにより、外面には赤色顔料が塗布されている。25は方形透孔をもち、ヨコナデにより端面が内湾したタガを有する。調整は外面はナデで内面は指によるナデあげの痕がみられる。胴部破片で透孔のみられるものは他に2点あるが、いずれも方形の透孔である。また、タガの形態は25に見られるような強くヨコナデしたものと26・27のように台形に近いものがあるが、その割合に大きな差は認められない。

朝顔形円筒埴輪 28は、朝顔形円筒埴輪の破片と思われ、断面三角形の突帯が付き、外面に赤色顔料の塗布がみられる。

不明埴輪 (29・30・31) 29は剝離面が直線的なもので、表面は一部をのぞき剝離しており調整等不明である。30は板状のものにヘラによる線刻がされている。2本線の間に0.6~0.8cmの間隔で6本の線がみえる。家形の屋根など一部であろうか。31は平坦面をていねいにナデているもので、赤色顔料が塗布されている。家形の一部ともと思われるが、剝離面がややカーブしているようにも見える。同様なものが他に1点出土している。

形象埴輪・衣蓋 32は立ち飾りの一部である。表裏に同様の線刻がされており、赤色顔料を塗布する。33は立ち飾りの軸をさし込む軸受部で、やや外に開く口縁部のすぐ下に断面台形のタガを付ける。内外面ナデ調整で赤色顔料を塗布している。34は笠部であるが、笠上半部・台部の付く部分。笠下半部の3点は接合はできないものであったが、同一個体であるのは確実と思われたので復元して実測した。笠部の径は34cmを測る。笠下半部の布貼りの表現は、2条の円周を描く沈線の内に、放射状沈線を互い違いに1条ずつ配している。全体には丁寧なナデで仕上げられており、笠上半部の破片には赤色顔料が残る。35は鶏の首から頭部で、胴部からはがれ落ちたものである。トサカと肉髯の一部を欠損しているが、写実的につくられたものである。クチバシとトサカの間にあるくぼみには赤色

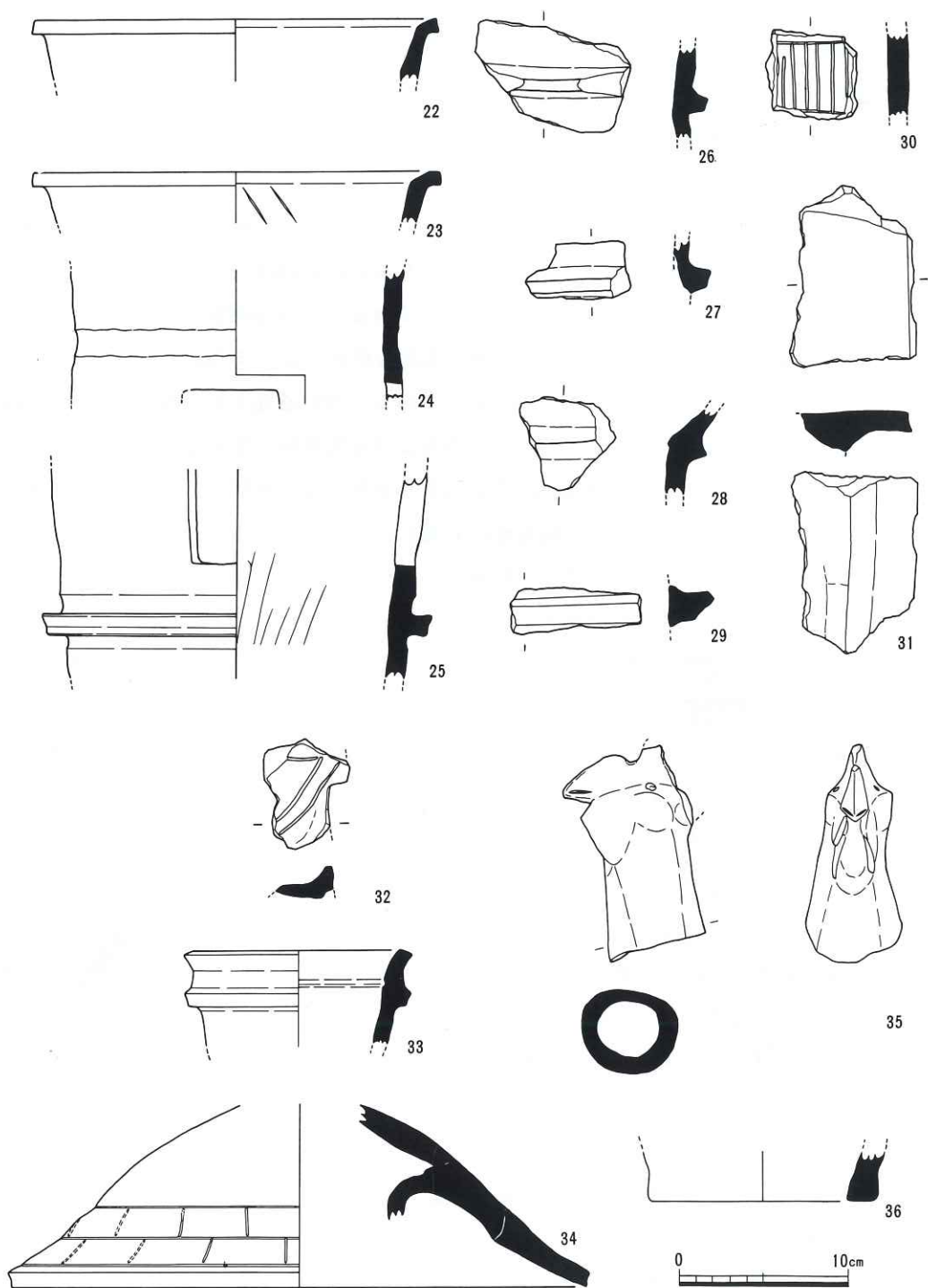


图12 2号墳出土遺物

顔料が残っている。以上、2号墳の埴輪は全体に小ぶりで丁寧な作りであることが特徴であろう。時期的には4世紀後葉、古墳時代前期後半と考えられる。

4. 小 結

今回の調査では、地山古墳の前方部の検出、周濠の規模、葺石、埴輪の存在。また、2号墳の発見等の新事実があった。

地山古墳は前方部の短い帆立貝形の前方後円墳で、その規模は墳長91m、後円部直径72m、高さ6m、前方部長19m、幅はクビレ部、前方部前面ともに8.2mである。そして、出土した円筒形埴輪からその築造時期は古墳時代の中期、5世紀前半と考えられる。

墳丘の削平は後円部南側において約10m、他の削平の少ない場所でも5mの削平を受けている。また、墳頂部については低平な感じを受けるが、盗掘坑らしき窪みの無いことや遺物などが出土したという伝承も無いことを考えると主体部の残存する可能性もある。

前方部については、後円部の段築一段目に対応するだけの墳丘であったと考えれば、元々低平な墳丘であったと推定される。前方部の削平時期は、T-7・11において13世紀の掘立柱建物、溝、井戸を検出しており、少なくとも鎌倉時代には現在とほぼ同レベルであったことがわかる。

周濠はT-9・10において底部まで完掘を行った。前にも述べたが、上層は砂層と粘土層の互層で、下層は粘土層である。下層からは16世紀後半の土器が出土しており、近世初頭の段階では、周濠は中位までしか埋没していなかったことがわかるが、ある時期から砂層の堆積が始まり急速に埋没していく、その原因は地山古墳群・岡遺跡の3方を囲むように流れる草津川・金勝川の両天井川にあるものと思われる。遺跡は丘陵地の先端付近に位置し、沖積低地より標高は高いので河川の氾濫により洪水砂の影響を受けることはないのであるが、天井川の形成により、その堤防の遺跡側が決壊するたびに逃げ場の無くなった洪水砂が堆積したものと思われる。T-10の周濠外堤側の水路と畦畔は数度の作り変えがなされて、現在まで存続していた。

地山古墳南東側20m地点で新たに発見された2号墳は調査区に限られていたためその墳丘形態等詳細は不明であるが、出土した埴輪は4世紀後葉の特徴を示しており、周辺地域において最も古い埴輪をもつ古墳であることが明らかになった。4世紀の埴輪を出土している古墳は、南東約700mに存在した首長墓である北谷11号墳があげられ、その関係も注目される。また、地山古墳は帆立貝形の前方後円墳としては県下でも最大級の規模であり、特に北東1.5kmに所在する県下最大の帆立貝形の前方後円墳である椿山古墳（5世紀中頃・墳長98m）とは規模や形態、墳丘の主軸方位等類似点も多く興味深い。

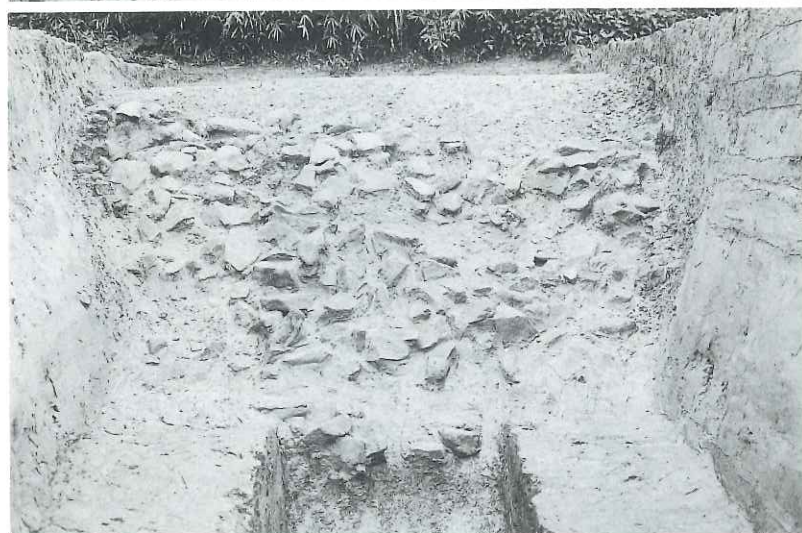


全景航空写真

右下プレハブ前が2号墳



T-10
周濠調査風景



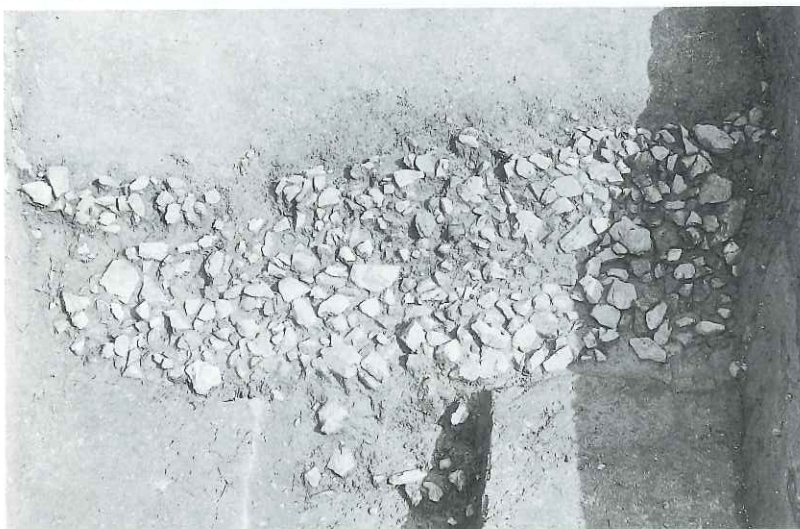
T-10
葺石検出状況



T-8B
クビレ部葺石検出状況



T-9
周濠全景



T-9
葺石検出状況

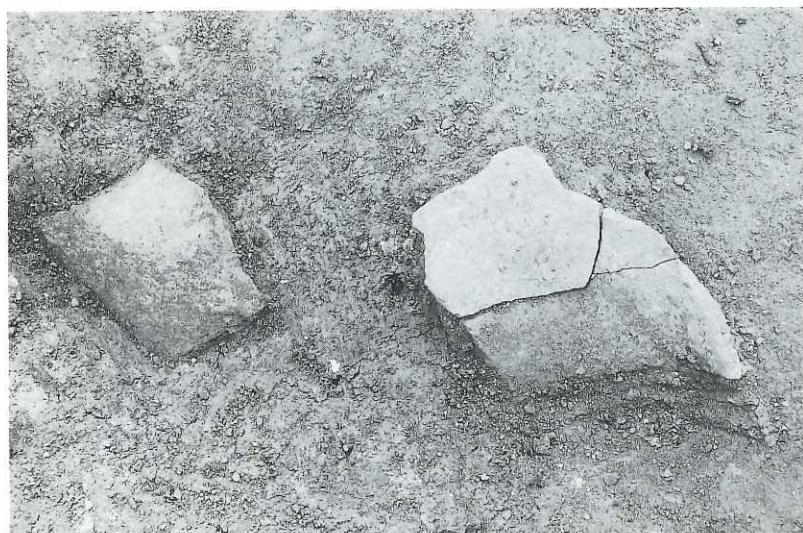


T-11 全景
南側クビレ部及び前方部

図版4
遺構



現地説明会風景
前方部から後円部を望む



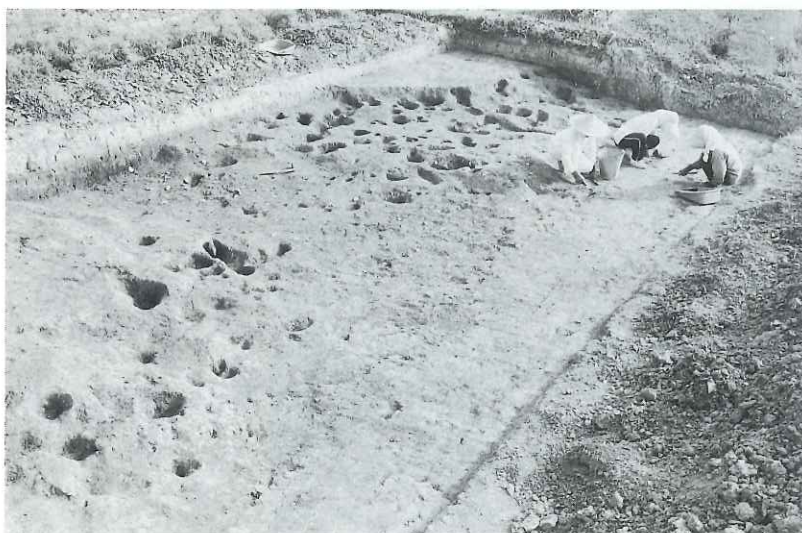
T-11
クビレ部埴輪出土状況



後円部樹木伐採風景



T-1
2号墳完掘状況

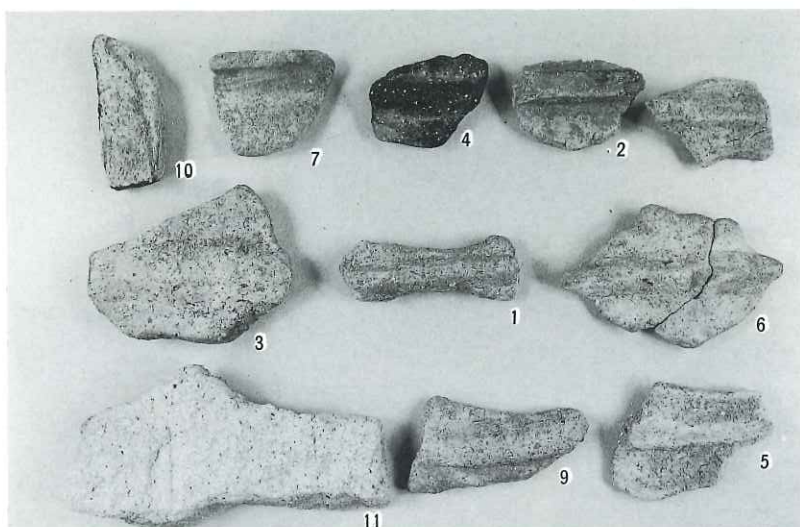


T-2
2号墳作業風景

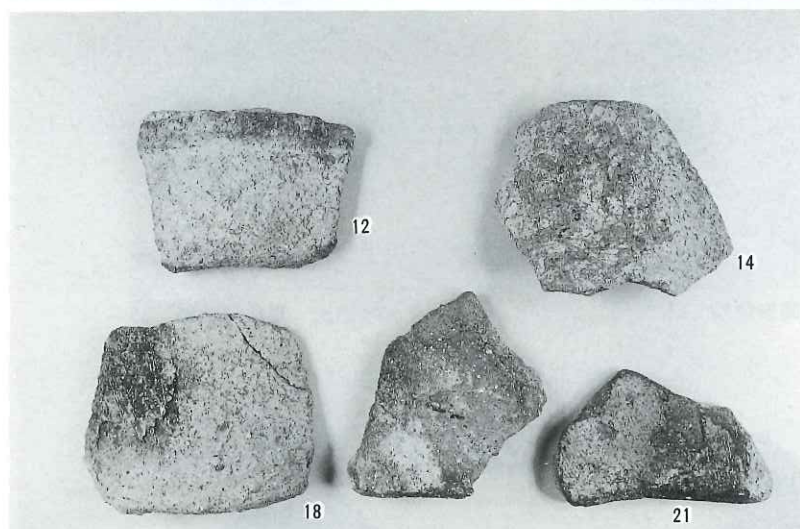


形象埴輪鶏出土状況

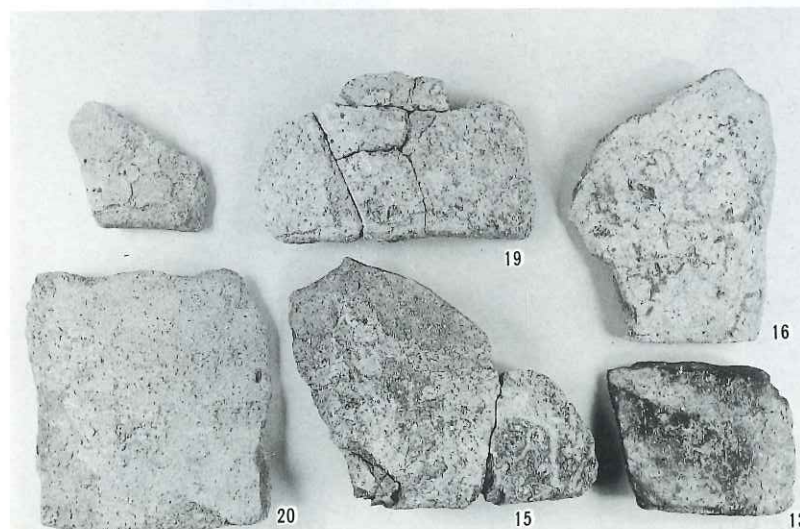
図版6 遺物



地山古墳出土
円筒形埴輪・形象埴輪



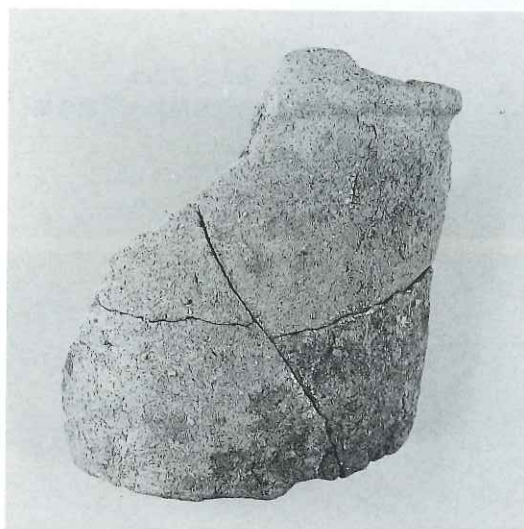
地山古墳出土
円筒形埴輪



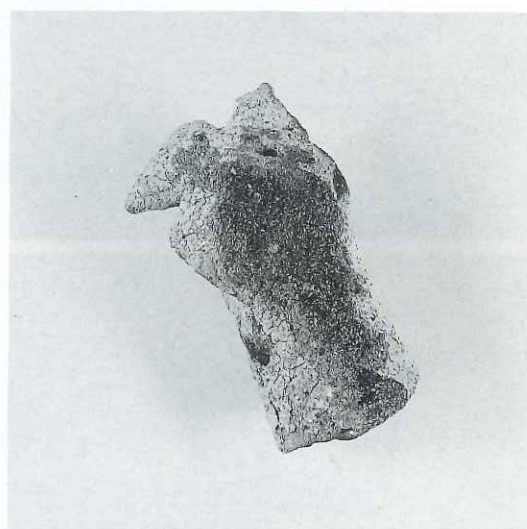
地山古墳出土
円筒形埴輪



地山古墳出土
形象埴輪
動物尻尾 8



地山古墳出土円筒形埴輪 17



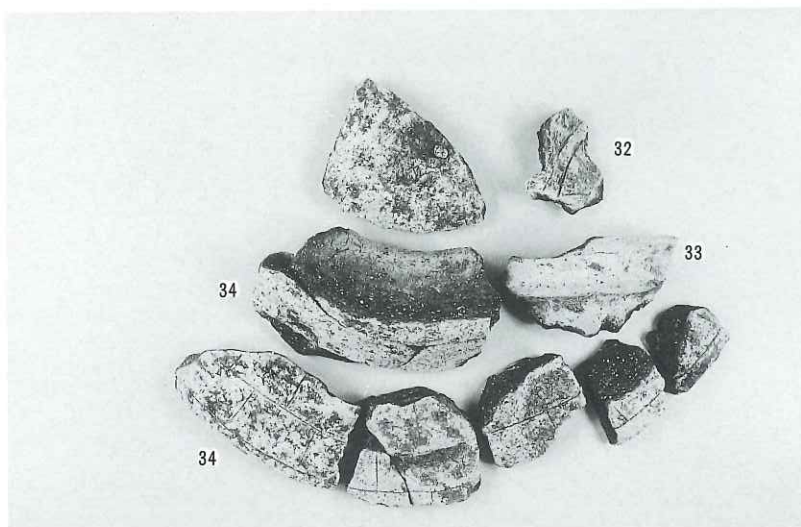
2号墳出土 形象埴輪鶏 35



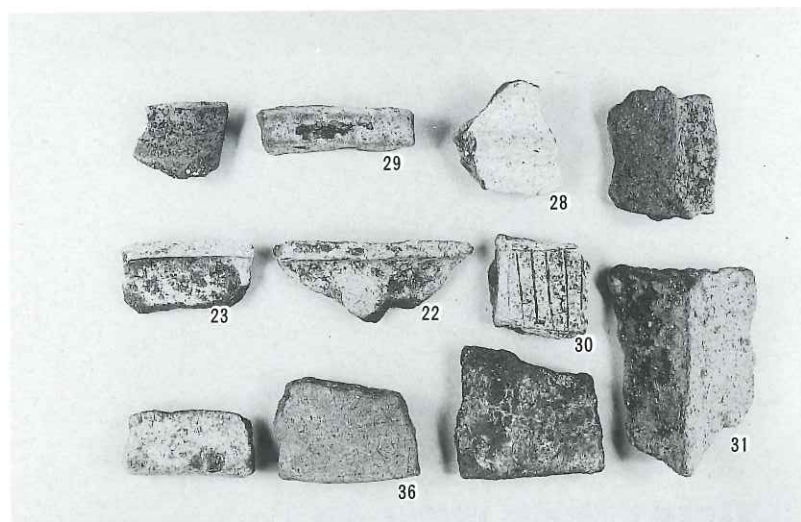
鶏（左斜めから）



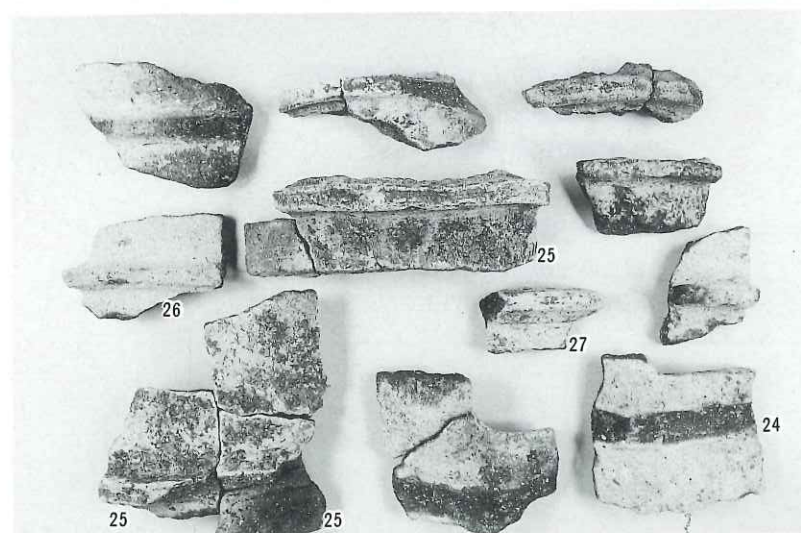
鶏（正面）



2号墳出土
形象埴輪衣蓋



2号墳出土
円筒形埴輪
形象埴輪



2号墳出土
円筒形埴輪

栗東町埋蔵文化財調査 1990年度 年報Ⅱ

発 行 日 平成4年3月31日

編集・発行 (財)栗東町文化体育振興事業団
滋賀県栗太郡栗東町川辺390-1
栗東町民体育館内
TEL.0775-53-4321

印刷・製本 宮川印刷株式会社
滋賀県大津市富士見台3-18
TEL.0775-33-1241

正 誤 表

ページ	誤	正
例言 5.	栗東町歴史民俗博物館学芸員	栗東歴史民俗博物館学芸員
P-21 10行目	(表3)	(表4)
P-43 17行目	(栗東町歴史民俗博物館)	(栗東歴史民俗博物館)
P-60 7行目 8行目	墳長91m、後円部直径72m 前方部長19m、 前方部前面ともに8.2m	墳長90m、後円部直径68m 前方部長22m、 前方部前面ともに37m